

中東遺跡第6地点（4次）・
第7地点
発掘調査報告書

2016.3

埼玉県入間郡三芳町教育委員会



中東遺跡第6地点(4次) 石器集中5(旧石器時代 第VI層) 台石を中心とした遺物の出土状況



中東遺跡第7地点 集石1(縄文時代)

巻頭図版 2



第Ⅲ層 ナイフ形石器 第6地点(4次)



第Ⅵ層 ナイフ形石器 第6地点(4次)



第Ⅶ層 ナイフ形石器 第6地点(4次)



第Ⅶ層 接合資料-6 第6地点(4次)



第Ⅶ層～第Ⅸ層 接合資料-5 第6地点(4次)

はじめに

三芳町は、都心から約 30kmの武蔵野台地北東部縁辺に位置し、そのほとんどが水に乏しい関東ローム層に覆われています。

特に、町の西部域は河川もなく武蔵野と呼ばれた茅原が広がるのみで、江戸時代の新田開拓を待たなければ集落は存在しなかったといわれた地域でもあります。その開拓の一環として元禄 7 年（1694）に川越藩主柳沢吉保の命により実施された三富新田の開拓地は、現在、埼玉県の旧跡「三富開拓地割遺跡」に指定され、屋敷地・畑・雑木林を 1 区画とする短冊型の地割景観が今なお残されています。

1990 年代に入り、それまで江戸時代初期以前の生活の痕跡が確認できなかった町の西部域において、埋没した河川の存在とそれに沿った遺跡の存在が確認され始め、特に旧石器時代を中心とした人々の生活の痕跡が明らかにされつつあります。

本書で報告する「中東遺跡第 6 地点（4 次）・第 7 地点」の調査では、旧石器時代の人々が石器製作を行った痕跡が 14 箇所、礫群 1 箇所、縄文時代の集石が 1 箇所と、数々の新たな発見がありました。同じ場所で複数の時期の石器作りの跡が重なって発見されていることから、長い年月の間、中東遺跡の水辺が狩猟の場として好適地であったことが想像されます。

古くは 32,000 年前もの昔に遡る人々の暮らしの一端を記録した本書が、考古学研究の基礎資料となるとともに、地域における埋蔵文化財への理解と関心を高める一助となることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査にあたり多大なるご理解とご協力を賜りました関係各位に厚く御礼を申し上げます。

三芳町教育委員会
教育長 桑原孝昭

例言

1. 本書は、埼玉県入間郡三芳町大字上富字中東に所在する中東遺跡(県遺跡番号 32-020)における、倉庫増築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査・整理作業・報告書刊行は、株式会社武蔵野ロジスティクスから三芳町教育委員会が委託を受け実施した。
3. 発掘調査・整理作業・報告書刊行にかかる事業経費総額 7,470,000 円のうち、6,770,000 円を株式会社武蔵野ロジスティクスが負担した。
4. 平成 26 年度及び平成 27 年度の調査組織は下記の通りである。

調査主体者	三芳町教育委員会	教育長	桑原孝昭
調査事務局	文化財保護課	参事	鈴木義雄(平成 26 年 8 月まで課長)
	同	課長	柳井章宏(主幹兼務 平成 26 年 8 月まで副課長)
	同	主査	印南孝雄(平成 26 年度まで)
	同	主査	小沼美典
	同	主事	窪田藤夫(平成 27 年度より)
	同	主事	内藤友映
	同	主事補	岡野賢人(平成 27 年度より)
調査担当者	同	主幹	柳井章宏
	同	主任	越前谷理

5. 第 6 地点(4 次)の発掘調査は平成 26 年 5 月 9 日～7 月 31 日まで行い、第 7 地点の発掘調査は平成 26 年 10 月 3 日～10 月 31 日まで行った。整理作業および報告書刊行は平成 26 年 8 月 1 日～平成 28 年 2 月 29 日まで行った。
6. 遺構写真撮影、本書第 1 章～第 3 章第 1 節・第 4 章第 1 節・第 6 章の執筆、挿図・図版作成及び編集は越前谷理が行った。第 3 章第 2 節・第 4 章第 2 節の執筆、石器実測図作成、石器写真撮影は(有)アルケリサーチに業務委託を行い、報告書に掲載する土層断面図のデジタルトレースは(株)東京航業研究所に業務委託を行った。第 5 章第 1 節火山灰分析・植物珪酸体分析分析は(株)火山灰考古学研究所に業務委託を行った。
7. 本書に掲載した図版等の読み方は、それぞれの図で示した。
8. 本書に掲載した地図は、三芳町発行の 1/2,500 三芳町全図及び第 11 回石器文化研究交流会埼玉実行委員会作成の武蔵野台地北部扇状地図を一部加筆したものである。
9. 発掘現場での遺構・遺物の記録及び整理作業における図版作成は、人力及び(株)CUBIC 社製「遺構くん Cubic」を併用した。
10. 本書の作成・編集には、主に Adobe 社製 Illustrator CS5、Photoshop CS5、InDesign CS5、Acrobat 9 Pro を使用した。
11. 発掘調査及び出土資料の整理・報告にあたり、下記の諸氏・関係機関のご協力・ご教示を賜った。記して感謝の意を表したい。(順不同・敬称略)
大久保淳、大塚宣明、加藤秀之、亀田直美、隈本健介、酒巻孝光、笹森健一、鈴木美保、砂田佳弘、須藤隆司、諏訪間順、早田勉、高崎直成、坪田幹男、中村愛、長崎潤一、長澤有史、鍋島直久、西井幸雄、野口淳、早坂廣人、藤波啓容、堀善之、松本富雄、森野謙、柳澤健司、和田晋治、埼玉県生涯学習文化財課、埼玉考古学会、石器文化研究会、ふじみ野市教育委員会、富士見市教育委員会、(有)アルケリサーチ、(株)火山灰考古学研究所、(株)CUBIC、(株)東京航業研究所
13. 発掘調査ならびに整理作業従事者は下記のとおりである。(敬称略)
浅沼薫、阿部欽一、江幡春江、萩原雅夫、黒岩裕二、佐藤洋子、清水行枝、田村早苗、仲井キヨ子、野上吉樹、平田小百合、藤本昭一、堀田敦子、松本アキヨ、黛佳代子、望月正一、吉田悦子、渡邊愛

凡例

1. 本書で使用した図面の方位は全て座標北であり、遺構挿図は特記がない限り、ページ上部が北である。
2. 測量は、日本測地系に基づいている。
3. グリッドは5m×5mで設定し、東西にアルファベット、南北に数字を付けた。なお、それぞれのグリッドにおける北東航の番号をグリッド名としている。
4. 土層断面図中の■は第1黒色帯、■は第2黒色帯上層、■は第2黒色帯下層を示す。
5. 遺構挿図の縮尺は、それぞれの図で示すとおりである。
6. 石器の石材別分布図中の実線は接合関係を示す。ただし、土層断面図中には同一遺構内の接合関係のみを示し、他遺構との接合関係は図示していない。
7. 遺構挿図中の遺物番号は、当該層位の図版掲載番号を示す。
8. 本書における石器の母岩は、第6地点(4次)・第7地点で共通である。
9. 石器挿図の縮尺は2/3を基本とし、一部1/3・1/2がある。
10. 石器挿図中の■はガジリを示す。
11. 石材の略号は下記の通りである。

黒曜石—Ob チャート—Ch 頁岩—Sh 砂岩—Sa 凝灰岩—Tu ホルンフェルス—Ho
ガラス質黒色安山岩—GAn 珪質頁岩—SSh 安山岩—An

また、母岩は石材略号に母岩の固有番号を付して表記した(Ob_1など)。

12. 石器観察の表記に用いた用語・数値は以下のとおりである。

刃先角：計測部位の剥離面と素材の主要剥離面のなす角(°)

湾曲度：湾曲の深さ(mm)/湾曲単位の長さ(mm)で算出される数値

先端開き角：左右両側縁の端部と先端部を結んだ線を延長しその交差する場合の開き角

剥離軸に対する傾き：素材の剥離軸と、石器の器体軸との傾き

長幅比：長さ(mm)/幅(mm)で算出される数値

打面転移：剥片剥離の工程で石核の打面の移動が認められた場合、その角度を大まかに示した(90°、180°)。この打面転移は作業面転移を含んではない。

目次

はじめに	1. 第Ⅲ層	12
例言・凡例・目次	2. 第Ⅴ層	23
挿図目次・表目次・写真図版目次	3. 第Ⅵ層	28
第Ⅰ章 調査の概要	4. 第Ⅶ層	33
第1節 調査に至る経緯	5. 第Ⅶ層～第Ⅸ層	54
第2節 調査の方法	6. 第Ⅱ層	66
第3節 調査の経過	7. その他	67
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	第Ⅳ章 中東遺跡第7地点の調査	70
第1節 地理的環境	第1節 概要	70
第2節 遺跡の概要	第2節 遺構と遺物	70
第3節 周辺の遺跡	1. 集石1	70
第4節 基本土層	第Ⅴ章 自然科学分析	74
第Ⅲ章 中東遺跡第6地点(4次)の調査	第1節 火山灰分析・植物珪酸体分析	74
第1節 概要	第Ⅵ章 総括	85
第2節 遺構と遺物		

挿図目次

第1図	中東道路の位置(1/2,500)	1
第2図	第6地点(4次)試掘坑設定図(1/500)	2
第3図	第7地点試掘坑設定図(1/500)	2
第4図	中東道路調査位置図(1/3,000)	3
第5図	第6地点(4次)遺構分布図(1/400)	4
第6図	第6地点(4次)器種別分布図(1/400)	5
第7図	第6地点(4次)石材別分布図(1/400)	6
第8図	第7地点遺物分布図(1/250)	7
第9図	埼玉風における中東道路の位置図	8
第10図	三方町周辺地形図(1/40,000)	9
第11図	第6地点(4次)土層断面位置図(1/500)	10
第12図	第6地点(4次)土層断面図(1/100)	10
第13図	第Ⅴ層石器分布図(1/400)	11
第14図	第Ⅴ層石器集中1器種別分布図(1/50)	14
第15図	第Ⅴ層石器集中1石材別分布図(1/50)	15
第16図	第Ⅴ層石器集中2器種別分布図(1/50)	16
第17図	第Ⅴ層石器集中2石材別分布図(1/50)	17
第18図	第Ⅴ層石器集中3器種別・石材別分布図(1/50)	18
第19図	第Ⅴ層出土石器1(2/3)	21
第20図	第Ⅴ層出土石器2(2/3)	22
第21図	第Ⅴ層石器分布図(1/400)	23
第22図	第Ⅴ層石器集中4器種別分布図(1/80)	24
第23図	第Ⅴ層石器集中4石材別分布図(1/80)	25
第24図	第Ⅴ層出土石器(2/3)	27
第25図	第Ⅴ層石器分布図(1/400)	28
第26図	第Ⅵ層石器集中5器種別分布図(1/50)	30
第27図	第Ⅵ層石器集中5石材別分布図(1/50)	31
第28図	第Ⅵ層出土石器(2/3)	32
第29図	第Ⅵ層石器・離分布図(1/400)	33
第30図	第Ⅵ層石器集中6器種別分布図(1/50)	34
第31図	第Ⅵ層石器集中7石材別分布図(1/50)	35
第32図	第Ⅵ層石器集中7器種別分布図(1/50)	36
第33図	第Ⅵ層石器集中7石材別分布図(1/50)	37
第34図	第Ⅵ層石器集中8器種別分布図(1/50)	38
第35図	第Ⅵ層石器集中8石材別分布図(1/50)	39
第36図	第Ⅵ層石器集中9器種別分布図(1/50)	40
第37図	第Ⅵ層石器集中9石材別分布図(1/50)	41
第38図	第Ⅵ層石器集中1石材別・重量別分布図(1/60)	42
第39図	第Ⅵ層出土石器1(2/3)	48
第40図	第Ⅵ層出土石器2(2/3)	49
第41図	第Ⅵ層出土石器3(1/3)	50
第42図	第Ⅵ層出土石器4(2/3)・1/2	51
第43図	第Ⅵ層出土石器5(1/2)	52
第44図	第Ⅵ層出土石器6(1/2)	53
第45図	第Ⅵ層～第Ⅷ層石器分布図(1/400)	54
第46図	第Ⅵ層～第Ⅷ層石器集中10・石器集中11 器種別分布図(1/80)	58
第47図	第Ⅵ層～第Ⅷ層石器集中10・石器集中11 石材別分布図(1/80)	59
第48図	第Ⅵ層～第Ⅷ層石器集中12器種別分布図(1/50)	60
第49図	第Ⅵ層～第Ⅷ層石器集中12石材別分布図(1/50)	61
第50図	第Ⅵ層～第Ⅷ層石器集中13・石器集中14 器種別分布図(1/80)	62
第51図	第Ⅵ層～第Ⅷ層石器集中13・石器集中14 石材別分布図(1/80)	63
第52図	第Ⅵ層～第Ⅷ層出土石器1(2/3)	64
第53図	第Ⅵ層～第Ⅷ層出土石器2(2/3)	65
第54図	第Ⅱ層石器分布図(1/400)	66
第55図	第Ⅱ層出土石器(2/3)	67
第56図	試掘調査遺物・遺構内採集遺物1(2/3)	68
第57図	試掘調査遺物・遺構内採集遺物2(2/3)	69
第58図	第7地点集石1及び旧石器時代遺物分布図(1/250)	70
第59図	集石1及び旧石器時代遺物石材別分布図(1/80)	71
第60図	集石1離重量別分布図(1/80)	72
第61図	第7地点出土石器(2/3)	73
第62図	中東道路第6地点(4次)3D-39°9'の西壁の土層柱状図	75
第63図	3D-39°9'の西壁の火山灰の分布状況	77
第64図	3D-39°9'における植物珪酸体分析結果	83

表目次

第1表	第Ⅴ層器種別石器属性表	13
第2表	第Ⅴ層器種別石器属性表	26
第3表	第Ⅴ層器種別石器属性表	32
第4表	第Ⅴ層器種別石器属性表1	43
第5表	第Ⅴ層器種別石器属性表2	44
第6表	第Ⅴ層～第Ⅷ層器種別石器属性表	55
第7表	第Ⅴ層器種別石器属性表	67
第8表	第7地点掘削石器属性表	73
第9表	3D-39°9'の西壁の火山灰の分布分析結果	77
第10表	3D-39°9'の西壁の火山灰の分布分析結果	79
第11表	中東道路第6地点(4次)3D-39°9'における 植物珪酸体分析結果	83

写真図版目次

写真図版1	第6地点(4次)調査前全景(南から)	写真図版9	第7地点調査前全景(南西から)
	遺構表土剥ぎ		調査風景
	調査風景		測量杭打ち作業
	測量杭打ち作業		3区遺構積土状況
	第Ⅴ層石器集中1(北から)		3区掘出土状況
	石器集中1遺物出土状況(北から)		3区旧石器時代剥片
	石器集中1遺物出土状況(近景)		集石1(近景)
	石器集中1ナイフ形石器		集石1(近景)
写真図版2	石器集中2	写真図版10	縄文時代集石1(東から)
	石器集中1二次加工のある剥片		第7地点調査区全景(北西から)
	石器集中1離		4区旧石器時代剥片(南から)
	第Ⅴ層石器集中3(西から)		遺構内葉戻し
	石器集中3二次加工のある剥片		整理作業風景
	第Ⅵ層石器集中5(北から)		整理作業風景
	石器集中5土層堆積状況(北から)		写真図版11
	石器集中5遺物出土状況(南から)		第Ⅴ層出土石器
	石器集中5台石		写真図版12
写真図版3	第Ⅴ層出土石器		第Ⅴ層出土石器
	第Ⅴ層石器集中6(西から)		Ⅴ層出土石器
	石器集中6ナイフ形石器		第Ⅴ層出土石器
	石器集中6剥片		写真図版13
	石器集中6二次加工のある剥片		第Ⅴ層出土石器
	石器集中6二次加工のある剥片		第Ⅴ層出土石器
写真図版4	第Ⅴ層出土石器3(1/3)		第Ⅴ層出土石器
	第Ⅴ層出土石器7(南から)		第Ⅴ層出土石器
	石器集中7石核		写真図版15
	石器集中7最石及び剥片		第Ⅴ層出土石器
	石器集中7剥片		写真図版16
	石器集中7剥片		第Ⅴ層出土石器
写真図版5	第Ⅴ層出土石器		第Ⅴ層出土石器
	第Ⅴ層石器集中8(南から)		第Ⅴ層出土石器
	石器集中8土層堆積状況(西から)		第Ⅴ層出土石器
	石器集中8石核		第Ⅴ層出土石器
	石器集中8剥片		第Ⅴ層出土石器
	第Ⅴ層出土石器9(南から)		第Ⅴ層出土石器
	石器集中9土層堆積状況(南から)		第Ⅴ層出土石器
	石器集中9二次加工のある剥片		第Ⅴ層～第Ⅷ層出土石器
	石器集中9二次加工のある剥片		第Ⅴ層出土石器
写真図版6	第Ⅴ層器種別1(石器集中9と重複)		第Ⅴ層～第Ⅷ層出土石器
	第Ⅴ層～第Ⅷ層出土石器10・石器集中11		第Ⅴ層出土石器
	第Ⅴ層～第Ⅷ層出土石器10・石器集中11(北西から)		第Ⅴ層出土石器
	石器集中10剥片		第Ⅴ層出土石器
	石器集中10土層堆積状況(西から)		第Ⅴ層出土石器
写真図版7	第Ⅴ層～第Ⅷ層出土石器集中12(北から)		第Ⅴ層出土石器
	石器集中12土層堆積状況(西から)		第Ⅴ層出土石器
	石器集中12遺物出土状況(近景)		第Ⅴ層出土石器
	石器集中12集石		第Ⅴ層出土石器
写真図版8	第Ⅴ層～第Ⅷ層出土石器集中14調査風景		第Ⅴ層出土石器
	石器集中14土層堆積状況(南から)		第Ⅴ層出土石器
	第6地点(4次)調査区全景(南西から)		第Ⅴ層出土石器
	第6地点(4次)調査区全景(南東から)		整理作業風景
	整理作業風景		第7地点出土石器

第I章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

中東遺跡は、武蔵野台地北東部に位置し、埼玉県入間郡三芳町大字上富字中東 223-1 付近を谷頭に持つ埋没谷上流域一帯に約 51,000㎡の範囲で広がる。これまでに実施された試掘調査・発掘調査等により、旧石器時代を中心とした遺跡と捉えられている。

【第6地点(4次)】調査の発端は、平成 25 年 9 月 10 日に株式会社武蔵野ロジスティクスより三芳町教育委員会へ大字上富字中東 163-2 の一部ほかの埋蔵文化財包蔵地試掘確認調査依頼書が提出されたことに始まる。三芳町教育委員会では当該地番を 1 次～4 次に区分した上で、順次試掘調査に着手した。このうち 4 次調査とした 163-2 の一部及び 163-13 において、平成 26 年 3 月 17 日～5 月 8 日に試掘調査を実施したところ旧石器時代の石器集中を確認したため(第2図)、遺跡の保存について開発者と協議を行った。その結果、開発は避けられないとの結論に達し、該当箇所約 746㎡について記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

調査は、文化財保護法に基づき平成 26 年 5 月 8 日付け三芳教文発第 53 号で発掘調査通知を埼玉県教育委員会へ提出し、同年 5 月 8 日に株式会社武蔵野ロジスティクスと発掘調査受託契約を締結、同年 5 月 9 日～10 月 31 日に発掘調査及び整理作業を実施した。

【第7地点】調査の発端は、平成 26 年 1 月 29 日に株式会社武蔵野ロジスティクスより三芳町教育委員会へ大字上富字中東 168-13 ほかの埋蔵文化財包蔵地試掘確認調査依頼書が提出されたことに始まる。依頼に基づき三芳町教育委員会で平成 26 年 2 月 7 日～3 月 14 日に試掘調査を実施したところ、168-13 及び 168-14 において縄文時代の集石 1 箇所を確認したため(第3図)、遺跡の保存について開発者と協議を行った。その結果、開発は避けられないとの結論に達し、該当箇所 285㎡について記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

調査は、文化財保護法に基づき平成 26 年 8 月 21 日付け三芳教文発第 173 号で発掘調査通知を埼玉県教育委員会へ提出し、同年 9 月 16 日に株式会社武蔵野ロジスティクスと発掘調査受託契約を締結、同年 10 月 3 日～11 月 28 日に発掘調査及び整理作業を実施した。

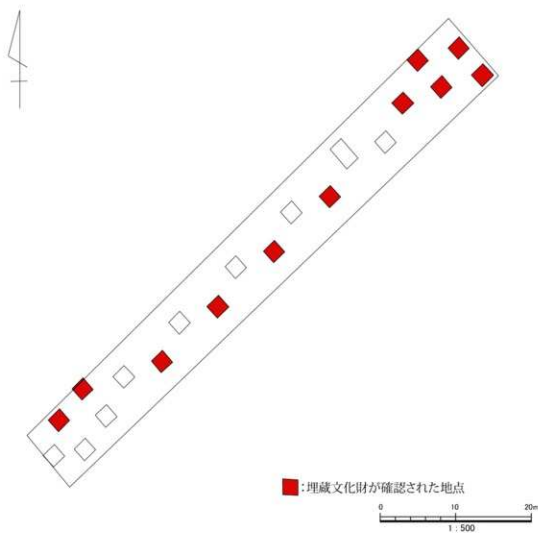
第2節 調査の方法

【第6地点(4次)】調査は、試掘調査で石器集中が確認された箇所を拡張する方法で行った。掘り下げにあたっては、グリッドの壁面を土層観察用のベルトとして残しながら調査を進めた。遺物の取り上げはトータルステーションを使用し、出土遺物全点の出土位置を記録した。土層断面図の実測は 1/20 の縮尺で行った。

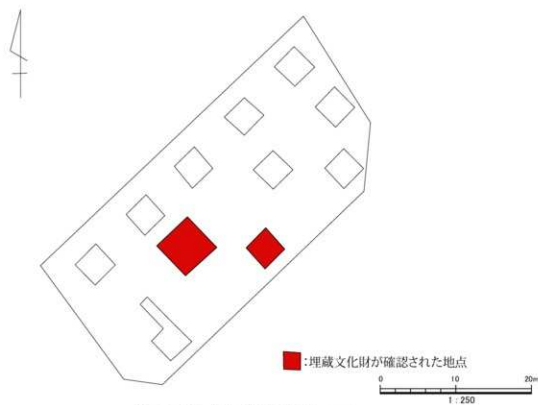
なお、3D-39 グリッドにおいて層位関係の把握及び古植生の復元を目的として、株式会社火山灰考古学研究所に業務委託を行い、火山灰分析・植物珪酸体分析を実施した。試料採取にあたっては、同研究所の分析担当者が発掘現場にて直接行った。



第1図 中東遺跡の位置(1/2,500)



第2図 第6地点(4次) 試掘坑設定図(1/500)



第3図 第7地点 試掘坑設定図(1/250)

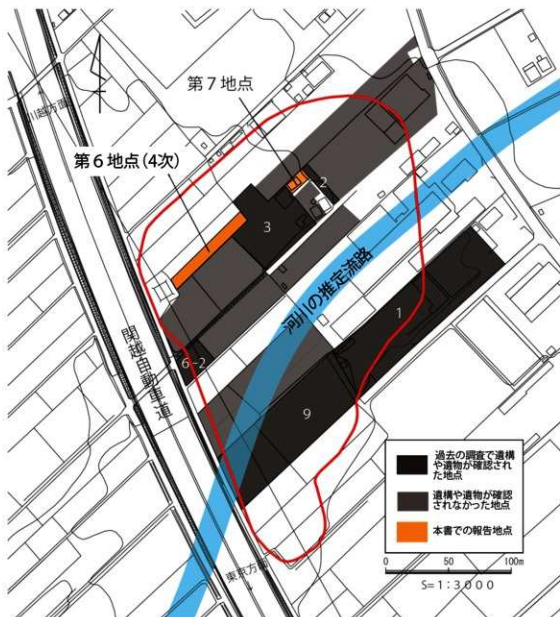
【第7地点】調査は、試掘調査で礫が確認された箇所を拡張する方法で行った。掘り下げにあたっては、土層観察用のベルトを残しながら調査を進めた。遺物の取り上げはトータルステーションを使用し、出土遺物全点の出土位置を記録した。土層断面図の実測は1/20の縮尺で行った。

第3節 調査の経過

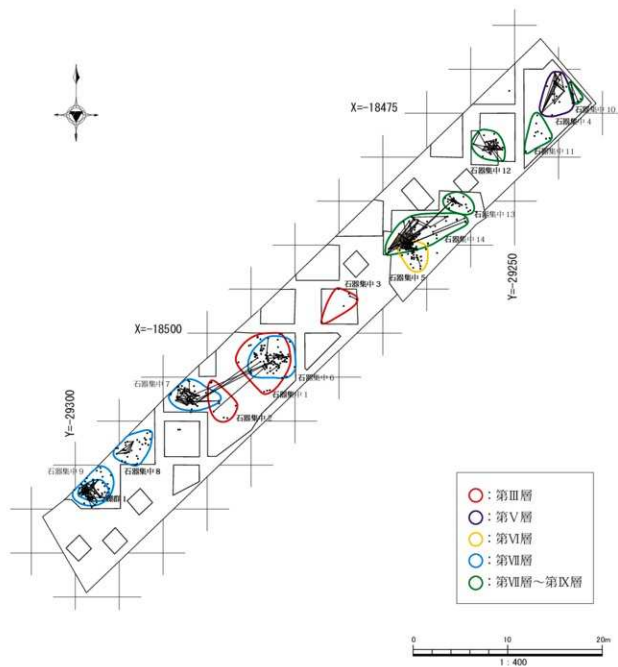
【第6地点(4次)】発掘調査は、平成26年5月9日から開始し、同年7月31日に終了した。調査地は、埋蔵文化財包蔵地に登録される以前は畑地や茶畑として利用されていたこともあり、大きな攪乱を受けることなく、全体的にローム層の保存状態は良好であった。掘削土量が多く作業は難航したが、調査の結果、旧石器時代の石器集中14箇所・礫群1箇所が確認された(第5図)。

【第7地点】発掘調査は、平成26年10月3日から開始し、同月31日に終了した。調査地は、埋蔵文化財包蔵地に登録される以前は、雑木林やプレバブ建物が建設された場所であり、部分的に建物の基礎や木根及び風倒木により掘削で地中深くまで攪乱されていた。調査の結果、縄文時代の集石1箇所が確認された(第8図)。

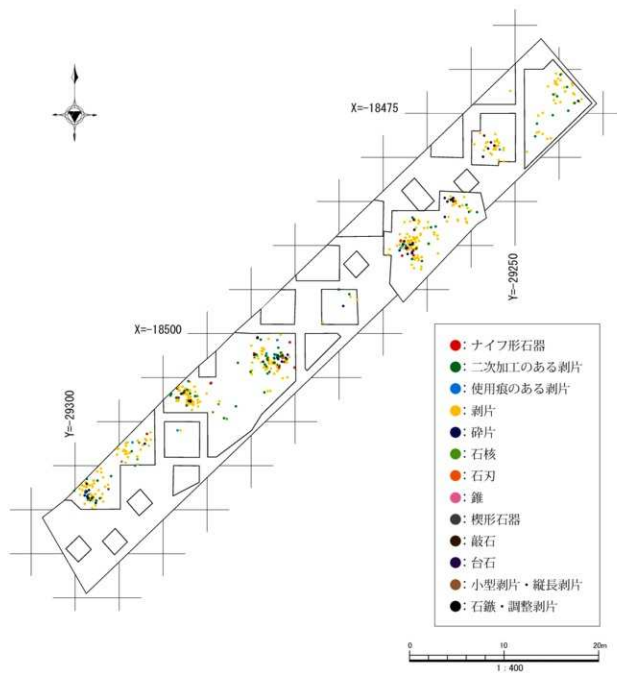
【整理作業及び報告書発行】整理作業及び報告書発行は、平成26年8月1日から開始し、平成28年2月29日に終了した。



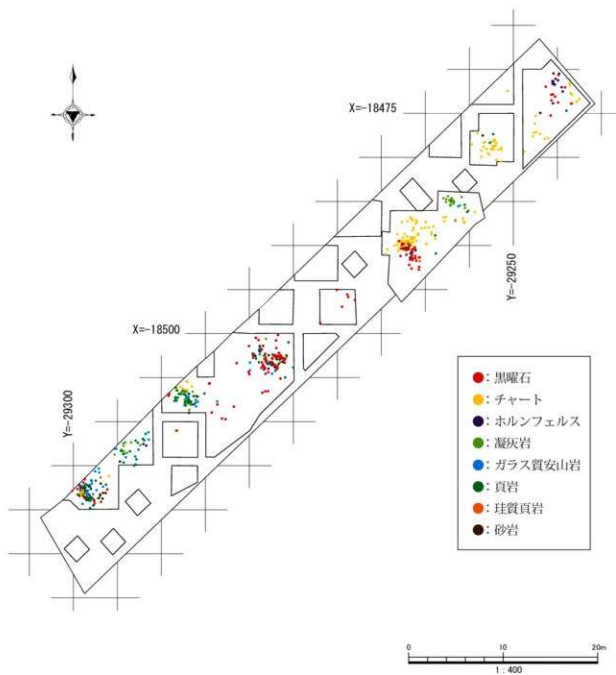
第4図 中東遺跡 調査位置図(1/3,000)



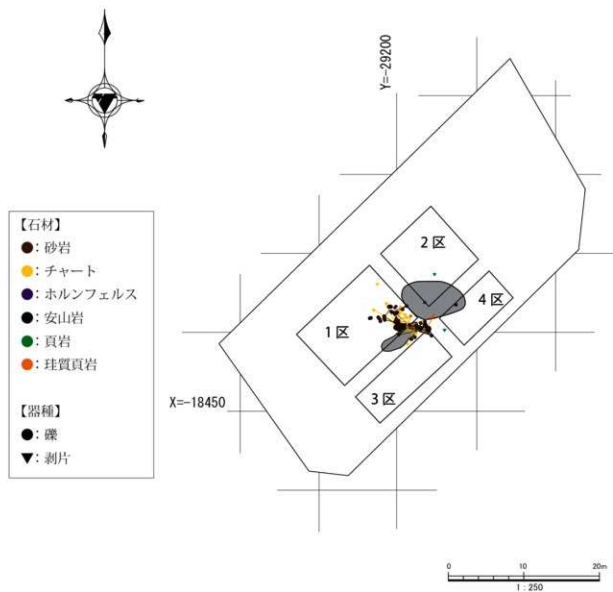
第5図 第6地点(4次)遺構分布図(1/400)



第6図 第6地点(4次)器種別分布図(1/400)



第7図 第6地点(4次)石材別分布図(1/400)



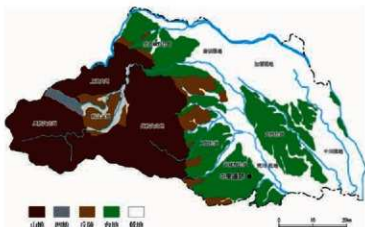
第8図 第7地点遺物分布図(1/250)

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

中東遺跡は、埼玉県入間郡三芳町大字上富字中東 195-1 ほか広がる、旧石器時代の遺跡である(第1図)。地形としては、関東平野の西部域、古多摩川の開析扇状地である武蔵野台地上に位置する(第9図)。

武蔵野台地は多摩山地の裾部に広がり、現在の東京都青梅市を扇頂とする、北を霞川・入間川、南を多摩川、東を荒川に画された、東西約 40km・南北約 30km に及ぶ大規模な洪積期の台地である。標高は、青梅市付近で約 180m を測るが、東方へ向かって緩やかに低下し、台地縁辺部では約 20m となり荒川低地に至る。また、台地先端には沖積地に流れ込む小河川や湧水が発達して複雑な地形を形成し、急崖を成している。



第9図 埼玉県における中東遺跡位置図

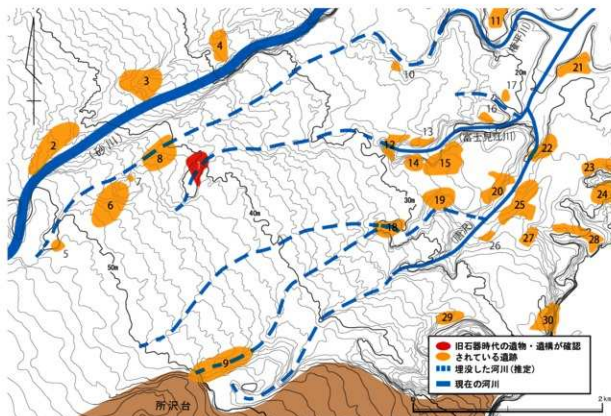
武蔵野台地を流れる河川のうち、狭山丘陵からの湧水を集めて流れる柳瀬川を境として、南部には黒目川、白子川、石神井川、神田川、善福寺川、野川など水量がある程度多い河川が複数存在する。一方、武蔵野台地北部には全延長 5～7km ほどの小河川は見られるものの、全延長 10km を超える河川としては不老川、砂川が知られるのみである。不老川、砂川は未無川あるいは尻無川と呼ばれ、雨量の多い時期には一定の水量を持つが、渇水期には下流まで水が流れず、地中に伏流する特徴を持つ。このように、武蔵野台地北部は現在流れる河川・水量ともに少なく、遺跡の立地についても、小河川が流れる台地先端部や河川両岸などの限られた地域に見られる程度であり、特に現在平坦な地形を呈する河川から離れた台地上には、これまで遺跡の存在はほとんど知られていなかった。

三芳町は、このような特徴をもつ武蔵野台地の北東部縁辺に位置する。行政区分としては、東に志木市・富士見市、南東に新座市、南西に所沢市、北にふじみ野市・川越市と接する。面積は 15.33 km²、人口は約 38,000 人である。町の西部域は、標高約 45m でほとんど平坦な地形を呈するが、標高 30m の等高線を境とする東部域には、東方の沖積地(荒川低地)に向かう小河川が複数存在しており、前述したように、遺跡の多くはこうした河川流域に分布している。

しかし、現在はほぼ平坦で河川が流れていない西部域においても、近年の調査により、かつては数条の河川(埋没谷)が存在し、その周辺で遺跡の存在が明らかになってきた(第10図)。今回報告する中東遺跡についても、西部域の上富字中東 223-1 付近に水源地を持つ、埋没谷の上流域両岸に広がる遺跡である。現在は開発が進んでしまい地形を追うことが困難であるが、この埋没谷は上富から北永井字吹上 211 付近を経て、藤久保地区の富士見江川へ合流していたと考えられる。

第2節 遺跡の概要

中東遺跡は、これまでの調査により旧石器時代を中心とした遺跡と捉えられている。平成 22 年度までに 5 地点にわたる試掘調査・発掘調査が実施され、うち 3 地点で立川ローム第 IX 層から第三層にかけて石器集中 30 箇所及び礫群 1 箇所が確認され、3,300 点を超える石器や礫が出土している。第 1 地点の発掘調査では、第 VII 層で石器集中 3 箇所と礫群 1 箇所、第 VI 層で石器集中 4 箇所が確認され、石器 418 点、礫 26 点が出土している(柳井 1996)。第 2 地点・第 3 地点の発掘調査では、いずれも石



1. 中東遺跡 2. 上永久保遺跡 3. 東永久保遺跡 4. 境松遺跡 5. 月野原遺跡 6. 中西遺跡 7. サガヤマ遺跡 8. 中東第二遺跡 9. 南止遺跡 10. 浅間後遺跡 11. 谷津遺跡 12. 藤久保東遺跡 13. 藤久保東第二遺跡 14. 藤久保東第三遺跡 15. 仮埜遺跡 16. 本目遺跡 17. ハケ上遺跡 18. 南新埜遺跡 19. 藤久保南遺跡 20. 三芳唐沢遺跡 21. 打越遺跡 22. 松ノ木遺跡 23. 栗谷ツ遺跡 24. 北通遺跡 25. 新間遺跡 26. 新間第二遺跡 27. 北原遺跡 28. 南通遺跡 29. 通西遺跡 30. 古井戸山遺跡

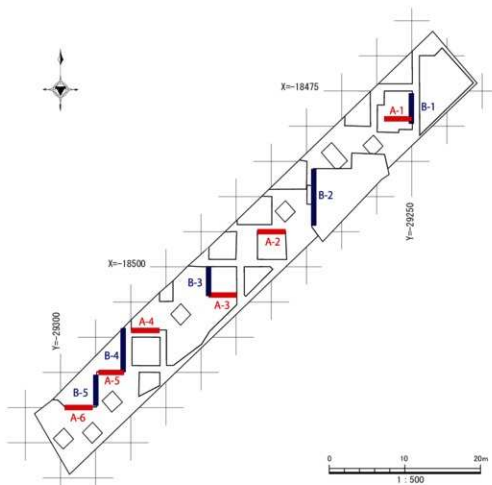
第10図 三芳町周辺地形図(1/40,000)

器集中が第IX層で2箇所、第VII層下部で7箇所、第VII層で4箇所、第V層で6箇所、第III層上部で4箇所の計23箇所が確認され、石器や礫など2,900点以上が出土している(大久保2011)。特に、第2地点の第IX層から出土した接合個体の中には、天城地区柏峠系の黒曜石が原石に近い状態で復元できるものもあり、石材利用のあり方を考える上で重要な成果となっている。

第3節 周辺の遺跡

中東遺跡は、富士見江川に流れ込んでいたと考えられる埋没谷の上流域両岸に位置する(第10図)。中東遺跡が広がる町の西部域において、これまで旧石器時代遺跡の存在が確認されていたのは、中東遺跡・南止遺跡のみであった。しかし、平成17年に西部域のなかでも特に北部で、一見するとほぼ平坦な地形でも僅かな窪地が見られる場所や、その周辺で分布調査を行ったところ、複数の場所で尖頭器や細石刃、石器剥片・碎片、焼石、縄文土器片等が多数表面採集され、砂川や埋没谷流域で旧石器時代を中心とした遺跡の存在が新たに確認された。ここでは、それら町の西部域に分布する旧石器時代遺跡について概観する(第10図)。

町の北部を流れる砂川(現砂川堀)流域には、上流から上永久保遺跡(2)、東永久保遺跡(3)、境松遺跡(4)が広がる。上永久保遺跡では2地点の調査が行われ、立川ローム層第IV層の石器製作跡や礫群、時期不明の土坑が確認されている。砂川から600mほど南には、標高約50m地点の所沢市月野原遺跡(5)付近の湧水を水源とする埋没谷が存在し、西から月野原遺跡、三芳町の中西遺跡(6)、サガヤマ遺跡(7)、その下流に中東第二遺跡(8)が広がる。サガヤマ遺跡では、第VII層～第IX層の石器集中1



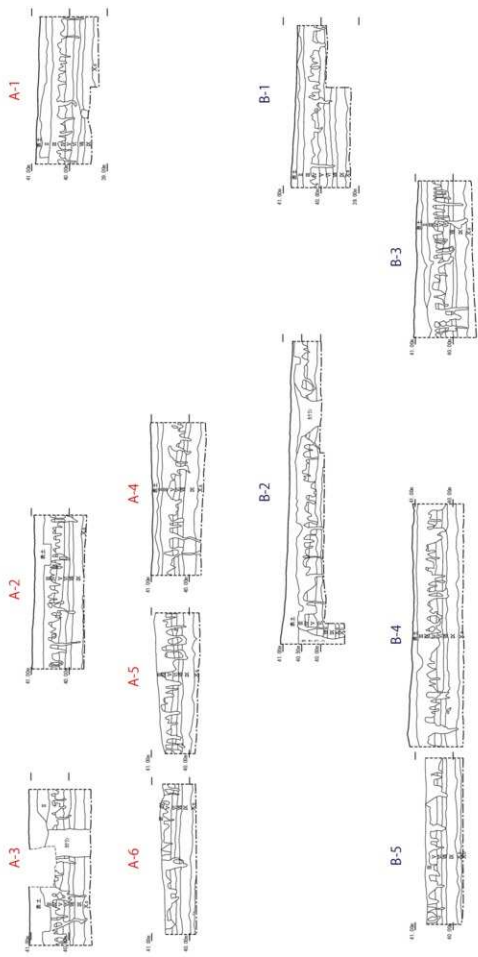
第11図 第6地点(4次)土層断面位置図(1/500)

箇所が確認され、出土した黒曜石の産地はすべて天城地区柏峠系であった。各遺跡の付近では、大雨の後に野水が確認されるなど、遺跡の立地を考える上で重要な要素となっている。この埋没谷の500mほど南には別の埋没谷が存在し、その上流域に今回報告する中東遺跡(1)が広がる。三芳町と所沢市の行政境付近には、現在の唐沢堀に合流すると考えられる埋没谷が存在し、最上流域には南止遺跡(9)が広がる。南止遺跡では、特に第IV層～第IV層下部で石器集中・礫群が数多く確認されているほか、第III層上部で野岳・休場型の非削片系細石刃核・細石刃が出土している。

以上、町の西部域に広がる遺跡について述べたが、西部域にはこれらの遺跡以外にも石器剥片や破片等が表面採集される場所が複数存在することから、西部域の特に南部にはまだ確認されていない埋没谷が数条存在し、その流域に遺跡が分布することが考えられる。今後、こうした地域においても詳細な分布調査が必要である。

第4節 基本土層

今回の調査地である第6地点(4次)・第7地点は、いずれも現況面では顕著な地形の傾斜は確認されなかった。土層の分層は武蔵野台地標準層位に準拠しつつ、さらに隣接地点との層位の関連を把握する目的から、『中東遺跡第2地点・第3地点』(大久保2011)に掲載された基本土層の観点を参考とした。その結果、隣接する第2地点・第3地点の土層と大きな相違は確認されなかったが、一部明確に分層できない層もあった。なお、3D-39グリッド壁面において土壌の自然科学分析を行い、結果を第V章に記載した。



第II層 黒褐色土 径2~3mm大の赤色スコリアを少量、径2~5mm大の黒色
 粒子を少量、ローム粒子を少量含む。
 第III層 暗褐色土 ソフトローム層。
 第IV層 黄褐色土 ハードローム層。赤色スコリアを多量に含む。
 第V層 褐色土 第1黒色帯。赤色スコリアを少量含む。
 第VI層 褐色土 AT層。白色を帯びた褐色を多量に含む。

第VII層 暗褐色土 第2黒色帯上層。赤色スコリア・白色粒子を多量に含む。
 第VIII層 暗褐色土 第2黒色帯下層。第VIII層よりも黒色味・粘性ともに強く、大
 粒の赤色スコリアを多量に含む。
 第IXa層 黄褐色土 第IX層の中でも特に白色を帯びる。
 第IXb層 黄褐色土 やや大粒の赤色スコリアを多量に含む。

第12図 第6地点(4次)土層断面図(1/100)

第三章 中東遺跡第6地点（4次）の調査

第1節 概要

第6地点（4次）の調査では、旧石器時代の遺構として、立川ローム第Ⅲ層で石器集中3箇所、第Ⅴ層で石器集中1箇所、第Ⅵ層で石器集中1箇所、第Ⅶ層で石器集中4箇所・礫群1箇所、第Ⅶ層～第Ⅸ層で石器集中5箇所が確認された。出土した旧石器時代遺物は総計586点で、その内訳は石器516点・礫70点である。また、接合資料は45個体確認されたが、中でも接合資料-5（Ⅶ_Ⅸ）などは、垂直分布が1m近く拡散した石器が接合し1個体となった。これらの遺構と遺物について、以下で各層ごとに報告する。

第2節 遺構と遺物

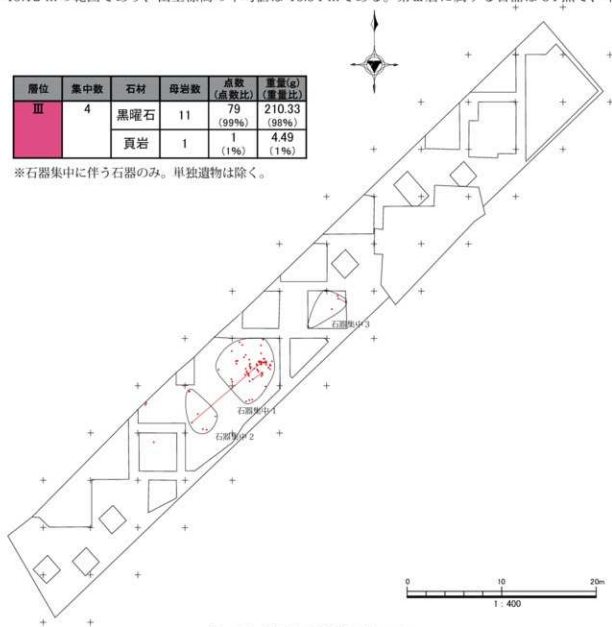
1. 第Ⅲ層

概要

立川ローム第Ⅲ層上部～中位に主としてまとまりを見せる石器群。遺物の垂直分布幅は標高40.79m～40.12mの範囲であり、出土標高の平均値は40.54mである。第Ⅲ層に属する石器は84点で、平面

層位	集中数	石材	母岩数	点数 (高数比)	重量(g) (重量比)
Ⅲ	4	黒曜石	11	79 (99%)	210.33 (98%)
		頁岩	1	1 (1%)	4.49 (1%)

※石器集中に伴う石器のみ。単独遺物は除く。



第13図 第Ⅲ層 石器分布図(1/400)

分布より調査区の中央部付近に3箇所の石器集中が確認された。単独遺物も4点確認されている。石器の内訳はナイフ形石器3点・鏃1点・楔形石器2点・石核3点、それ以外は剥片類で、剥片類の長幅比(0.5以下)0%・(0.5~1.5)72%・(1.5以上)28%である。接合資料は6個体が確認され、そのうち1個体は集中部外である。石材はほぼ黒曜石が占め(点数比99%)、母岩構成は7種(Ob_7~13)及び単独母岩5種である。

接合	接合No	グッド	遺物No	集中No	種別	石材	母岩	重量(g)	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	X座標	Y座標	標高
				石1(国)	ナイフ形石器	黒曜石								
				石1(国)	ナイフ形石器	黒曜石								
	接合-4(国)			石2(国)	ナイフ形石器	黒曜石								
	接合-4(国)			石2(国)	ナイフ形石器	黒曜石								
				石1(国)	鏃	黒曜石								
				石1(国)	二次加工のある剥片	黒曜石								
				石1(国)	二次加工のある剥片	黒曜石								
				石1(国)	(小形)剥片	黒曜石								
				石1(国)	調整剥片	黒曜石								
	接合-5(国)			石1(国)	剥片	黒曜石								
	接合-5(国)	試一括			剥片	黒曜石	Ob_(9)							
				石2(国)	石核	黒曜石								
				石2(国)	石核	黒曜石	Ob_単							
	接合-1(国)			石2(国)	石核	黒曜石								
	接合-1(国)			石2(国)	剥片	黒曜石								
	接合-2(国)			石1(国)	剥片	黒曜石								
	接合-2(国)			石1(国)	楔形石器	黒曜石								
	接合-3(国)			石3(国)	剥片	黒曜石								
	接合-3(国)			石3(国)	剥片	黒曜石								

第1表 第Ⅲ層 掲載石器属性表

【遺構】

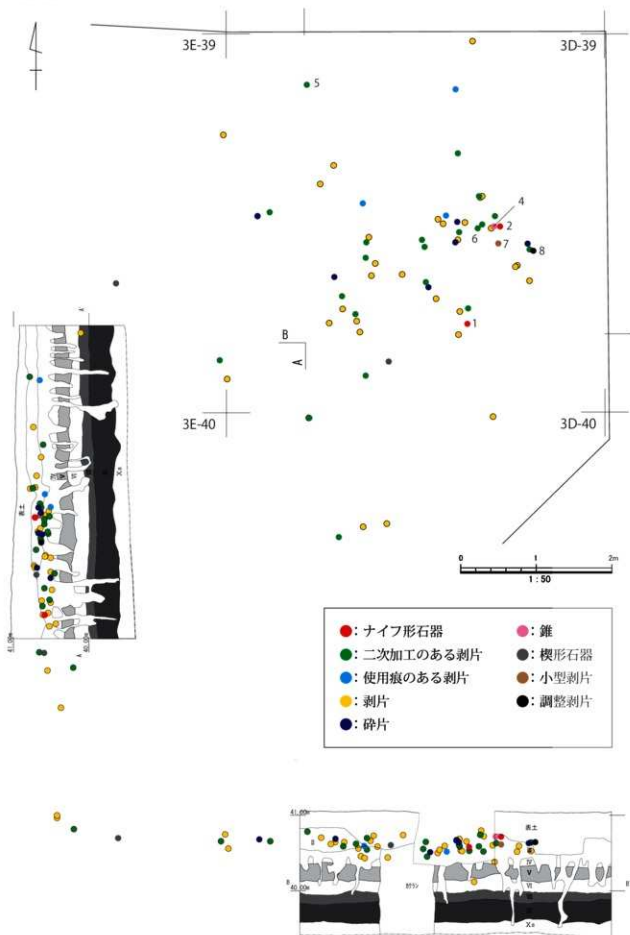
石器集中1(第14図・第15図)

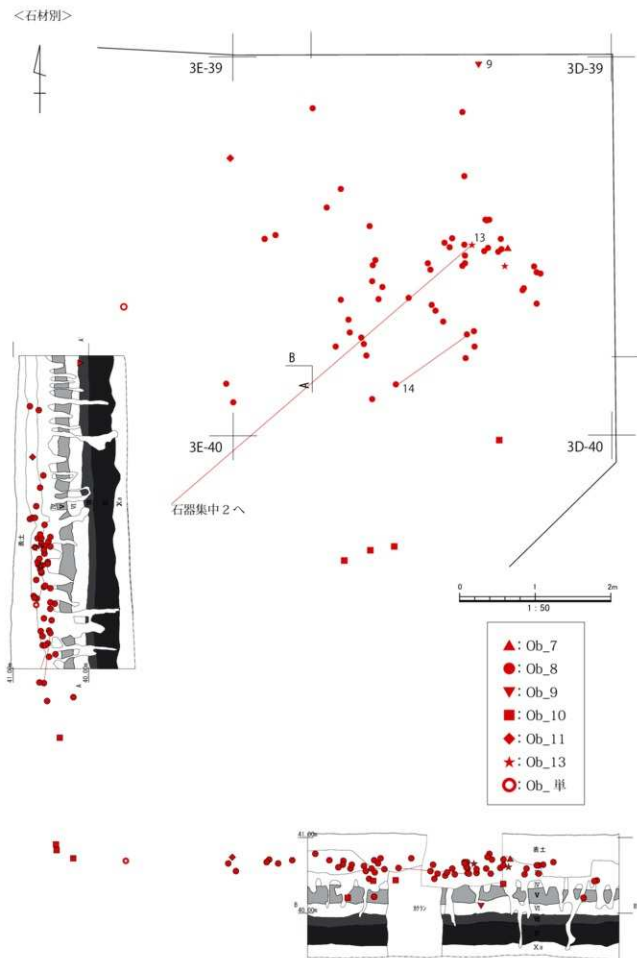
調査区の中央部南(3D-39グリッド)に位置する。NS6.56 m×EW5.50 mの広い範囲の中に、一部密集部を持つがその周囲は散漫な分布を示す66点の石器で構成される。遺物の出土層位は第Ⅱ層~第Ⅴ層で、垂直方向に0.67 mの幅で分布している。遺物出土のピークは、第Ⅲ層中位の標高40.60 m付近(平均値は40.59 m)である。第Ⅶ層の石器集中6と重複し、両側に石器集中2及び石器集中3が隣接する。器種構成の内訳は、ナイフ形石器2点・鏃1点・楔形石器2点・剥片類61点(小型剥片・調整剥片・二次加工のある剥片・使用痕のある剥片・碎片含む)である。接合関係は石器集中内で3個体確認された。そのうち1個体が石器集中2と石器集中間で接合する。石材はすべて黒曜石で構成され、母岩構成は6母岩(Ob_7~11・13)及び単独母岩(Ob)である。Ob_11・Ob_13は石器集中2で、Ob_7は石器集中3でも確認された。

母岩名/器種	剥片	二次加工のある剥片	使用痕のある剥片	調整剥片	碎片	ナイフ形石器	鏃	楔形石器	点数	重さ(g)
Ob_7						1			1	6.10
Ob_8	23	19	3	1	7	1	1	1	56	43.15 (+0.012~7.48)
Ob_9	1								1	2.05
Ob_10	3	1							4	1.98
Ob_11	1								1	13.52
Ob_13	2								2	0.36
Ob_単								1	1	1.86
合計	30	20	3	1	7	2	1	2	66	69.02

第Ⅲ層上部石器集中1 母岩別器種一覧表

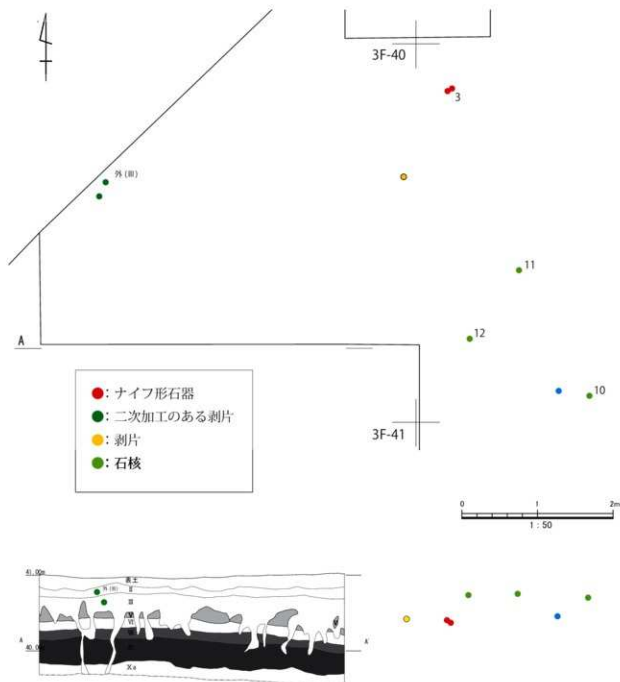
<器種別>





第15図 第三層 石器集中1 石材別分布図(1/50)

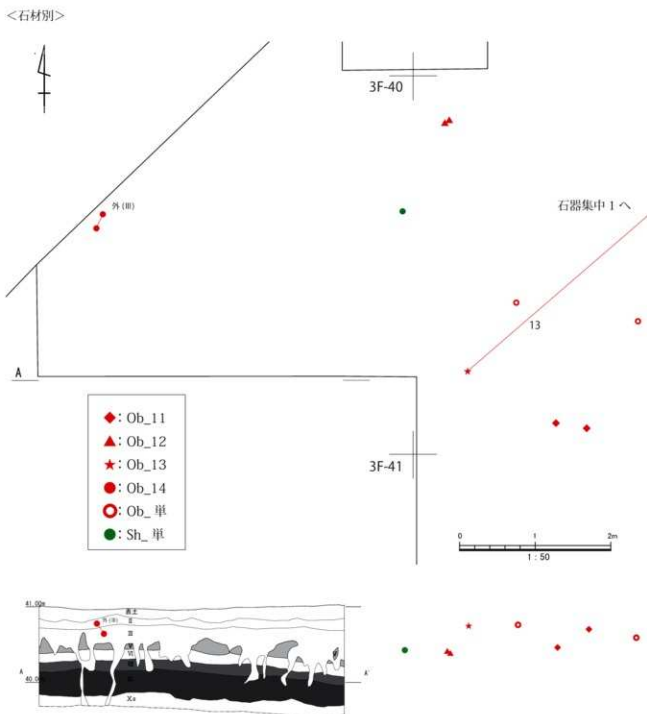
<器種別>



第16図 第Ⅲ層 石器集中2 器種別分布図(1/50)

石器集中2(第16図・第17図)

調査区の中央部南西(3E-40グリッド)に位置する。NS4.08 m×EW3.37 mの範囲に散漫な分布を示す8点の石器で構成される。遺物の出土層位は第Ⅱ層～第Ⅲ層で、垂直方向に0.39 mの幅で分布している。遺物出土のピークは、第Ⅲ層中位の標高40.65 m付近(平均値は40.45 m)である。北東方向に石器集中1が隣接する。器種構成の内訳は、ナイフ形石器1点(2点接合)・石核3点・剥片類3点(二次加工のある剥片・使用痕のある剥片含む)である。接合関係は石器集中内で1個体確認された。石材は黒曜石が主体を占める(点数比88%)。母岩構成は3母岩(Ob₁₁～13)及び単独母岩(Ob2種・Sh)である。Ob₁₁・Ob₁₃は石器集中1でも確認された。

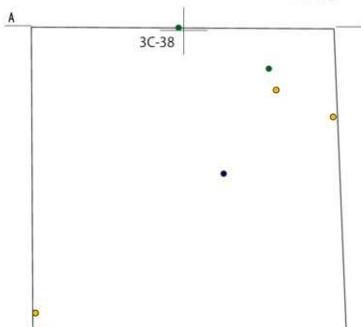
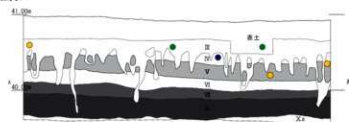


第17図 第Ⅲ層 石器集中2 石材別分布図(1/50)

母岩名/器種	割片	2枚形石核	7枚形石核	石核	点数	重さ (g)
Ob_11		1		1	2	42.70
Ob_12			2 (複合)		2	10.44
Ob_13				1	1	17.50
Ob_単		1			1	8.99
Ob_単				1	1	56.82
Sh_単	1				1	4.49
合計	1	2	2	3	8	123.44

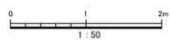
第Ⅲ層石器集中2 母岩別器種一覧表

<器種別>

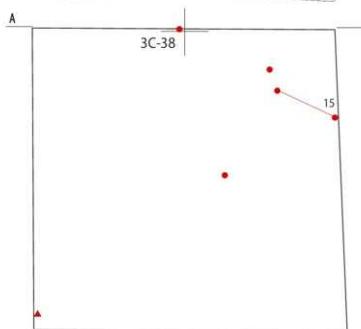
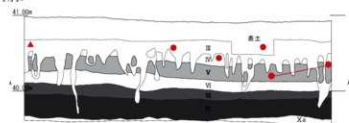


3B-38

- : 二次加工のある剥片
- : 剥片
- : 破片

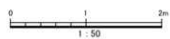


<石材別>



3B-38

- : Ob_7
- ▲: Ob_単



第18図 第三層 石器集中3 器種別・石材別分布図(1/50)

石器集中3(第18図)

調査区の中央部東(3B-38・3C-38グリッド)に位置する。NS3.76 m×EW3.94 mの範囲に散漫な分布を示す6点の石器で構成される。遺物の出土層位は第Ⅱ層～第Ⅴ層で、垂直方向に0.40 mの幅で分布している。遺物出土のピークは、第Ⅲ層上部の標高40.70 m付近(平均値は40.57 m)である。南西方向に石器集中1が隣接する。器種構成の内訳は、剥片類6点(二次加工のある剥片・使用痕のある剥片・砕片含む)である。接合関係は石器集中内で1個体確認された。石材はすべて黒曜石で構成され、母岩構成は1母岩(Ob_7)及び単独母岩(Ob)である。Ob_7は石器集中1より出土のナイフ形石器(2)と同一母岩である。

母岩名/器種	剥片	二次加工のある剥片	砕片	点数	重さ(g)
Ob_7	2	2	1	5	15.75
Ob_単	1			1	6.61
合計	3	2	1	6	22.36

第Ⅲ層石器集中3 母岩別器種一覧表

【出土遺物】(第19図・第20図)

第Ⅲ層より出土した遺物のうち、ナイフ形石器3点・錐1点・二次加工のある剥片2点・小型剥片1点・調整剥片1点・使用痕のある剥片1点・石核3点・接合資料3例を掲載した。

〈石器〉

1・2は石器集中1より、3は石器集中2より出土のナイフ形石器である。1は黒曜石製(Ob_8)で、縦長剥片(長幅比1.98)を素材として縦位～斜位に用いている。素材打面を基部に設定し、左側縁上部に主要剥離面側から急角度の二次的剥離を加えている。右側縁上部表面側に緩やかな二次的剥離を、主要剥離面側に緩やかな二次的剥離を加え直線状の縁辺を作り出している。素材変形度はやや大きいと考えられる。先端開き角は56.4°となる。2は黒曜石製(Ob_7)で、縦長剥片(長幅比1.56)を素材として縦位に用いている。素材打面を基部に設定し、左側縁上部に主要剥離面側から緩やかな二次的剥離を加えている。左側縁下部に面的な剥離を加えている。右側縁下部に主要剥離面側から急角度な二次的剥離を加え、緩い弧状の縁辺形状を作り出している(湾曲度0.13)。素材変形度はやや大きいと考えられる。先端開き角は63.8°となる。素材のフェザーエッジは右側縁上部～中位に残される(刃先角29.5°)。木葉状を呈し尖頭器を意識していると考えられる。3の接合資料-4は黒曜石製(Ob_12)で、石刃(長幅比2.82)を素材として縦位に用いている。素材打面を基部に設定し、左側下部に主要剥離面側から急角度な二次的剥離を加え直線状の縁辺を作り出している。右側縁上部には主要剥離面側から不規則剥離を加えている。右側縁下部に主要剥離面側から急角度な二次的剥離を加え緩い弧状の縁辺形状を作り出している(湾曲度0.09)。右側縁上部に表面から不規則剥離を加えている。素材打面は二次的剥離で欠落する。変形度はやや大きいと考えられる。先端開き角は63.8°となる。素材のフェザーエッジは左側縁中位に残される(刃先角70.6°)。器体中位にガジリによる折れが確認される。

4は石器集中1より出土の黒曜石製(Ob_8)の錐で、剥片を素材(長幅比1.35)として横位に用いている。素材打面を右側に設定し、左側下縁は主要剥離面側から急角度の二次的剥離を加え、右側下縁は主要剥離面側から一枚の二次的剥離を加えて抉入状の縁辺を作り出している。この左右の縁辺を交差させ下縁中央部に尖った刃部を作り出している(刃先角64.5°)。左側縁上部は表面側から面的な二次的剥離を加えている。左側縁下部は表面側から一枚の二次的剥離を、その後、急角度な二次的剥離を加えている。表面は原石(ズリ)を残す。

5・6は石器集中1より出土の二次加工のある剥片である。**5**は黒曜石製(Ob_8)で、剥片(長幅比 1.38)を素材として縦位に用いている。素材打面を上部に設定し、右側縁先端部及び下部に急角度の二次的剥離を加えている。右側縁中央部に主要剥離面側からの面的な二次的剥離を加え、挟入状の縁辺を作り出している。左側縁先端部は主要剥離面側に面的な二次的剥離を加え素材打面は欠落する。右下面は表面側からの折れにより欠損している。**6**は黒曜石製(Ob_8)で、縦長剥片(長幅比 2.43)を素材として縦位に用いている。素材打面を上部に設定し、右側縁には交互に面的な二次的剥離を加えている。右側縁下部に表面側から広い一枚の二次的剥離を加えている。表面左側(原石)ズリを残す。

7は石器集中1より出土の黒曜石製(Ob_13)の小型剥片で、縦長剥片を素材(長幅比 2.53、幅 6.51mm)として縦位に用いている。表面に縦方向の剥離面を残し中央に稜が通る。側面は表面方向に湾曲している(湾曲度 0.10)。

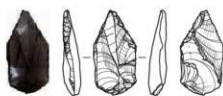
8は石器集中1より出土の黒曜石製(Ob_8)の調整剥片で、ナイフ形石器の調整の際に取れた調整剥片と考えられる。主要剥離面側から二次的剥離を加えている。

9の接合資料-5は、石器集中1より出土の黒曜石製(Ob_8)の使用痕のある剥片である。石器集中1と試掘一括間の折れ面接合で、2点(00-104・0091)が接合している。打撃時の割れと考えられる。剥片(長幅比 0.87)を素材として縦位に用いている。素材打面を上部に設定し、右側縁下部に使用痕が残る。

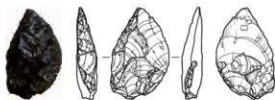
10～12は石器集中2より出土の石核である。**10**は黒曜石製(Ob_11)である。打面は上面の複剥離打面及び裏面に設定されている。作業面は表面に設定されている。右側縁には交互の剥片剥離が認められる。裏面に原石(ズリ)が残る。**11**は黒曜石製(Ob_単)である。打面は上面の複剥離打面と左に90°回転移動した原石(ズリ)面に設定されている。作業面は表面に固定されている。その他の面は原石(ズリ)で構成されている。**12**は黒曜石製(Ob_13)である。打面は上面剥離打面及び右に90°回転移動した平坦打面に設定されている。作業面は表面・右面・裏面に設定されている。表・裏・右作業面に広い一枚の剥離面が確認される。最終的に右側縁からの剥離を加えている。下面に原石(ズリ)が残る。

〈接合資料〉

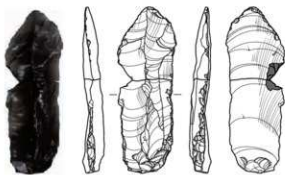
13の接合資料-1は石器集中1と石器集中2間の接合で、黒曜石製(Ob_13)である。二次的剥離のある剥片1点(0051)及び石核1点(0037 実測図12)が接合する。剥片進行は0051→0037の順となる。0051は上面を打面とし剥離された剥片(長幅比 2.28)である。**14**の接合資料-2は石器集中1内の接合で、黒曜石製(Ob_8)である。楔形石器(0098)1点及び剥片1点(0020)が接合する。剥片進行は0098→0020の順となる。上面の打面から連続的に剥離されている。楔形石器(0098)は剥片を素材(長幅比 1.33)として縦位に用いている。素材打面を上部に設定し、両端部に対向する剥離が伴う辺が形成されている。上端は平坦、下端は弧状をなしている。**15**の接合資料-3は石器集中3内の接合で、黒曜石製(Ob_7)である。剥片2点(0001・0005)が接合する。剥片進行は0001→0005の順となる。剥片(0001)は上面の打面より剥離され(長幅比 1.30)、上部は折れとなる。



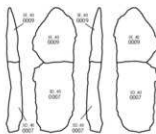
1 石器集中1 Ob.8
(3D-39_0019)



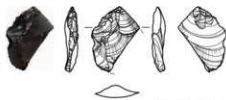
2 石器集中1 Ob.7
(3D-39_0039)



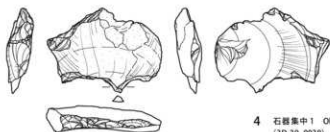
3 石器集中2 Ob.12
(3E-40_0007+0009)



S=1/2



5 石器集中1 Ob.8
(3D-39_0016)



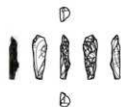
4 石器集中1 Ob.8
(3D-39_0038)



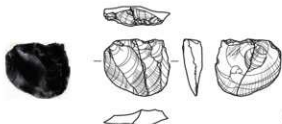
6 石器集中1 Ob.8
(3D-39_0035)



7 石器集中1 Ob.13
(3D-39_0041)



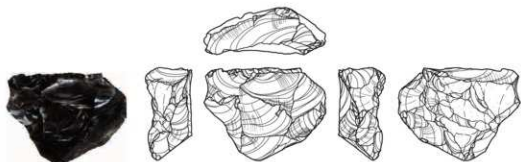
8 石器集中1 Ob.8
(3D-39_0044)



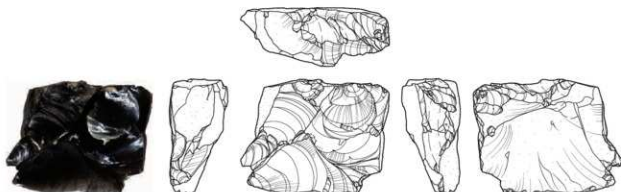
9 石器集中1 Ob.9
(3D-39_0091+00-104)



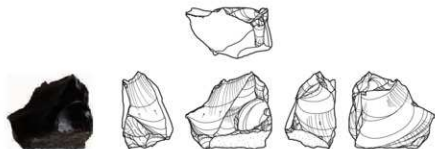
S=1/2



10 石器集中2 Ob.11
(3E-40_0001)



11 石器集中2 Ob.單
(3E-40_0004)



12 石器集中2 Ob.13
(3E-40_0006)



13 石器集中1-2 Ob.13
(接合資料-1(III) 3D-39_0051+3E-40_0006)

S=1/2



14 石器集中1 Ob.8
(接合資料-2(III) 3D-39_0020+0096)

S=1/2



S=1/2

15 石器集中3 Ob.7
(接合資料-3(III)
3B-38_0001+0005)

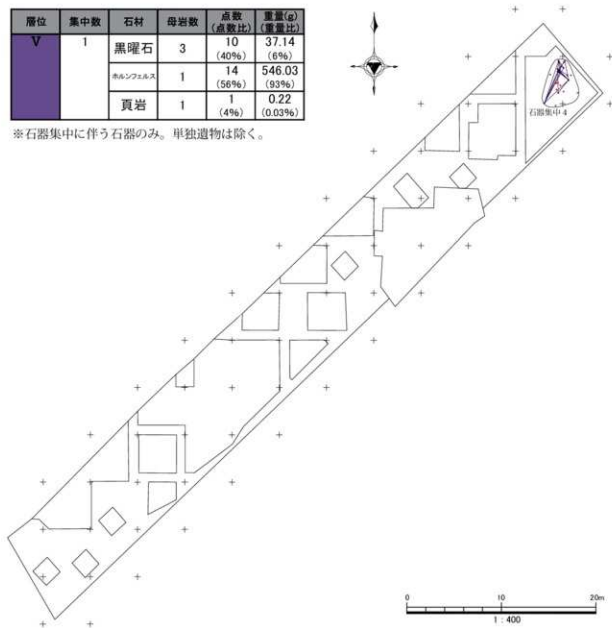
2. 第V層

概要

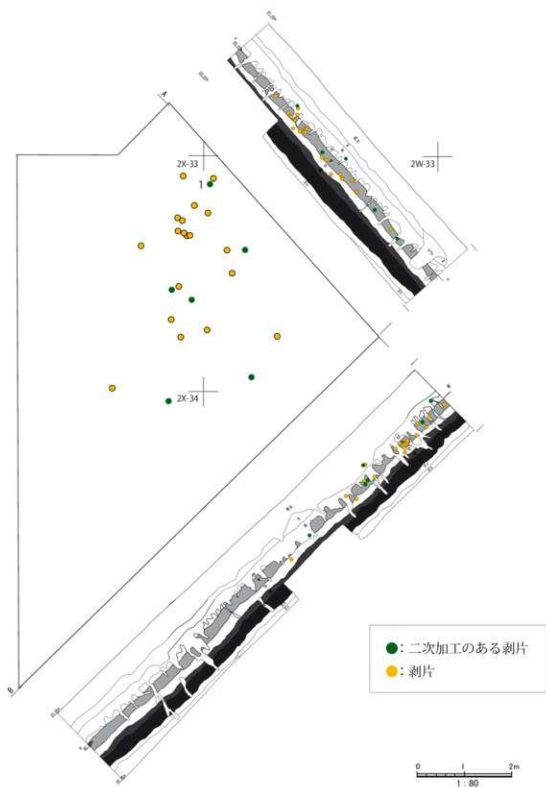
立川ローム第V層中位に主としてまとまりを見せる石器群。遺物の垂直分布幅は40.22 m～39.77 mの範囲であり、出土標高の平均値は39.94 mである。第V層に属する石器は27点で、平面分布より調査区の北東部端に単独で石器集中が確認された。単独遺物も2点確認されている。石器の内訳は剥片類であり、剥片類の長幅比(0.5以下)8%・(0.5～1.5)72%・(1.5以上)20%である。接合資料は1個体が確認された。石材はホルンフェルスが点数比56%・黒曜石が同40%とほぼ二分される。母岩構成は3種(Ho_2、Ob_1～2)及び単独母岩2種である。

層位	集中数	石材	母岩数	点数 (点数比)	重量(g) (重量比)
V	1	黒曜石	3	10 (40%)	37.14 (6%)
		ホルンフェルス	1	14 (56%)	546.03 (93%)
		頁岩	1	1 (4%)	0.22 (0.03%)

※石器集中に伴う石器のみ。単独遺物は除く。

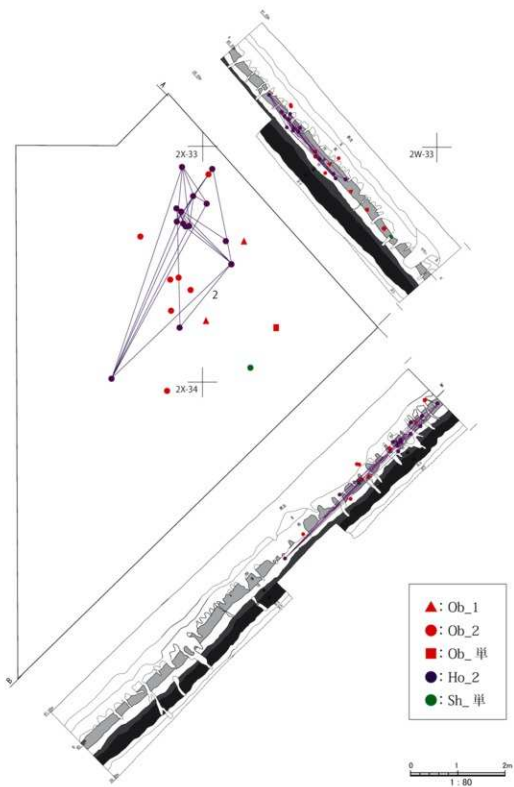


第21図 第V層石器分布図(1/400)



第22図 第V層石器集中4器種別分布図(1/80)

<石材別>



第23图 第V層石器集中4石材別分布图(1/80)

【遺構】

石器集中4(第22図・第23図)

調査区の北東端部(2X-33・2W-33グリッド)に位置する。NS4.75 m×EW3.49 mの範囲に散漫な分布を示す25点の石器で構成される。遺物の出土層位は第Ⅲ層～第Ⅵ層で、垂直方向に0.45 mの幅で分布している。遺物出土のピークは第Ⅴ層中位の標高39.80 m付近(平均値は39.94 m)である。石器集中は単独で存在するが、両側に第Ⅶ層～第Ⅸ層の石器集中10及び石器集中11が近接する。器種構成の内訳は、剥片類25点(二次加工のある剥片・使用痕のある剥片・砕片含む)である。接合関係は石器集中内で1個体確認された。石材は点数比でホルンフェルス56%・黒曜石40%とほぼ二分される。母岩構成は3母岩(Ho_2、Ob_1～2)及び単独母岩(Ob・Sh各1種)である。

母岩名/器種	剥片	使用痕のある剥片	砕片	点数	重さ(g)
Ob_1	1		1	2	24.96
Ob_2	3		4	7	10.63
Ho_2	14			14	546.03
Ob_単	1			1	1.55
Sh_単		1		1	0.22
合計	19	1	5	25	583.39

第Ⅴ層石器集中4 母岩別器種一覧表

【出土遺物】(第24図)

出土した石器のうち、二次加工のある剥片1点・接合資料1例を掲載した。

〈石器〉

1は石器集中4より出土の黒曜石製(Ob_2)の二次加工のある剥片で、剥片を素材(長幅比1.30)として縦位に用いている。素材打面を上部に設定し、打撃時に折れたと考えられる面に、表面側から面的な二次的剥離を加えている。左側縁上部及び下部に不規則剥離が確認される。

〈接合資料〉

2の接合資料-1は石器集中4内の接合で、ホルンフェルス製(Ho_2)である。剥片14点(0007・0009・0010・0011・0012・0014・0015・0016・0017・0018・0019・0026・0028・0036)が接合する。剥片進行は、0016→0010+0014(折れ)+0019+0028(同時割れ)→(90°打面転位)→0007→0015+0009(折れ)→0026→0012→0011→0017→(90°打面転位)→0036→0018の順となり、右面の打面より剥片剥離→90°打面転位→下面の打面から剥片剥離→90°打面転位→左面の打面から剥片剥離の作業が行われている。

掲載	接合No	サブナ	遺物No	集中No	種類	石材	母岩	重量(g)	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	X座標	Y座標	標高
				石4(V)	剥片	黒曜石								
	接合-1(V)			石4(V)	剥片	ホルンフェルス								
	接合-1(V)			石4(V)	剥片	ホルンフェルス								
	接合-1(V)			石4(V)	剥片	ホルンフェルス								
	接合-1(V)			石4(V)	剥片	ホルンフェルス								
	接合-1(V)			石4(V)	剥片	ホルンフェルス								
	接合-1(V)			石4(V)	剥片	ホルンフェルス								
	接合-1(V)			石4(V)	剥片	ホルンフェルス								
	接合-1(V)			石4(V)	剥片	ホルンフェルス								
	接合-1(V)			石4(V)	剥片	ホルンフェルス								
	接合-1(V)			石4(V)	剥片	ホルンフェルス								
	接合-1(V)			石4(V)	剥片	ホルンフェルス								
	接合-1(V)			石4(V)	剥片	ホルンフェルス								
	接合-1(V)			石4(V)	剥片	ホルンフェルス								
	接合-1(V)			石4(V)	剥片	ホルンフェルス								
	接合-1(V)			石4(V)	剥片	ホルンフェルス								

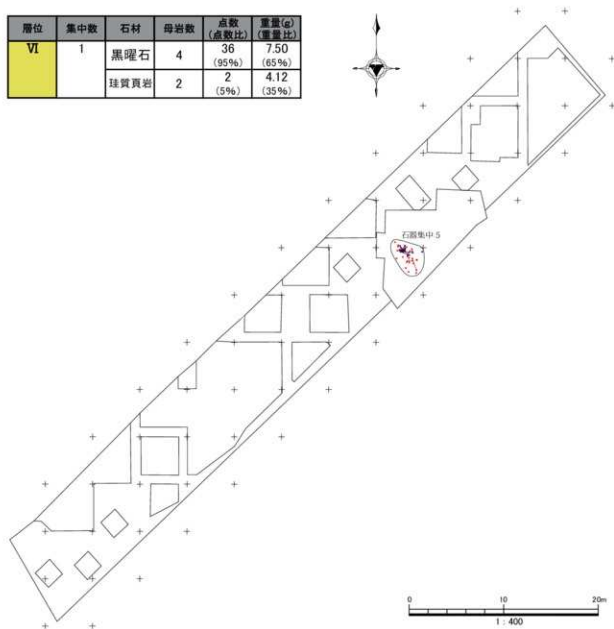
第2表 第Ⅴ層掲載石器属性表

3. 第VI層

概要

立川ローム第VI層下部に主としてまとまりを見せる石器群。遺物の垂直分布幅は標高 40.31 m～39.71 m の範囲であり、出土標高の平均値は 40.03 m である。第VI層に属する石器は 38 点で、平面分布から調査区の中央部東に単独で石器集中が確認された。石器の内訳はナイフ形石器 4 点、それ以外は剥片類で、剥片類の長幅比 (0.5 以下) 4%・(0.5～1.5) 78%・(1.5 以上) 18% である。接合資料は 2 個体が確認された。石材はほぼ黒曜石が占め (点数比 95%)、母岩構成は 4 種 (Ob_3～6) 及び単独母岩 2 種である。

層位	集中数	石材	母岩数	点数 (点数比)	重量(g) (重量比)
VI	1	黒曜石	4	36 (95%)	7.50 (65%)
		珪質頁岩	2	2 (5%)	4.12 (35%)



第 25 図 第VI層石器分布図(1/400)

【遺構】

石器集中5(第26図・第27図)

調査区の中央部東(3A-37グリッド)に位置する。NS3.25 m×EW2.36 mの狭い範囲に密集した分布を示す38点の石器で構成される。遺物の出土層位は第V層～第VII層で、垂直方向に0.61 mの幅で分布している。遺物出土のピークは第VI層下部の標高40.03 m付近(平均値は40.43 m)である。石器集中は単独で存在し、第VII層～第IX層の石器集中14に重複する。器種構成の内訳は、ナイフ形石器4点・剥片類34点(二次加工のある剥片・使用痕のある剥片・砕片含む)である。接合関係は石器集中内で2個体確認された。石材は黒曜石が主体を占める(点数比95%)。母岩構成は4母岩(Ob_3～6)及び単独母岩(SSh2種)である。

母岩名/器種	剥片	ナイフ形石器	砕片	ナイフ形石器	点数	重量(g)
Ob_3	9	1	1		11	1.59
Ob_4	11		6	4	21	4.09
Ob_5	2				2	0.72
Ob_6	2				2	0.80
SSh_単		1			1	1.29
SSh_単		1			1	2.83
合計	24	3	7	4	38	11.62

第VI層石器集中5 母岩別器種一覧表

【出土遺物】(第28図)

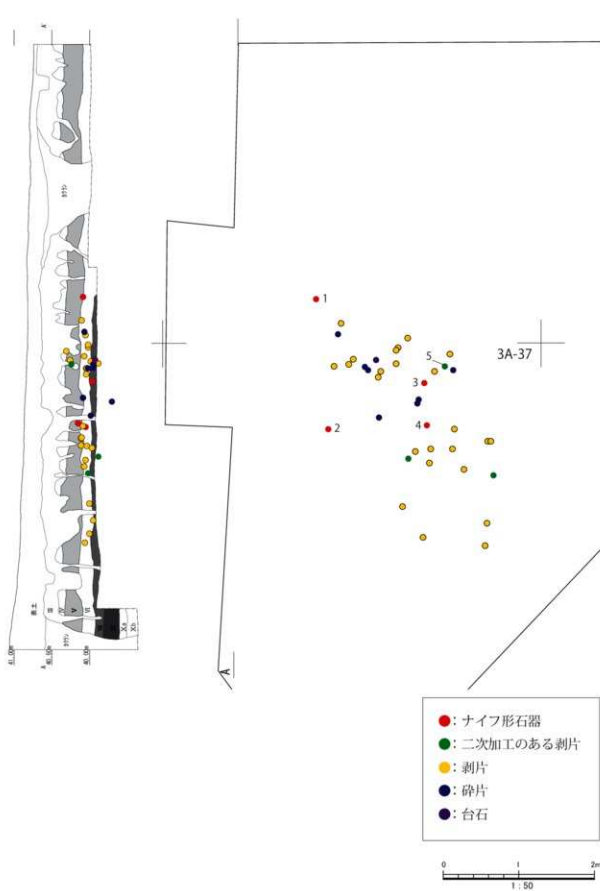
出土した石器のうち、ナイフ形石器4点・二次加工のある剥片1点・接合資料1例を掲載した。

〈石器〉

1～4は、石器集中5より出土のやや小型のナイフ形石器である。1は黒曜石製(Ob_4)で、剥片(長幅比2.07)を素材として縦位～斜位に用いている。素材打面を基部に設定し、先端部は表面からの折れ、基部は主要剥離面側からの折れで欠損している。左側縁に主要剥離面側から急角度の二次的剥離を加えて緩い弧状の縁辺形状を作り出し(湾曲度0.12)、右側縁下部には急角度の二次的剥離を加え縁辺形状を作り出している。右側縁上部は先端方向から一枚の剥離を加えている。素材変形度はやや大きいと考えられる。先端開き角は27.5°となる。2は黒曜石製(Ob_4)で、縦長剥片(長幅比2.12)を素材として縦位～斜位に用いている。素材打面を基部に設定し、左側縁上部は主要剥離面側からの折れで欠損し、左側縁下部に主要剥離面側から急角度の二次的剥離を加えて直線状の縁辺形状を作り出している。素材変形度はやや大いと考えられる。二次的剥離により素材打面は欠落する。素材のフェザーエッジは左側縁上部に残される(刃先角27.6°)。3は黒曜石製(Ob_4)で、剥片(長幅比2.01)を素材として縦位に用いている。素材打面を基部に設定し、下部は主要剥離面側からの折れで欠損している。左側縁上部に主要剥離面側から急角度の二次的剥離を加えて緩い弧状の縁辺形状を作り出している(湾曲度0.12)。素材変形度はやや大きいと考えられる。先端開き角は56.1°となる。素材のフェザーエッジは右側縁上部に残される(刃先角25.8°)。4は黒曜石製(Ob_4)で、剥片を素材として縦位に用いている。素材打面を基部に設定し、上部は主要剥離面側からの折れで欠損している。左側縁下部に主要剥離面側から急角度の二次的剥離を加えて直線状の縁辺形状を作り出している。基部は緩やかな剥離を加えて緩い弧状の縁辺形状を作り出している。素材変形度はやや大きいと考えられる。

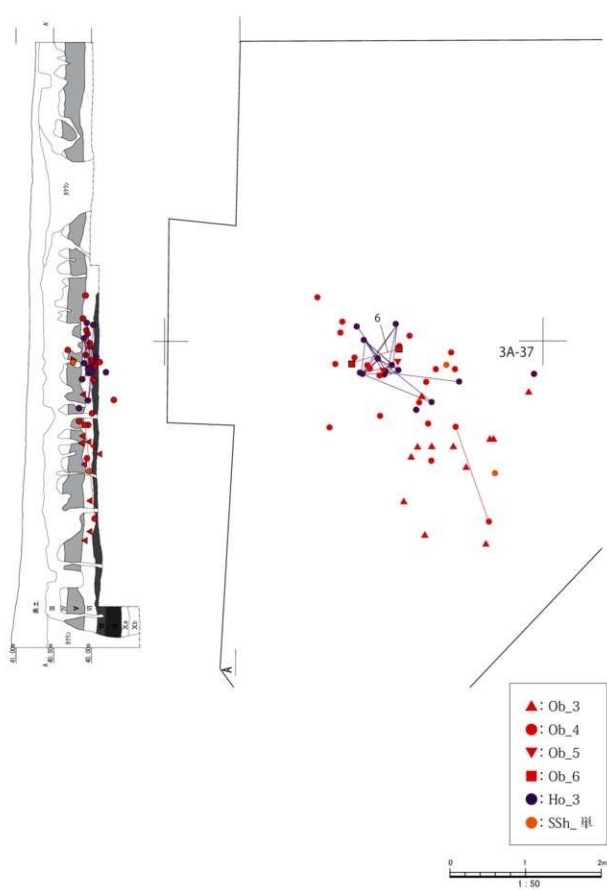
5は石器集中5より出土の珪質頁岩製(SSh_単)の二次加工のある剥片で、剥片(長幅比1.18)を素材として縦位に用いている。素材打面を上部に設定し、左側縁下部に表面からの細かい二次的剥離を加えている。素材打面は平坦打面となる。

<器種別>



第26図 第VI層石器集中5器種別分布図(1/50)

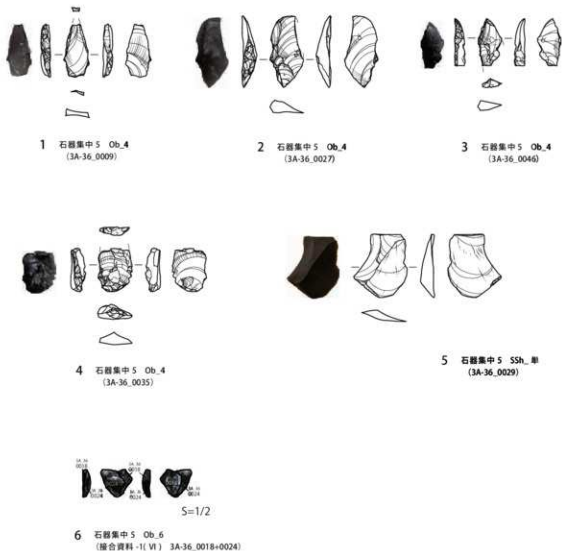
<石材別>



第 27 图 第VI層石器集中5 石材別分布図(1/50)

〈接合資料〉

6の接合資料-1は石器集中5内の接合で、黒曜石製(Ob_6)である。剥片2点(0018・0024)が接合する。剥片進行は0018→0024の順となり、上面の打面から連続的に剥離されている。0018及び0024両方の剥片に打面調整が残る。



第28図 第VI層出土石器(2/3)

図録	接合No	グループ	遺物No	集中No	種別	石材	母岩	重量(g)	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	X座標	Y座標	標高
				石S(VI)	ナワ形石器	黒曜石								
				石S(VI)	ナワ形石器	黒曜石								
				石S(VI)	ナワ形石器	黒曜石								
				石S(VI)	ナワ形石器	黒曜石								
				石S(VI)	特殊片	黒曜石	SSH_準							
	接合-1(VI)			石S(VI)	剥片	黒曜石								
	接合-1(VI)			石S(VI)	剥片	黒曜石								

第3表 第VI層 掲載石器属性表

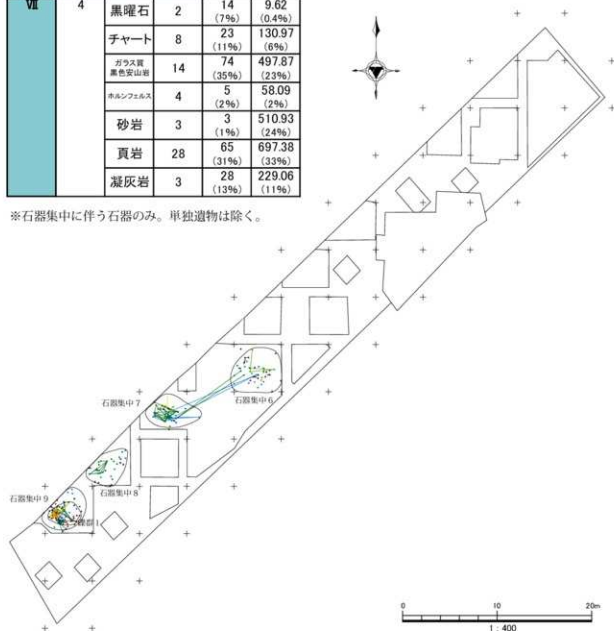
4. 第七層

概要

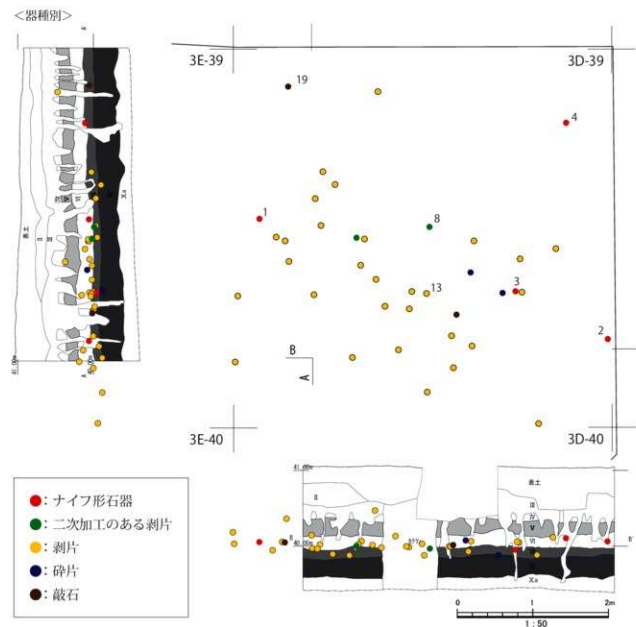
立川ローム第七層上部～中位に主としてまとまりを見せる石器群。遺物の垂直分布幅は 40.65 m～39.75 m の範囲で出土標高の平均値は 40.23 m である。第七層に属する石器は 213 点で、平面分布より調査区の中央部から南西方向にかけて 4 箇所の石器集中が確認された。単独遺物も 1 点確認されている。石器内訳は、ナイフ形石器 6 点・楔形石器 5 点・石核 3 点・敲石 6 点、それ以外は剥片類 200 点で、剥片類の長幅比 (0.5 以下) 2%・(0.5～1.5) 68%・(1.5 以上) 30% である。接合資料は 19 個体が確認された。石材はガラス質黒色安山岩が点数比 35%・頁岩が同 30%・凝灰岩が同 13%・チャートが同 11% ほかとなる。母岩構成は 27 種 (Sh_2～10, GAn_2～8, Ch_20～24, Tu_1・4～5, Ob_1～2, Ho_1) 及び単独母岩 35 種である。

層位	集中数	石材	母岩数	点数 (点数比)	重量(g) (重量比)
VII	4	黒曜石	2	14 (7%)	9.62 (0.4%)
		チャート	8	23 (11%)	130.97 (6%)
		ガラス質 黒色安山岩	14	74 (35%)	497.87 (23%)
		ホルンフェルス	4	5 (2%)	58.09 (2%)
		砂岩	3	3 (1%)	510.93 (24%)
		頁岩	28	65 (31%)	697.38 (33%)
		凝灰岩	3	28 (13%)	229.06 (11%)

※石器集中に伴う石器のみ。単独遺物は除く。



第 29 図 第七層石器・礫分布図(1/400)



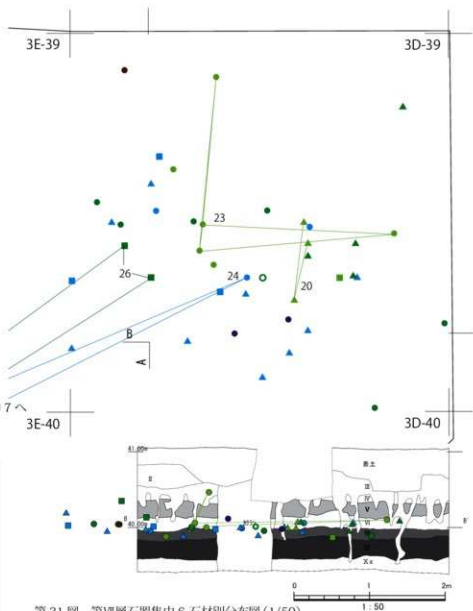
第30図 第Ⅶ層石器集中6器種別分布図(1/50)

【遺構】

石器集中6(第30図・第31図)

調査区の中央部(3D-39グリッド)に位置する。NS4.46 m×EW4.93 mの範囲にまばらに分布を示す41点の石器で構成される。遺物の出土層位は第Ⅲ層～第Ⅶ層で、垂直方向に0.60 mの幅で分布している。遺物出土のピークは第Ⅶ層上部の標高39.95 m付近(平均値は40.03 m)である。第Ⅲ層の石器集中1に重複し、南西方向に石器集中7が隣接する。器種構成の内訳は、ナイフ形石器4点・敲石4点・剥片類33点(二次加工のある剥片・使用痕のある剥片・破片含む)である。接合関係は石器集中内で5個体が確認され、そのうち3個体が石器集中7と石器集中間で接合する。石材は点数比でガラス質黒色安山岩39%・頁岩32%ほかで構成される。母岩構成は6母岩(GAn₂～3、Sh₂～3、Tu₄～5)及び単独母岩(GAn₃種、Sh₇種、Ho₂種、Sa・Tu各1種)である。他の石器集中より単独母岩が多いのが特徴である。GAn₂及びSh₃は石器集中7でも確認された。

<石材別>



● 石器集中7へ

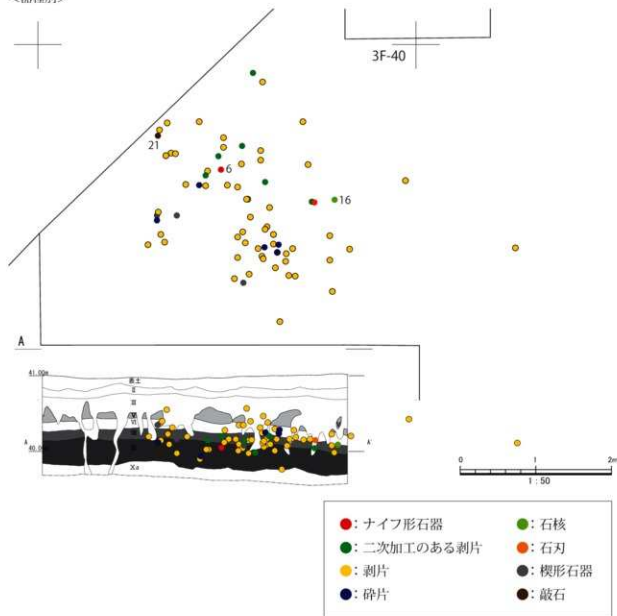


第31図 第Ⅶ層石器集中6 石材別分布図(1/50)

母岩名/種類	剥片	片断以外の母岩片	碎片	敲石	什形形石器	点数	重さ (g)
GAn_2	4					4	43.79
GAn_3	9					9	14.76
Sh_2	1		1		2	4	8.08
Sh_3	2					2	4.09
Tu_4				3		3	111.27
Tu_5	6					6	20.28
GAn_単	1					1	3.41
GAn_単	1					1	4.80
GAn_単	1					1	0.67
Ho_単	1					1	8.87
Ho_単	1					1	7.83
Sa_単				1		1	155.39
Sh_単	1					1	1.98
Sh_単		1				1	14.30
Sh_単		1				1	42.30
Sh_単					1	1	7.66
Sh_単	1					1	8.15
Sh_単	1					1	7.24
Sh_単					1	1	5.18
合計	30	2	1	4	4	41	470.05

第Ⅶ層石器集中6 母岩別器種一覧表

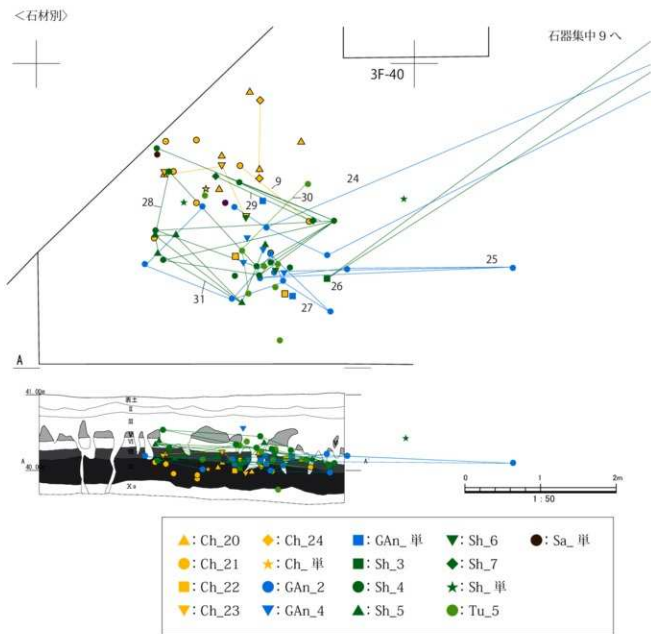
<器種別>



第32図 第Ⅶ層石器集中7器種別分布図(1/50)

石器集中7(第32図・第33図)

調査区の中央部南西(3F-40グリッド)に位置する。NS3.27 m×EW2.67 mの狭い範囲に密集し分布を示す72点の石器で構成される。遺物の出土層位は第Ⅲ層～第Ⅸ層で、垂直方向に0.80 mの幅で分布している。遺物出土のピークは第Ⅶ層中位の標高40.10 m付近(平均値は40.15 m)である。北東方向に石器集中6が、南西方向に石器集中8が隣接する。器種構成の内訳は、ナイフ形石器1点・楔形石器3点・石核1点・石刃1点・敲石1点・剥片類65点(二次加工のある剥片・使用痕のある剥片・破片含む)である。接合関係は石器集中内で8個体が確認され、そのうち3個体が石器集中6と石器集中間で接合する。石材は点数比でチャート29%・ガラス質黒色安山岩27%ほかで構成される。母岩構成は13母岩(GAn_2～3、Sh_3～7、Tu_1、Ch_20～24)及び単独母岩(GAn2種、Sh、Ch、Sa)である。GAn_2及びSh_3は石器集中6でも確認された。

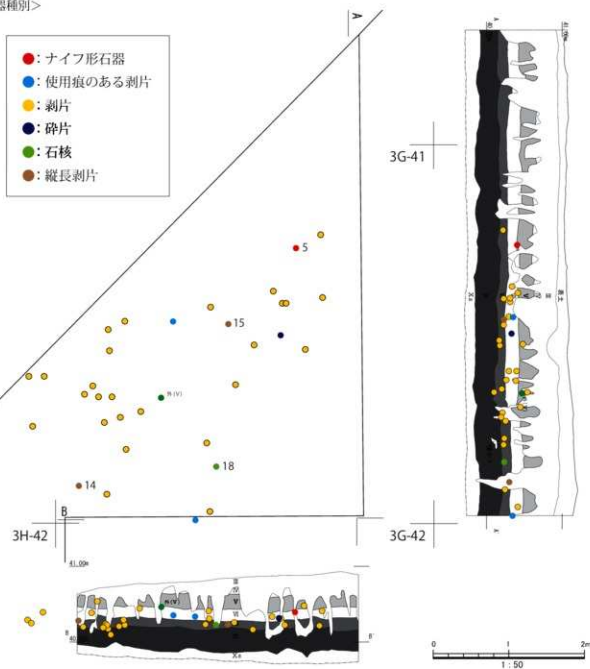


第33図 第Ⅶ層石器集中7器種別分布図(1/50)

母岩名/器種	剥片	破片	石刃	敲石	片形石器	石核	楔形石器	点数	重量(g)
Ch_20	4	1				1		6	10.72
Ch_21	3	2	2					7	3.77
Ch_22	2							2	1.02
Ch_23	3							3	9.20
Ch_24	2							2	80.91
GAn_2	12							12	141.97
GAn_4	4							4	2.48
Sh_3	1							1	11.00
Sh_4	12					1		13	141.02
Sh_5	2						3	5	47.61
Sh_6	1		1					2	0.25
Sh_7	1	1		1				2	22.02
Tu_5	5	1	2					8	24.41
Sa_単					1			1	123.11
Sh_単	1							1	10.34
Ch_単	1							1	6.74
GAn_単		1						1	33.94
GAn_単	1							1	6.70
合計	54	6	5	1	1	1	3	72	677.20

第Ⅶ層石器集中7母岩別器種一覧表

<器種別>

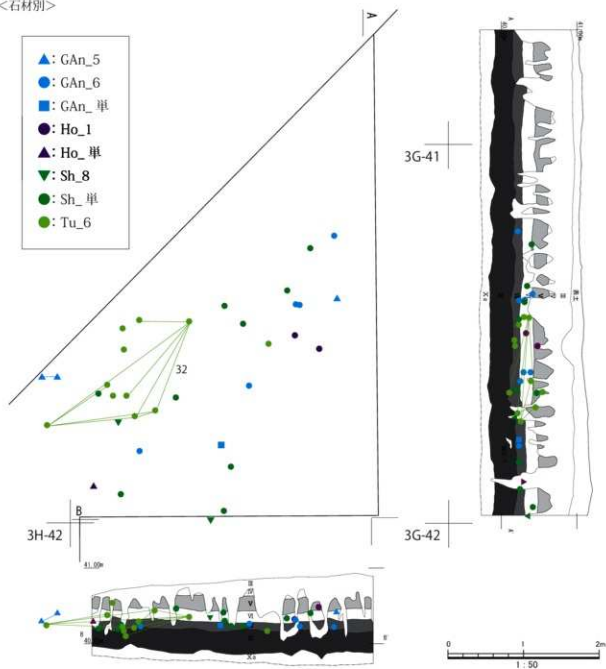


第34図 第Ⅶ層石器集中8器種別分布図(1/50)

石器集中8 (第34図・第35図)

調査区の南西方向(3G-41グリッド)に位置する。NS3.79 m×EW3.89 mの範囲にまばらに分布を示す33点の石器で構成される。遺物の出土層位は第Ⅴ層～第Ⅶ層で、垂直方向に0.44 mの幅で分布している。遺物出土のピークは第Ⅶ層上部の標高40.25 m付近(平均値は40.30 m)である。北東方向に石器集中7が、南西方向に石器集中9が隣接する。器種構成の内訳は、ナイフ形石器1点・石核1点・剥片類31点(縦長剥片・二次加工のある剥片・使用痕のある剥片・碎片含む)である。接合関係は石器集中内で2個体が確認された。石材は点数比で凝灰岩33%・頁岩30%ほどで構成される。母岩構成は5母岩(GAn_5～6、Sh_8、Tu_6、Ho_1)及び単独母岩(GAn、Ho、Sh8種)である。

<石材別>

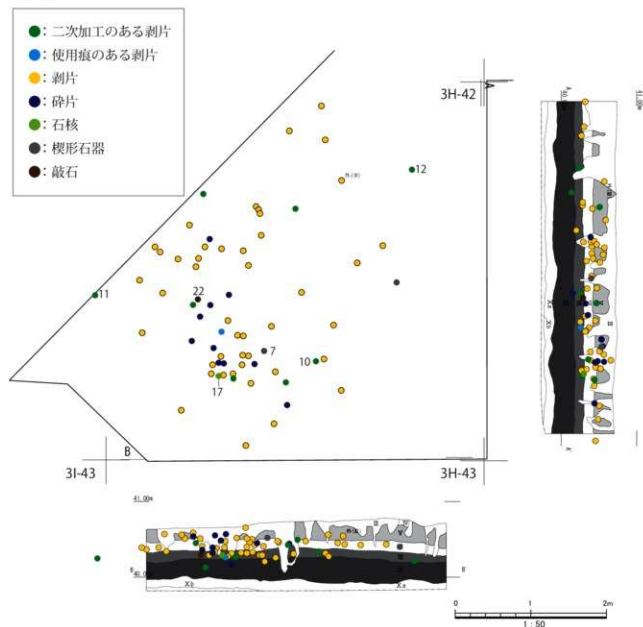


第35図 第Ⅶ層石器集中8石材別分布図(1/50)

母岩名/産種	剥片	碎片	母岩面剥片	片形石器	石核	点数	重量(g)
GAn_5	3					3	37.26
GAn_6	5					5	42.61
Ho_1		2				2	16.61
Sh_8	1		1			2	3.49
Tu_1	10		1			11	73.10
Sh_単	1					1	3.90
Sh_単	1					1	10.17
Sh_単	1					1	2.53
Sh_単				1		1	9.06
Sh_単	1					1	0.50
Sh_単	1					1	13.18
Sh_単					1	1	159.46
Sh_単 (縦長)	1					1	48.40
Ho_単 (縦長)	1					1	24.78
GAn_単	1					1	13.11
合計	27	2	2	1	1	33	458.16

第Ⅶ層石器集中8母岩別器種一覧表

<器種別>

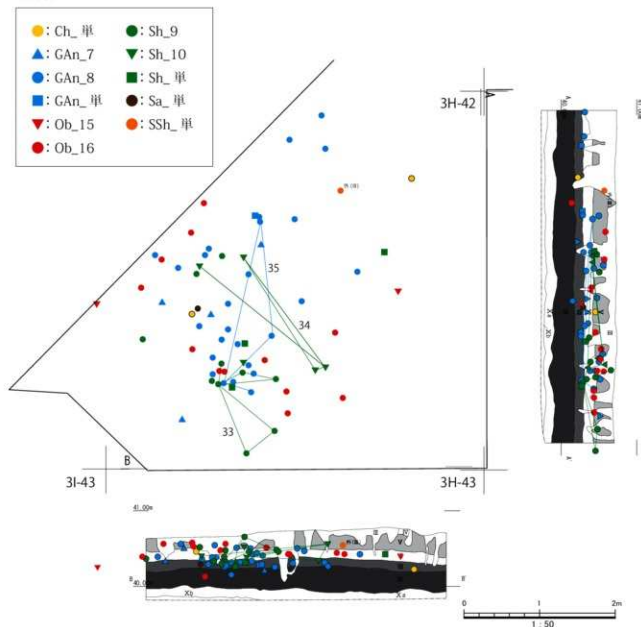


第36図 第Ⅶ層石器集中9器種別分布図(1/50)

石器集中9(第36図・第37図)

調査区の南西端部(3H-42グリッド)に位置する。NS4.49 m × EW4.20 mの範囲に密集し分布を示す66点の石器で構成される。遺物の出土層位は第Ⅲ層～第Ⅶ層で、垂直方向に0.52 mの幅で分布している。遺物出土のピークは第Ⅶ層上部の標高40.30 m付近(平均値は40.45 m)である。北東方向に石器集中8が隣接する。器種構成の内訳は、楔形石器2点・石核1点・敲石1点・剥片類62点(二次加工のある剥片・使用痕のある剥片・碎片含む)である。接合関係は石器集中内で3個体が確認された。石材は点数比でガラス質黒色安山岩47%・黒曜石21%ほかで構成される。母岩構成は6母岩(GAn_7～8、Ob_15～16、Sh_9～10)及び単独母岩(Sa・GAn各1種、Sh3種、Ch2種)である。

<石材別>

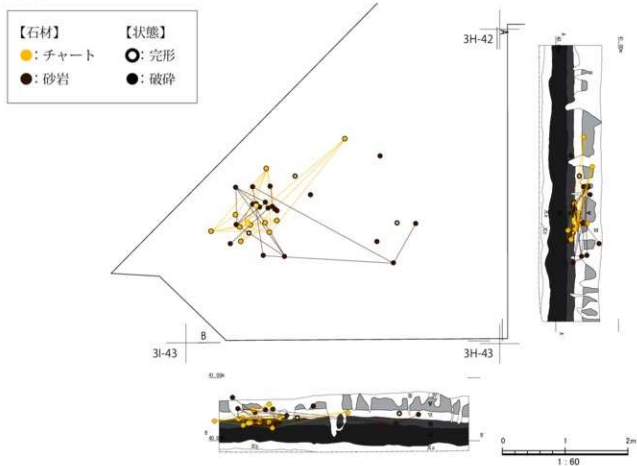


第37図 第Ⅶ層石器集中9石材別分布図(1/50)

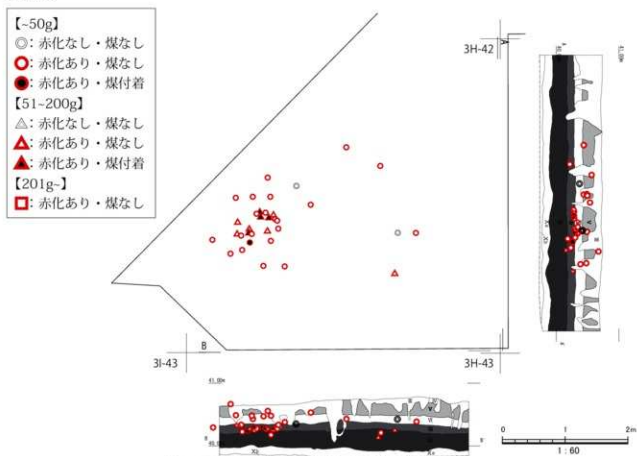
母岩名/器種	剥片	碎片	楔形石器	敲石	石核	点数	重さ (g)
GAn_7	4					4	14.17
GAn_8	19	1	1			26	125.20
Sh_9	9				1	10	70.86
Sh_10	4	1				5	1.71
Ob_15		1		1		2	5.85
Ob_16	5	2	4	1		12	3.77
Sh_単		1				1	20.92
Sa_単					1	1	232.43
Ch_単		1				1	2.93
Ch_単		1				1	15.68
GAn_単	1					1	13.00
Sh_単	1					1	0.18
Sh_単	1					1	22.05
合計	44	8	9	1	2	66	528.75

第Ⅶ層石器集中1 母岩別器種一覧表

<石材別>



<重量別>



第38図 第七層礫群1 石材別・重量別 分布図(1/60)

礫群 1 (第 38 図)

調査区の南西端部 (3H-42 グリッド) に位置する。石器集中 9 と重複する。NS2.10 m × EW3.30 m の範囲に一部密集し分布を示す 36 点の礫で構成される。遺物の出土層位は第Ⅲ層～第Ⅳ層で、垂直方向に 0.65 m の幅で分布している。礫の状態は完形が 6 点、赤化が 21 点、煤付きが 3 点であり、重量は 0.07 g ~ 189 g とばらつきがある。石材は点数比で砂岩 64%・チャート 36% で構成されている。接合関係は、礫群内で 7 個体が確認された。

図録 No	接合 No	フタガ	遺物 No	集石 No	種別	石材	母岩	重量 (g)	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	X座標	Y座標	標高
1		3D-39	0105	石 6 (V)	ナリ解石器	頁岩	Sh_ 崖	5.18	53.45	14.57	8.19	-18502.242	-29279.690	40.058
2		3D-39	0084	石 6 (V)	ナリ解石器	頁岩	Sh_ 崖	7.66	62.92	17.09	9.85	-18503.842	-29275.000	40.066
3		3D-39	0082	石 6 (V)	ナリ解石器	頁岩	Sh_ 2	6.20	42.20	19.56	7.82	-18503.196	-29276.300	39.954
4		3D-39	0090	石 6 (V)	ナリ解石器	頁岩	Sh_ 2	1.63	18.00	14.53	6.51	-18500.972	-29277.800	40.100
5		3G-41	0013	石 8 (V)	ナリ解石器	頁岩	Sh_ 崖	9.06	47.48	16.90	8.29	-18511.378	-29291.866	40.402
6		3F-40	0029	石 7 (V)	ナリ解石器	チャート	Ch_ 20	0.62	10.48	16.05	4.54	-18506.670	-29287.638	40.052
7		3H-42	0015	石 9 (V)	硬砂石器	黒曜石	Ob_ 16	2.18	24.79	21.97	6.02	-18518.556	-29297.956	40.518
8		3D-39	0078	石 6 (V)	ナリ解石器	頁岩	Sh_ 崖	42.30	76.48	40.18	17.80	-18502.346	-29277.434	39.990
9	接合-14 (V)	3F-40	0034-0070	石 7 (V)	ナリ解石器	チャート	Ch_ 21	3.95	17.96	24.75	7.26			
9	接合-14 (V)	3F-40	0034	石 7 (V)	ナリ解石器	チャート	Ch_ 21	2.38	17.96	24.75	6.85	-18506.258	-29287.354	40.134
9	接合-14 (V)	3F-40	0070	石 7 (V)	ナリ解石器	チャート	Ch_ 21	0.14	13.91	5.69	2.86	-18507.090	-29286.430	40.038
10	接合-12 (V)	3H-42	0090	石 9 (V)	ナリ解石器	頁岩	Sh_ 10	28.09	46.81	36.70	15.66	-18518.694	-29297.270	40.346
11		3H-42	0061	石 9 (V)	ナリ解石器	黒曜石	Ob_ 15	3.88	21.95	20.61	12.18	-18517.816	-29280.196	40.260
12		3H-42	0043	石 9 (V)	ナリ解石器	チャート	Ch_ 崖	15.68	51.95	36.01	10.85	-18516.166	-29286.000	40.224
13		3D-39	0064	石 8 (V)	剥片	頁岩	Sh_ 崖	1.98	20.49	16.79	7.92	-18503.242	-29277.496	40.024
14		3G-41	0021	石 8 (V)	(縦長) 剥片	頁岩	Ho_ 崖	24.78	75.16	24.83	21.60	-18514.518	-29294.754	40.264
15		3G-41	0028	石 8 (V)	(縦長) 剥片	頁岩	Sh_ 崖	48.40	84.15	37.35	17.65	-18512.374	-29292.762	40.236
16	接合-6 (V)	3F-40	0068	石 7 (V)	石核	頁岩	Sh_ 4	119.79	50.26	50.66	41.80	-18507.082	-29286.104	40.090
17	接合-11 (V)	3H-42	0096	石 9 (V)	石核	頁岩	Sh_ 9	243.88	46.86	64.97	73.41	-18518.884	-29285.556	40.290
18		3G-41	0024	石 8 (V)	石核	頁岩	Sh_ 崖	159.46	72.20	60.87	35.17	-18511.262	-29292.916	40.234
19		3D-39	0107	石 6 (V)	礫石	砂岩	Sa_ 崖	155.39	74.68	51.47	31.65	-18500.498	-29279.328	40.048
20	接合-15 (V)	3D-39	0062-0079	石 6 (V)	礫石	凝灰岩	Tu_ 4	111.27	60.32	60.54	22.64			
20	接合-15 (V)	3D-39	0063	石 6 (V)	礫石	凝灰岩	Tu_ 4	107.32	60.32	68.54	24.08	-18503.512	-29277.102	40.012
20	接合-15 (V)	3D-39	0089	石 6 (V)	礫石	凝灰岩	Tu_ 4	0.26	6.39	10.56	3.19	-18502.512	-29278.900	40.006
20	接合-15 (V)	3D-39	0093	石 6 (V)	礫石	凝灰岩	Tu_ 4	3.69	36.47	16.10	9.33	-18502.782	-29276.926	40.098
21		3F-40	0017	石 7 (V)	礫石	砂岩	Sa_ 崖	123.11	71.59	40.31	28.02	-18506.212	-29288.434	39.998
22		3H-42	0075	石 9 (V)	礫石	砂岩	Sa_ 崖	232.43	104.40	50.58	45.39	-18517.884	-29288.826	40.290
23	接合-11 (V)	3D-39	0017	石 6 (V)	剥片	凝灰岩	Tu_ 5	2.69	19.70	17.03	10.21	-18500.572	-29278.140	40.414
23	接合-11 (V)	3D-39	0067	石 6 (V)	剥片	凝灰岩	Tu_ 5	6.87	37.51	14.95	11.20	-18502.888	-29278.964	40.018
23	接合-11 (V)	3D-39	0068	石 6 (V)	剥片	凝灰岩	Tu_ 5	6.98	28.16	24.15	19.02	-18502.518	-29278.318	40.088
23	接合-11 (V)	3D-39	0085	石 6 (V)	剥片	凝灰岩	Tu_ 5	2.56	27.26	22.66	5.52	-18502.842	-29275.788	40.108
24	接合-2 (V)	3D-39	0065	石 6 (V)	剥片	凝灰岩	GAn_ 2	21.31	45.26	34.88	10.74	-18503.212	-29277.894	39.986
24	接合-2 (V)	3F-40	0039	石 7 (V)	剥片	凝灰岩	GAn_ 2	1.40	22.47	12.30	8.05	-18506.880	-29287.412	40.076
24	接合-2 (V)	3F-40	0044	石 7 (V)	剥片	凝灰岩	GAn_ 2	22.66	48.02	44.57	12.41	-18507.150	-29286.994	40.084
24	接合-2 (V)	3F-40	0066	石 7 (V)	剥片	凝灰岩	GAn_ 2	0.32	15.14	9.15	2.83	-18507.520	-29286.190	40.216
25	接合-3 (V)	3F-40	0008	石 6 (V)	剥片	凝灰岩	GAn_ 2	5.68	26.26	26.87	5.76	-18507.684	-29283.734	40.096
25	接合-3 (V)	3F-40	0043-1	石 7 (V)	剥片	凝灰岩	GAn_ 2	7.77	25.05	45.83	11.68	-18507.742	-29286.888	40.192
25	接合-3 (V)	3F-40	0065	石 7 (V)	剥片	凝灰岩	GAn_ 2	0.84	17.50	16.72	4.02	-18507.700	-29285.930	40.230
25	接合-3 (V)	3F-40	0076	石 7 (V)	剥片	凝灰岩	GAn_ 2	1.21	23.34	13.74	4.74	-18507.826	-29287.078	40.124
26	接合-4 (V)	3D-39	0092	石 8 (V)	剥片	頁岩	Sh_ 3	0.25	8.32	7.26	5.42	-18502.254	-29276.988	40.154
26	接合-4 (V)	3D-39	0100	石 8 (V)	剥片	頁岩	Sh_ 3	3.84	30.91	19.72	9.56	-18502.816	-29279.324	40.366
26	接合-4 (V)	3F-40	0064	石 7 (V)	剥片	頁岩	Sh_ 3	11.00	27.84	31.55	13.40	-18507.842	-29286.188	40.066
27	接合-5 (V)	3F-40	0012	石 7 (V)	剥片	凝灰岩	GAn_ 2	24.35	60.42	24.48	15.69	-18507.638	-29285.802	40.188
27	接合-5 (V)	3F-40	0026	石 7 (V)	剥片	凝灰岩	GAn_ 2	1.12	17.12	22.81	5.45	-18506.886	-29287.840	40.018
27	接合-5 (V)	3F-40	0046-1	石 7 (V)	剥片	凝灰岩	GAn_ 2	9.12	38.54	34.32	7.79	-18507.502	-29286.938	39.994
27	接合-5 (V)	3F-40	0051	石 7 (V)	剥片	凝灰岩	GAn_ 2	0.12	12.70	5.08	1.84	-18507.656	-29286.776	40.068
27	接合-5 (V)	3F-40	0058	石 7 (V)	剥片	凝灰岩	GAn_ 2	64.65	73.40	51.60	14.93	-18508.088	-29287.454	40.152
27	接合-5 (V)	3F-40	0063	石 7 (V)	剥片	凝灰岩	GAn_ 2	8.41	37.60	21.05	13.11	-18508.256	-29286.154	39.972

第 4 表 第Ⅶ層 掲載石器属性表 1

先角 27.3°)。4 と同一個体と考えられる。4 は頁岩製 (Sh_2) で、剥片を素材として縦位に用いている。上部は主要剥離面側からの折れで欠損している。素材打面を基部に設定し、主要剥離面側から急角度の二次的剥離を交差させ、尖った基部作り出している。素材変形度は大きいと考えられる。3 と同一個体と考えられる。5 は頁岩製 (Sh_単) で、縦長剥片を素材として縦位に用いている。先端部は主要剥離面側からの折れで欠損している。素材打面を基部に設定し、右側縁に主要剥離面側から急角度の二次的剥離を加えて緩い弧状の縁辺形状を作り出している (湾曲度 0.06)。左側縁下部に二次的剥離を加えて縁辺形状を作り出している。基部は表面側からの広い面的剥離で素材打面は欠落する。素材変形度はやや大きいと考えられる。素材のフェザーエッジは左側縁上部に残される (刃先角 28.8°)。6 はチャート製 (Ch_20) で、剥片を素材として縦位に用いている。上部は主要剥離面側からの折れで欠損している。素材打面を上部に設定し、左側縁下に主要剥離面側から急角度の二次的剥離を加え基部作り出している。素材変形度は大きいと考えられる。

7 は石器集中 9 より出土の黒曜石製 (Ob_16) の楔形石器で、剥片を素材 (長幅比 1.43) として縦位に用いている。素材打面を上部に設定し、左側縁上部に主要剥離面側から面的な二次的剥離を加え緩い弧状の縁辺形状を作り出している (湾曲度 0.14)。両端部に対向する剥離に伴う辺が形成されている。上端及び下端は弧状をなしている。

8 (石器集中 6)、9 (石器集中 7)、10~12 (石器集中 9) は、二次加工のある剥片である。8 は頁岩製 (Sh_単) で、縦長剥片を素材として縦位に用いている。素材打面を上部に設定し、表面右側に原礫面が残る。下端部に稜上から一枚の二次的剥離を加えている。左面は 90° 打面移転後の剥片剥離と考えられる。打面調整が残る。9 の接合資料-14 は、チャート製 (Ch_21) の二次加工のある剥片 (長幅比 0.75) の折れ面接合で、2 点 (0034・0070) が接合する。素材打面を上部に設定し、左側縁上部に主要剥離面側から面的な剥離を加えている。10 の接合資料-12 は頁岩製 (Sh_10) で、剥片 (長幅比 1.27) を素材として縦位に用いている。素材打面を上部に設定し、右側縁に交互の二次的剥離を加えている。主要剥離面右側上部に一枚の二次的剥離を加えている。左側縁上部に不規則剥離を施し、左側面上部に一枚の二次的剥離を加えている。左側面下部に原礫面を残す。11 は黒曜石製 (Ob_15) で、厚手の剥片を素材として縦位に用いている。素材打面を上部に設定し、上面の左端から下方向に細長い一枚の剥離を加えている。左側縁中央部に二次的剥離を加え挟入状の縁辺を作り出している。原石 (ズリ) 面が残る。12 はチャート製 (Ch_単) で、剥片を素材として縦位に用いている。素材打面を上部に設定し、右側縁中部に主要剥離面側から急角度な二次的剥離を加えている。器体下部主要剥離面側からの折れにより欠損している。打面調整が残る。

13 (石器集中 6)、14・15 (石器集中 8) は、剥片である。13 は頁岩製 (Sh_単) で、やや厚手の剥片 (長幅比 1.22) を素材として縦位に用いている。素材打面を上部に設定し、不規則剥離の打面調整が残る。石材産地は房総嶺南産と考えられる。色調は媚茶色 (マンセル値 3.7Y4.8/2.7) でやや光沢がある。14 は頁岩製 (Ho_単) で、厚手の縦長剥片 (長幅比 3.03) を素材として縦位に用いている。素材打面を上部に設定し、表面左側に原礫面が残る。中央部に稜上から一枚の面的な剥離を加えている。打面調整が残る。15 は頁岩製 (Sh_単) で、縦長剥片 (長幅比 2.25) を素材として縦位に用いている。素材打面を上部に設定し、表面右側に原礫面が残る。断面は三角形を呈する。素材打面は平坦打面となる。

16 (石器集中 7)、17 (石器集中 9)、18 (石器集中 8) は、石核である。16 の接合資料-6 は頁岩製 (Sh-4) である。打面と作業面は固定されず、交互に入れ替わり剥片剥離が進行して多面体をなしていると考えられる。右作業面及び裏面に広い一枚の剥離面が認められる。17 の接合資料-11 は頁岩製 (Sh_9) である。打面は上面の複剥離打面に設定されている。複剥離打面は左側縁からの剥片剥離の後、表側縁からの広

い一枚の剥離面が認められる。表・裏・右作業面に広い一枚の剥離面が認められる。最終的に右側縁からの剥離を加えている。作業面は表面及び裏面に設定されている。その他の面は原石（ズリ）で構成されている。18は頁岩裂（Sh_単）である。打面は上面及び裏面に設定されている。打点を90°回転移動しながら様々な作業面から剥片剥離がなされている。裏面に原礫面が残る。

19・20（石器集中6）、21（石器集中7）、22（石器集中9）は、敲石である。19は砂岩裂（Sa_単）で、垂角礫を素材としている。長軸下端部右に面的敲打痕が認められる。20の接合資料-15は凝灰岩（Tu_4）で、垂角礫を素材とし器体右側面には節理割れしているが、剥離面が若干残るので人為的な可能性がある。長軸下端部右に剥離を伴う面的敲打痕が認められる。長軸上・下端部に打撃による面的な剥離が認められる。敲打痕はみられない。21は砂岩裂（Sa_単）で、垂角礫を素材とし器体上部は節理面で剥離している。長軸下端部左から左側面下部に剥離を伴う面的敲打痕が認められる。右側縁中央部にも剥離を伴う面的敲打痕が認められる。22は砂岩裂（Sa_単）で、垂角礫を素材とし器体上部は節理面で剥離している。長軸下端部に剥離を伴う面的敲打痕が認められる。長軸上部に剥離を伴う粗い面的敲打痕が認められる。

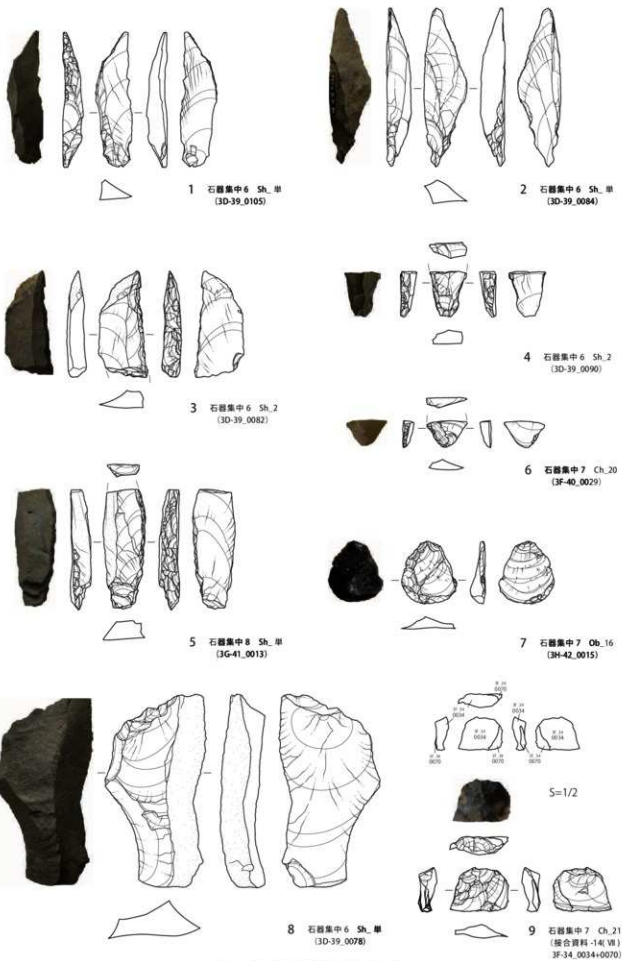
〈接合資料〉

23の接合資料-1は石器集中6内の接合で、凝灰岩裂（Tu_5）である。剥片4点（0017・0067・0068・0085）が接合する。剥片進行は0085→0017+0067+0068（同時割れ）の順となり、上面の平坦打面より剥片剥離が行われ、その後の剥片剥離時に、同時割れ（0017+0067+0068）となったと考えられる。24の接合資料-2は石器集中6と石器集中7間の接合で、ガラス質黒色安山岩（GAn_2）である。剥片4点（0065・0039・0044・0066）が接合する。剥片進行は0065→0066→0039→0044の順となり、上面の打面より0065の剥離の後、左に45°くらい打面転位し剥片剥離が行われている。25の接合資料-3は石器集中6と石器集中7間の接合で、ガラス質黒色安山岩裂（GAn_2）である。剥片4点（0008・0043-1・0065・0076）が接合する。剥片進行は0043-1→0076（先後関係不明）→0008+0065（同時割れ）の順となる。上面の打面（原礫面）より剥片剥離が行われている。剥片（0043-1）はやや横長なもの（長幅比0.55）となる。26の接合資料-4は石器集中6と石器集中7間の接合で、頁岩裂（Sh_3）である。剥片3点（0092・0100・0064）が接合する。剥片進行は0092→0100（節理で剥がれる）→0064の順となる。上面の平坦打面より剥片剥離が行われている。0100の剥片に打面調整が残る。27の接合資料-5は石器集中7内の接合で、ガラス質黒色安山岩裂（GAn_2）である。剥片6点（0012・0026・0046-1・0051・0058・0063）が接合する。剥片進行は0026→（90°打面転位）→0012→0058→0046_1+0051（同時割れ）→0063の順となる。表面の打面より剥片剥離の後、90°打面転位しやや大形の剥片剥離が行われている。28の接合資料-6は石器集中7内の接合で、頁岩裂（Sh_4）である。剥片9点（0004・0020・0005・0006・0009・0016・0037・0047・0055）及び石核1点（実測図16）が接合する。剥片進行は（表作業面）0004+0020→0055→（90°打面転位）→0009→0047→（90°打面転位）→0005_（裏作業面）0006→0037→0016（表、裏先後関係不明）→0068（実測図16）残核の順となる。上面の打面（原礫面）より剥片剥離が行われている。剥片9点の長幅比の平均値は1.60である。29の接合資料-7は石器集中7内の接合で、頁岩裂（Sh_7）である。石刃1点（0069）・剥片1点（0030）が接合している。剥片進行は0069→0030の順となる。上面の打面から連続的に剥離されている。石刃（0069）は、表面に一枚の縦方向の剥離面を残しそれによる稜と両縁が平行となっている（長幅比2.32）。30の接合資料-8は石器集中7内の接合で、凝灰岩裂（Tu_5）である。剥片3点（0007・0057・0071）が接合する。剥片進行は0071→（90°打面転位）→0057→0007の順となり、左面の打面より剥片剥離が行われ、その後90°打面転

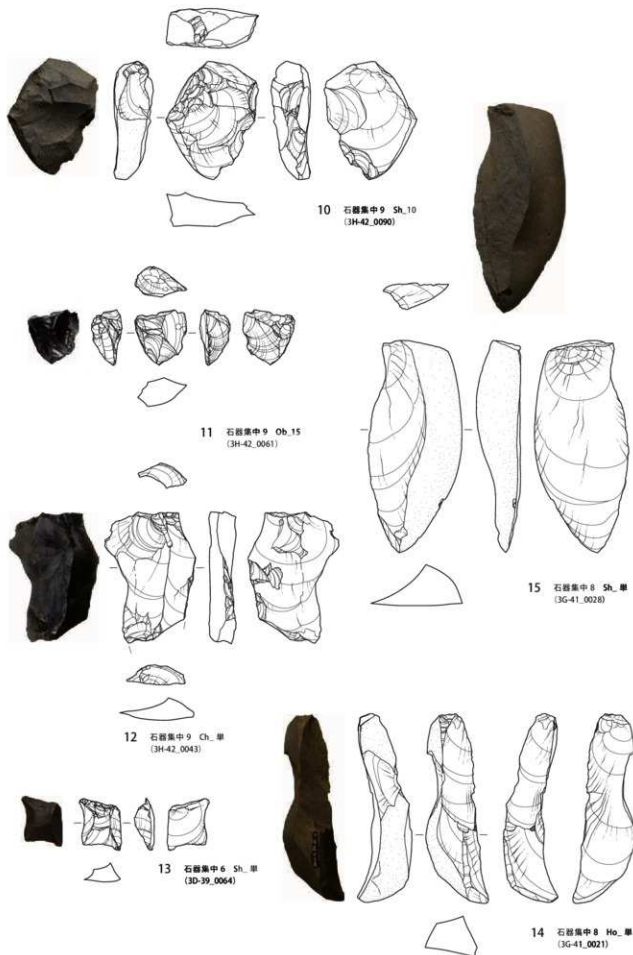
位した上面の打面より剥片剥離が行われている。**31**の接合資料-9は石器集中7内の接合で、頁岩製(Sh_5)である。楔形石器1点(0003+0059+0014)・剥片2点(0010・0011)が接合する。剥片進行は0010→0011→0003+0059+0014(同時割れ)の順となる。(0003+0059+004)は楔形石器で、剥片(長幅比1.24)を素材として縦位に用いている。素材打面を上部に設定し、両端部に対向する剥離が伴う辺が形成されている。上端及び下端は平坦となる。**32**の接合資料-10は石器集中8内の接合で、凝灰岩製(Tu_6)である。使用痕のある剥片(0007)1点・剥片6点(0002・0004・0014・0018・0019・0034)が接合する。剥片進行は0004+0019(同時割れ)→(90°打面転位)→0034→0018+0002(同時割れ)→0007→0014の順となり、表面の打面より剥片剥離が行われ、その後90°打面転位し剥片剥離が行われている。0007の剥片に打面調整が残る。**33**の接合資料-11は石器集中9内の接合で、頁岩製(Sh_9)である。剥片5点(0011・0016・0018・0019・0102)及び石核1点(実測図17)が接合する。剥片進行は0102→(90°打面転位)→0011+0016(同時割れ)→0018→0019→0096(実測図17)の順となる。左面の打面より剥片剥離が行われている。その後90°打面転位した上面の調整打面から剥片剥離が行われている。0018→0019の打点が右方向に35mm移動している。**34**の接合資料-12は石器集中9内の接合で、頁岩製(Sh_10)である。二次加工のある剥片1点(実測図10)・剥片3点(0021・0053・0058)が接合する。剥片進行は0058→0053→0021→0090(実測図10)の順となる。素材を縦位に用いて、右側縁の線状打面より0053→0021交互の剥離が行われている。**35**の接合資料-13は石器集中9内の接合で、ガラス質黒色安山岩製(GAn_8)である。剥片4点(0040・0051・0089・0097)が接合する。剥片進行は0051→0089→(90°打面転位)→0040+0097(同時割れ)の順となる。表面の打面より剥片剥離の後、90°打面転位し剥離した剥片(0040+0097)は、同時割れの可能性がある。



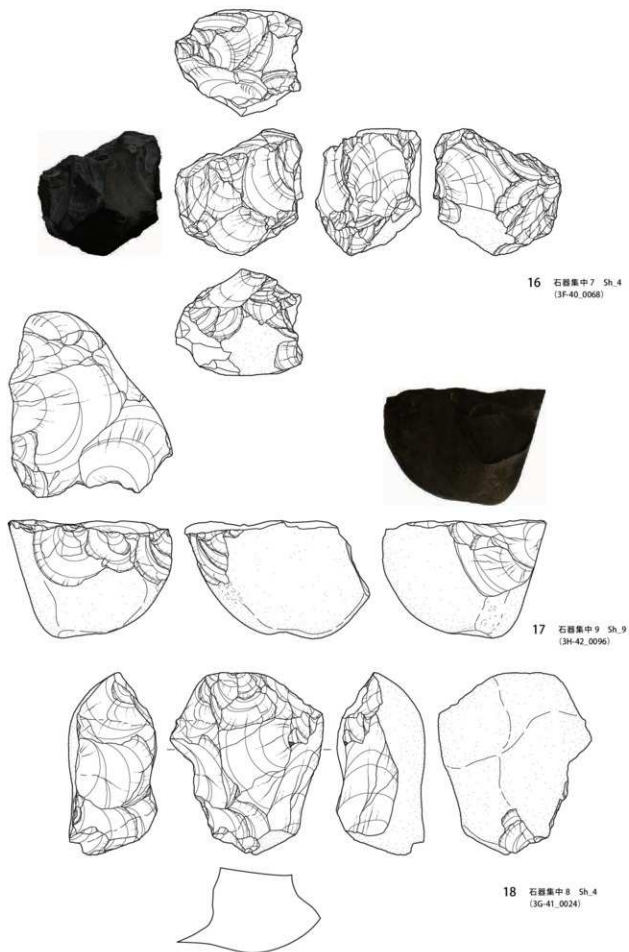
第Ⅶ層 石器集中9 調査風景



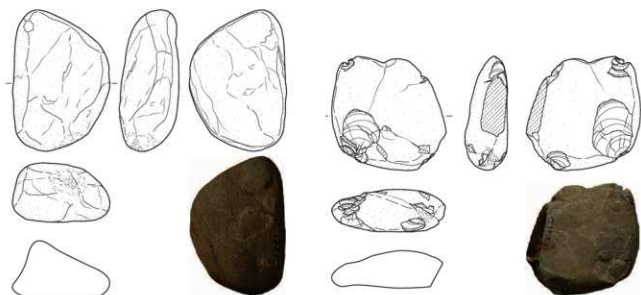
第39圖 第七層出土石器 1(2/3)



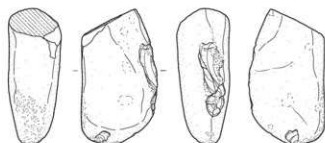
第40图 第VII层出土石器2(2/3)



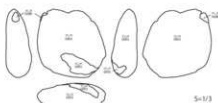
第41图 第七层出土石器3(1/3)



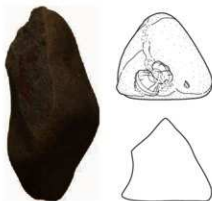
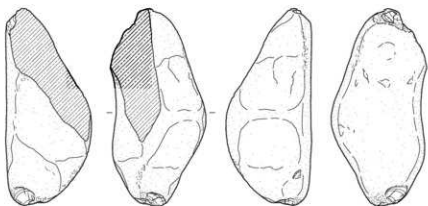
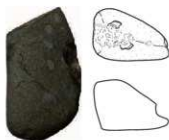
19 石器集中6 Sa.4
(3D-39_0107)



21 石器集中7 Sa.甲
(3F-40_0017)



20 石器集中6 Tu.4
(接合資料-15(VB) 3D-39_0063+0089+0093)



22 石器集中9 Sa.甲
(3H-42_0075)



S=1/2 23 石器集中6 Tu_5
(接合資料-1(V)) 3D-39_0017+0067+0068+0085



24 石器集中6-7 GAn_2
(接合資料-2(V)) 3D-39_0065
+3F-40_0039+0044+0066



S=1/2 25 石器集中6-7 GAn_2
(接合資料-3(V)) 3F-40_0008+
0043-1+0065+0076



S=1/2 26 石器集中6-7 Sh_3
(接合資料-4(V)) 3D-39_0092+0100+3F-40_0064



S=1/2 27 石器集中7 GAn_2
(接合資料-5(V)) 3F-40_0012+
0026+0046-1+0051+0058+0063



S=1/2 28 石器集中7 Sh_4
(接合資料-6(V)) 3F-40_0004+0005+0016+
0009+0016+0020+0037+0047+0055+0060

第43圖 第VII層出土石器5(1/2)



S=1/2 29 石器集中7 Sh_7
(接合資料-7(Ⅷ) 3F-40_0030+0069)



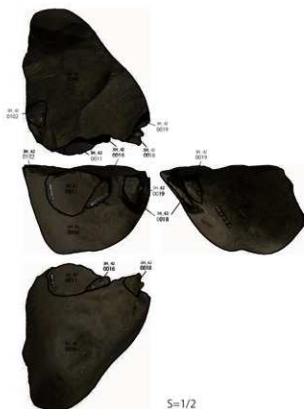
S=1/2 30 石器集中7 Tu_5
(接合資料-8(Ⅷ) 3F-40_0007+0057+0071)



S=1/2 31 石器集中7 Sh_5
(接合資料-9(Ⅷ) 3F-40_0003+
0010+0011+0014+0059)



S=1/2 32 石器集中8 Tu_6
(接合資料-10(Ⅷ) 3G-41_0002+
004+0007+0014+0018+0019+0034)



S=1/2 33 石器集中9 Sh_9
(接合資料-11(Ⅷ) 3H-42_0011+0016+0018+0019+0096+0102)



S=1/2 34 石器集中9 Sh_10
(接合資料-12(Ⅷ) 3H-42_0021+
0053+0058+0090)



S=1/2 35 石器集中9 GA.n. 8
(接合資料-12(Ⅷ) 3H-42_0040+
0051+0089+0097)

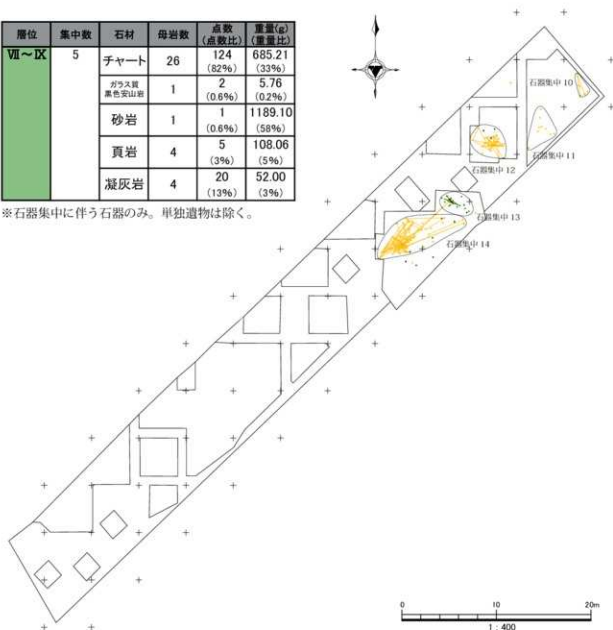
5 第Ⅶ層～第Ⅸ層

概 要

立川ローム第Ⅶ層下部～第Ⅸ層上部に主としてまとまりを見せる石器群。遺物の垂直分布幅は 40.45 m～39.20 m の範囲で出土標高の平均値は 39.78 m である。第Ⅶ層～第Ⅸ層に属する石器は 153 点で、平面分布より調査区の中央部から北東方向にかけて 5 箇所の石器集中が確認された。単独遺物も 1 点確認されている。石器の内訳は剥片類で、剥片類の長幅比(0.5 以下) 0%・(0.5～1.5) 68%・(1.5 以上) 30%となる。接合資料は 17 個体が確認された。石材はチャートが点数比 82% を占める。母岩構成は 24 種 (Ch_1～19、Tu_2～3・6、GAn_1、Sh_1) 及び単独母岩 12 種である。

層位	集中数	石材	母岩数	点数 (点数比)	重量(g) (重量比)
Ⅶ～Ⅸ	5	チャート	26	124 (82%)	685.21 (33%)
		ガラス質 黒色安山岩	1	2 (0.6%)	5.76 (0.2%)
		砂岩	1	1 (0.6%)	1189.10 (58%)
		頁岩	4	5 (3%)	108.06 (5%)
		凝灰岩	4	20 (13%)	52.00 (3%)

※ 石器集中に伴う石器のみ。単独遺物は除く。



第 45 図 第Ⅶ層～第Ⅸ層石器分布図(1/400)

石器集中 11 (第 46 図・第 47 図)

調査区の北東端部 (2X-34 グリッド) に位置する。NS4.10 m × EW2.50 m の範囲にまばらに分布を示す 9 点の石器で構成される。遺物の出土層位は第 V 層～第 IX 層で、垂直方向に 0.39 m の幅で分布している。遺物出土のピークは第 IX 層上部の標高 39.45 m 付近 (平均値は 39.56 m) である。北東方向に石器集中 10 が隣接する。器種構成の内訳は、剥片類 9 点 (二次加工のある剥片・使用痕のある剥片・碎片含む) である。接合関係は確認されなかった。石材はすべてチャートで、母岩構成は 3 母岩 (Ch_1・3～4) 及び単独母岩 (Ch3 種) である。Ch_1・4 は石器集中 10 でも確認された。

石器集中 12 (第 48 図・第 49 図)

調査区の北東部 (2Y-34 グリッド) に位置する。NS3.12 m × EW2.10 m の狭い範囲に密集し分布を示す 29 点の石器で構成される。遺物の出土層位は第 V 層～第 IX 層で、垂直方向に 1.01 m の幅で分布している。遺物出土のピークは第 IX 層上部の標高 39.45 m 付近 (平均値は 39.73 m) である。北東方向に石器集中 11 が南西方向に石器集中 13 が隣接する。器種構成の内訳は、敲石 1 点・剥片類 28 点 (二次加工のある剥片・使用痕のある剥片含む) である。接合関係は、石器集中内で 1 個体が確認された。石材はチャートが点数比 93% と主体を占める。母岩構成は 1 母岩 (Ch_5) 及び単独母岩 (Sa・Sh) である。

石器集中 13 (第 50 図・第 51 図)

調査区の中央部北東 (2Z-36 グリッド) に位置する。NS3.01 m × EW3.57 m の範囲にまばらに分布を示す 29 点の石器で構成される。遺物の出土層位は第 V 層～第 IX 層で、垂直方向に 0.30 m の幅で分布している。遺物出土のピークは第 VII 層下部の標高 39.80 m 付近 (平均値は 39.68 m) である。北東方向に石器集中 12 が、南西方向に石器集中 14 が近接する。器種構成の内訳は、石刃 2 点・剥片類 27 点 (二次加工のある剥片・使用痕のある剥片・碎片含む) である。接合関係は、石器集中内で 3 個体が確認され、そのうち 2 個体が石器集中 14 と石器集中間で接合する。石材は凝灰岩が点数比 67% と主体を占める。母岩構成は 8 母岩 (Ch_8・13・17～18、Tu_1～3、GAn_1) 及び単独母岩 (Ch・Tu・Sh) である。Ch_8・13・17～18 は石器集中 14 でも確認された。

石器集中 14 (第 50 図・第 51 図)

調査区の中央部北東 (3A-36・37・2Z-36 グリッド) に位置する。NS6.70 m × EW7.58 m の広い範囲に一部密集部をもち、その周囲は散漫な分布を示す 77 点の石器で構成される。遺物の出土層位は第 III 層～第 IX 層で、垂直方向に 0.81 m の幅で分布している。遺物出土のピークは第 VII 層下部の標高 39.80 m 付近 (平均値は 39.88 m) である。第 VI 層の石器集中 5 と重複し、北東方向に石器集中 13 が近接する。器種構成の内訳は、剥片類 77 点 (二次加工のある剥片・使用痕のある剥片・碎片含む) である。接合関係は、石器集中内で 9 個体が確認され、そのうち 2 個体が石器集中 13 と石器集中間で接合し、1 個体は遺跡内採集遺物と接合する。石材はチャートが点数比 97% と主体を占める。母岩構成は 8 母岩 (Ch_6～19、Sh_1) 及び単独 (Ch2 種) である。Ch_8・13・17～18 は石器集中 13 でも確認された。

母岩名/器種	剥片	2次加工の有無	破片	点数	重さ (g)
Ch 1	1			1	0.18
Ch 2	4	1		5	28.13
Ch 4			1	1	0.03
Ch 単	1			1	1.92
合計	6	1	1	8	30.26

第Ⅶ層～第Ⅸ層 石器集中 10 母岩別器種一覧表

母岩名/器種	剥片	2次加工の有無	破片	点数	重さ (g)
Ch 1	1	1		2	4.84
Ch 3	2			2	17.98
Ch 4	2			2	3.95
Ch 単	1	1	1	4.26	
Ch 単	1			1	1.04
Ch 単	1			1	20.97
合計	7	2	1	9	53.04

第Ⅶ層～第Ⅸ層 石器集中 11 母岩別器種一覧表

母岩名/器種	剥片	2次加工の有無	破片	敲石	点数	重さ (g)
Ch 5	24	1	2		27	176.66
Sa 単				1	1	1189.10
Sh 単			1		1	2.23
合計	24	1	3	1	29	1367.99

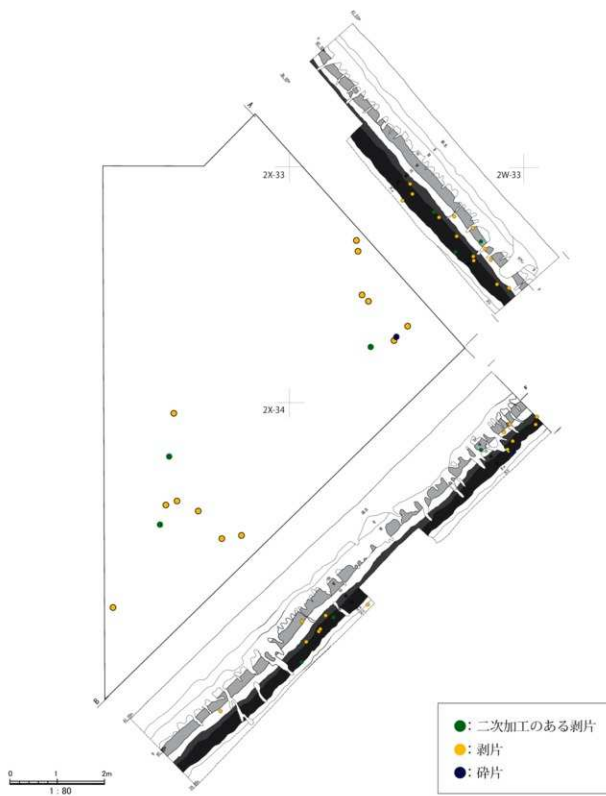
第Ⅶ層～第Ⅸ層 石器集中 12 母岩別器種一覧表

母岩名/器種	剥片	2次加工の有無	破片	石刃	点数	重さ (g)
Ch 8	1				1	0.13
Ch 13	1				1	7.31
Ch 16		1			1	2.27
Ch 17	1				1	7.48
GAn 1				2	2	5.76
Tu 6	11		3		14	45.11
Tu 2	2				2	2.88
Tu 3			3		3	0.32
Ch 単	1				1	0.18
Sh 単		1			1	47.15
Sh 単		1			1	30.97
Tu 単	1				1	3.69
合計	18	3	6	2	29	153.25

第Ⅶ層～第Ⅸ層 石器集中 13 母岩別器種一覧表

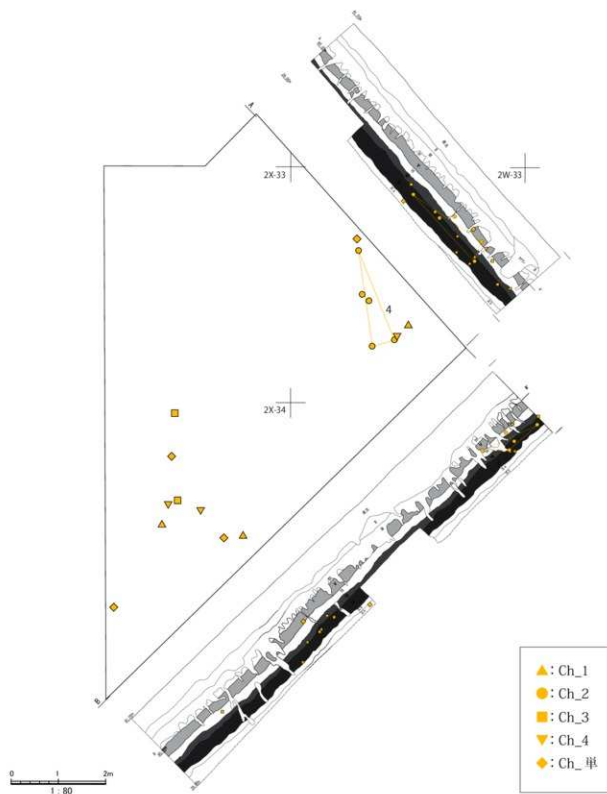
母岩名/器種	剥片	2次加工の有無	破片	2次加工の有無	点数	重さ (g)
Ch 6	3	1	1		5	6.94
Ch 7	10		2		12	8.01
Ch 8	2		1	2	5	40.96
Ch 9	5				5	74.03
Ch 10	6				6	13.01
Ch 11	15				15	73.38
Ch 12	6		1		7	35.51
Ch 13	1				1	4.55
Ch 14	2				2	22.71
Ch 15	2	2			4	59.06
Ch 16			4		4	0.18
Ch 17	1				1	0.08
Ch 18	1	1			2	6.79
Ch 19	4				4	40.71
Sh 1	1				1	2.22
Sh 1	1				1	25.49
Ch 単				1	1	20.54
Ch 単	1				1	1.42
合計	61	4	9	3	77	435.59

第Ⅶ層～第Ⅸ層 石器集中 14 母岩別器種一覧表



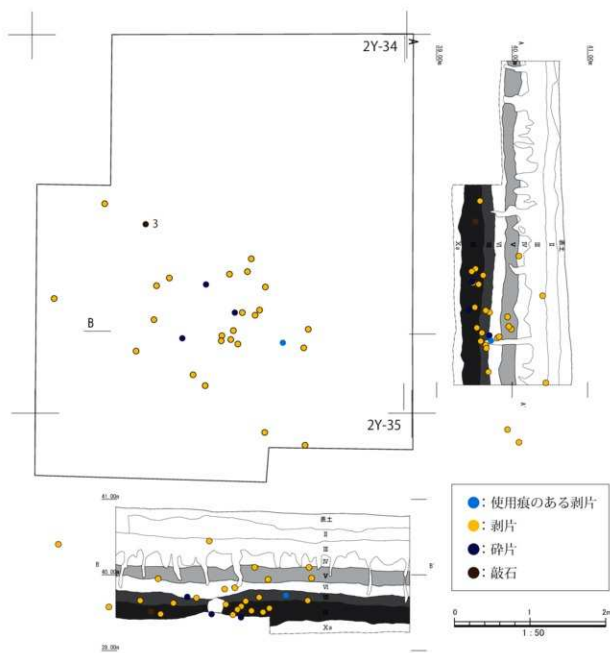
第46図 第Ⅵ層～第Ⅸ層石器集中10・石器集中11器種別分布図(1/80)

<石材別>



第47图 第Ⅶ層～第Ⅸ層石器集中10・石器集中11石材別分布图(1/80)

<器種別>



第48図 第Ⅶ層～第Ⅸ層石器集中12器種別分布図(1/50)

【出土遺物】(第52図・第53図)

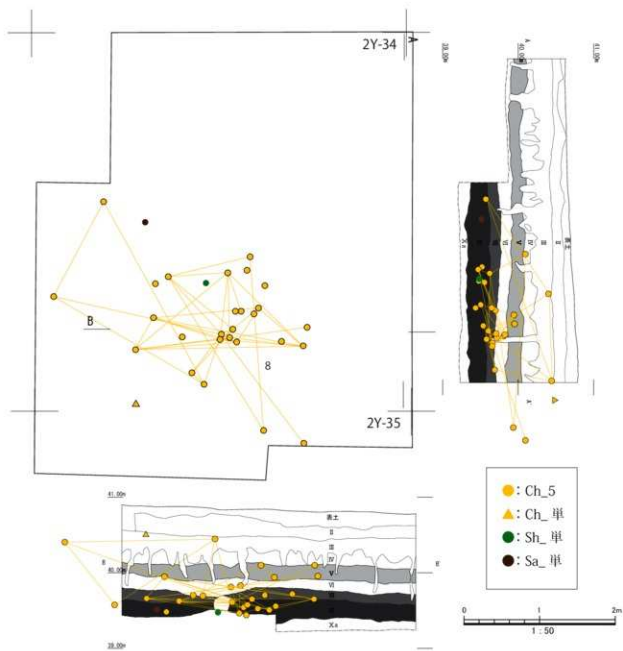
出土した石器のうち、石刃1点・二次加工のある剥片1点・敲石1点・接合資料5例を掲載した。

<石器>

1の接合資料-6は、石器集中13より出土のガラス質黒色安山岩製(GAn₁)の石刃である。折れ面接合で、2点(0141・0152)が接合する。打面は線状打面となり、長幅比3.94である。表面に一枚の縦方向の剥離面を残しそれによる稜と両縁が平行となる。

2は石器集中13より出土の頁岩製(Sh_単)の二次加工のある剥片で、縦長剥片(長幅比2.42)を素材として縦位に用いている。素材打面を上部に設定し、主要剥離面左中部に不規則剥離が認められる。素材打面は平坦打面となる。表端部に原礫面が残る。

<石材別>



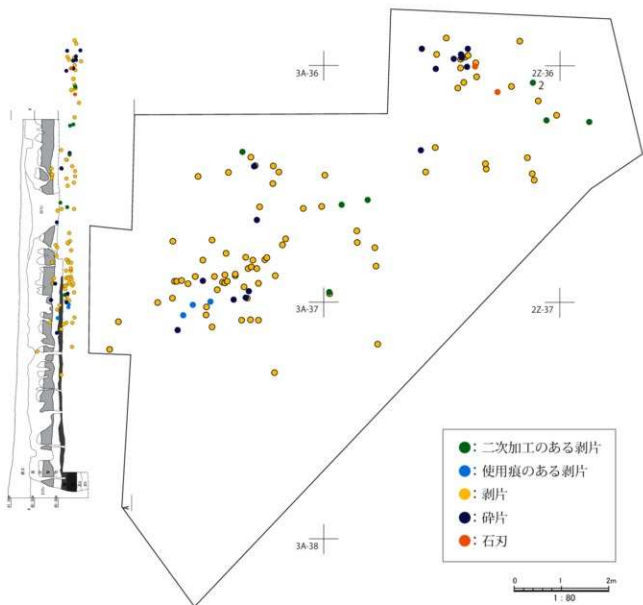
第49図 第七層～第九層石器集中12 石材別分布図(1/50)

3 は石器集中12より出土の砂岩製(Sa_単)の敲石である。大形の亜角礫を素材としている。長軸上端部右に著しい剝離を伴う面的敲打痕が、上端部左部には弱い面的敲打痕が認められる。長軸下端部左に剝離を伴う粗い面的敲打痕が認められる。長軸下端部右に線の敲打痕が認められる。

<接合資料>

4 の接合資料-1は石器集中10内の接合で、チャート製(Ch_2)である。二次加工のある剥片1点(0004)及び剥片2点(0037・0040)が接合する。剥片進行は0004→0040→0037の順となり、上面の打面から連続的に剝離されている。**5** の接合資料-2は石器集中13内の接合で、凝灰岩製(Tu_1)である。剥片5点(0143・0150・0153・0160・0163)が接合する。剥片進行は0153+0150(折れ)→

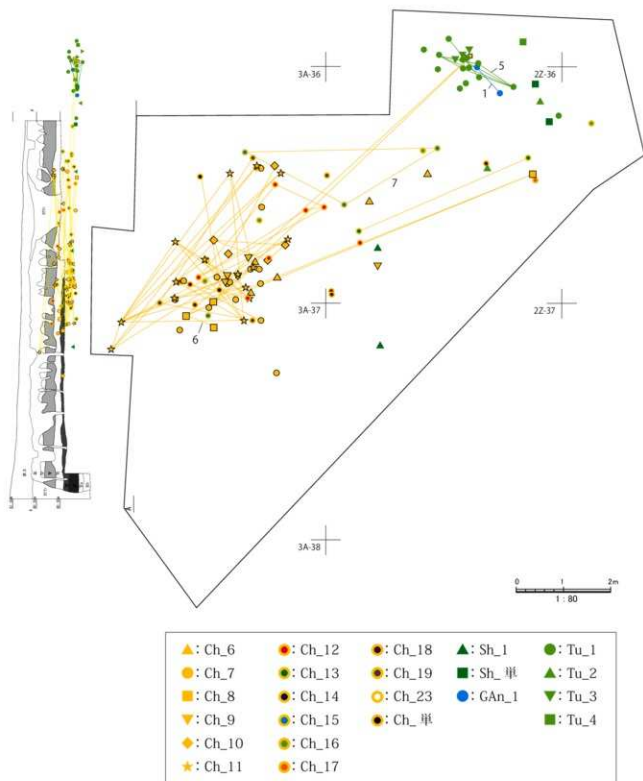
<器種別>



第50図 第Ⅷ層～第Ⅸ層石器集中13・石器集中14器種別分布図(1/80)

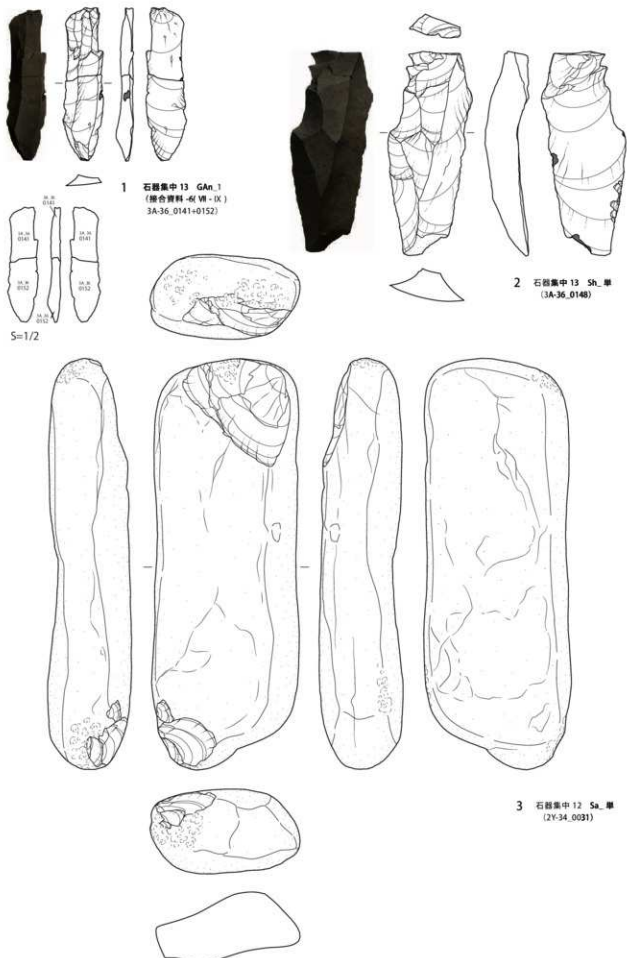
(90°打面転位)→0143+0160(同時割れ)→0163の順となり、右面の打面より剥片剥離が行われた後、上面の打面より剥片剥離が行われている。**6**の接合資料-3は石器集中13と石器集中14間の接合で、チャート製(Ch_8)である。使用痕のある剥片2点(0025・0086)及び剥片3点(0061・0136・0158)が接合する。剥片進行は00136-0158-(90°打面転位)-0061(先後関係不明)→0086+0025(同時割れ)の順となり、上面の平坦打面より剥片剥離が行われた後、90°打面転位した左面の打面より剥片剥離が行われている。剥片0061及び0136は小剥片である。**7**の接合資料-4は石器集中14内の接合で、頁岩製(Sh_15)である。二次加工のある剥片2点(0077・0105)及び剥片1点(0133)が接合する。剥片進行は0077→(180°打面転位)→0105→0133の順となる。上面の平坦打面より剥片剥離が行われている。その後180°打面転位した下面の打面から剥片剥離が行われている。3A-36_0133の剥片は、3A-36_0105の二次的剥離で作出された可能性がある。**8**の接合資料-5(写真図版23)は石器集中12内の

<石材別>



第51図 第Ⅶ層～第Ⅸ層石器集中13・石器集中14石材別分布図(1/80)

接合で、チャート製 (Ch_5) である。剥片 20 点が接合する。原石 (65.70 × 58.36 × 88.50mm) の剥片進行は、上面を打面とし表面を作業面→90°打面転移→最初の作業面を打面とし左面を作業面「A部」→90°打面転移→前の作業面を打面とし右面を作業面「B部」→多面体の残核が残る可能性がある。



第52圖 第七層~第九層出土石器 1(2/3)



4 石器集中10 Sh_2
(接合資料-1(VI-IX) 2X-34_0004+0037+0040)

S=1/2



5 石器集中13 Tu_1
(接合資料-2(VI-IX) 3A-36_0143+0150+0153+0160)

S=1/2



6 石器集中13-14 Ch_8
(接合資料-3(VI-IX) 3A-36_0025+0061+0086+0136+0158)

S=1/2



7 石器集中14 Ch_15
(接合資料-4(VI-IX) 3A-36_0077+0105+0133)

S=1/2

6. 第Ⅱ層（縄文時代）

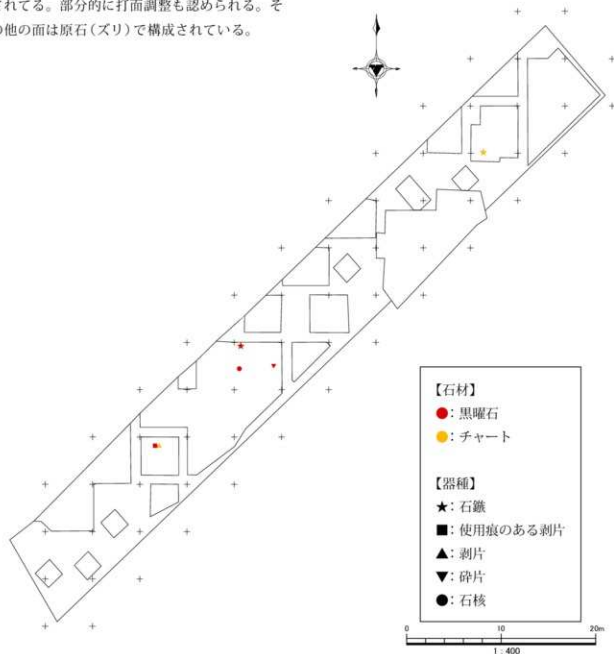
概要

石器は、調査区の中央部南西及び北東部端付近の第Ⅱ層（出土標高の平均値は 40.69m）より 6 点出土している。内訳は、3D-39 グリッドから石鏃・石核・碎片（すべて黒曜石製）各 1 点、2Y-34 グリッドから石鏃（チャート製）1 点、3F-41 グリッドから使用痕のある剥片（黒曜石製）・碎片（チャート製）各 1 点である。このうち石器 3 点を選択し掲載する。

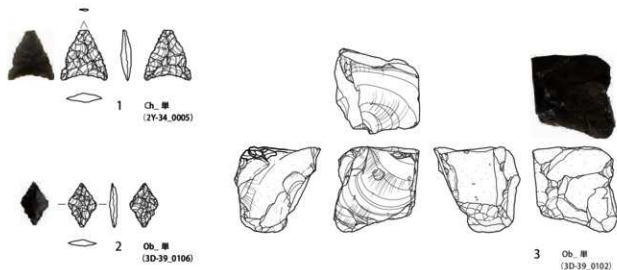
【出土遺物】（第 55 図）

1・2 は石鏃である。**1** はチャート製（Ch_単）で、凹基無茎の形態をなし、先端を欠損する。基部の挟りは浅い弧状をなす（湾曲度 0.14）。両側縁は直線的に成形されている（先端開き角 50°）。**2** は黒曜石製（Ob_単）で、凸基有茎の形態をなす。両側縁は直線的に成形されている（先端開き角 70°）。基部も同様な成形がされている（末端開き角 64°）。器体の形態は菱形を呈する。

3 は黒曜石製（Ob_単）の石核である。広い一枚の剥離面の打面を上面に固定し、作業面は表面に設定されている。部分的に打面調整も認められる。その他の面は原石（ズリ）で構成されている。



第 54 図 第Ⅱ層石器分布図(1/400)



第55図 第II層出土石器(2/3)

図版No	接合No	グリッド	遺物No	種別	石材	母岩	重量(g)	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	X座標	Y座標	標高
1		2Y-34	0005	石核	チャート	Ch. 単	1.13	19.87	18.58	4.12	-18479.906	-29252.676	40.492
2		3D-39	0106	石核	黒曜石	Ob. 単	0.37	17.36	11.17	2.97	-18500.416	-29279.306	40.704
3		3D-39	0102	石核	黒曜石	Ob. 単	39.10	33.86	33.87	34.17	-18502.684	-29279.606	40.706

第7表 第II層 掲載石器属性表

7. その他

【試掘調査遺物】

試掘調査で出土した遺物は106点となる(すべて一括遺物)。石器の内訳は、剥片25点、二次加工のある剥片7点、使用痕のある剥片2点、碎片5点、石核・石刃・ノッチ・打製石斧各1点である。接合資料は3個体が確認された。このうち石器3点及び接合資料(折れ面接合)1例を選択し掲載する。

【出土遺物】(第56図・第57図)

1は黒曜石裂(Ob_単)の石刃(長幅比2.45)で、縦位に用いている。表面に一枚の縦方向の剝離面を残しそれによる稜と両縁が平行となっている。左側縁中部に表面側からの二次的剝離を加えている。右側面は原石(ズリ)を残す。**2**は黒曜石裂(Ob_18)の二次加工のある剥片である。試掘調査P_16と3D_38のグリッド間の折れ面接合である。2点(00-66-00-2)が接合する。打撃時の割れと考えられる。剥片(長幅比0.65)を素材として縦位に用いている。素材打面を上部に設定し、下部の折れ面に主要剝離面側から急角度な二次的剝離を加えている。打面は平坦打面及び原石(ズリ)となる。**3**は黒曜石裂のOb_単の石核である。打面は上面の複剝離打面と左に90°回転移動した平坦打面に設定されている。作業面は表面・裏面・左面に設定されている。表面には打面調整も認められる。その他の面は原石(ズリ)で構成されている。**4**は頁岩裂(Sh_単)の打製石斧である(長幅比2.21)。側縁がやや未広がりとなる形態(短冊形)を呈する。両側縁両面に対し大型剝離によって成形される。上部両側縁には細かい潰れが認められる。

【遺跡内採集遺物】(出土位置の検討をせず時期の特定が困難な遺物)

遺跡内から採集された遺物は151点となる。石器の内訳は、剥片27点、二次加工のある剥片20点、

使用痕のある剥片4点、碎片12点、(小型)剥片・石核・敲石各1点である。接合資料は1個体が確認された。このうち石器5点及び接合資料1例を選択し掲載する。

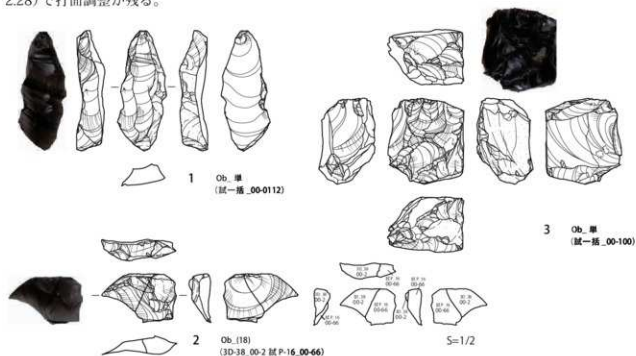
【出土遺物】(第56図・第57図)

〈石器〉

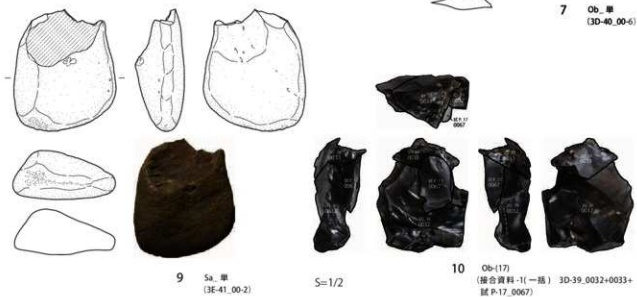
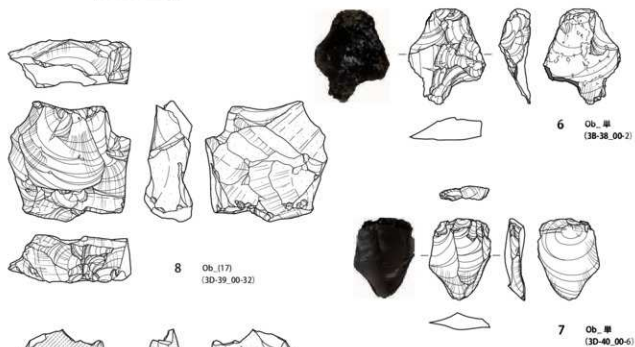
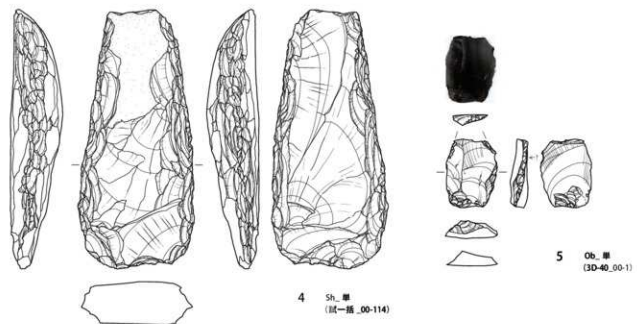
5は黒曜石裂(Ob_単)のナイフ形石器で、剥片を素材として縦位に用いている。先端部は表面からの折れで欠損している。素材打面を基部に設定し、左側基部に主要剥離面側から緩やかな二次的剥離を加えている。右側縁上部には主要剥離面側から急角度な二次的剥離を加えている。右側縁下部に主要剥離面側から緩やかな二次的剥離を加え緩い弧状の縁形状を作り出している(湾曲度0.26)。右側縁中部には表面よりのアクセントが確認される。素材打面は二次的剥離で欠落する。変形度はやや大きいと考えられる。素材のフェザーエッジは左側縁中位に残される(刃先角 40.7°)。**6**及び**7**は二次加工のある剥片である。**6**は黒曜石裂(Ob_単)で、剥片(長幅比1.23)を素材として縦位に用いている。素材打面を上部に設定し、左側縁上部には主要剥離面側から面的な二次的剥離を加え挟入状の縁位を作り出している。左側縁下部には表面側から急角度の二次的剥離を加え挟入状の縁位を作り出している。右側縁上部には表面側から一枚の二次的剥離を加えている。右側縁下部はガジリにより欠損している。**7**は黒曜石裂(Ob_単)で、薄手な剥片(長幅比1.32)を素材として縦位に用いている。素材打面を上部に設定し、面的な剥離の打面調整が残る。左右側縁上部に主要剥離面側からの面的な二次的剥離を加えている。打面及び左側縁下部に原石(ズリ)を残す。**8**は黒曜石裂(Ob_17)の打面形成剥片を素材とした石核である。打面は上面に固定されている。作業面は表面に設定されている。その他の面は原石(ズリ)で構成されている。**9**は砂岩製(Sa_単)の敲石である。垂円礫を素材とし器体上部は節理面で剥離している。長軸下端部左に面的な細かい敲打痕が認められ、右方向に線的な敲打痕が認められる。

〈接合資料〉

10の接合資料-1は試掘P-17と3D-39のグリッド間の接合で、黒曜石裂(Ob_17)である。使用痕のある剥片1点(0033)・剥片1点(0067)・石核1点(0032 実測図8)が接合する。剥片進行は0033→(90°打面転位)→0067→0032の順となる。0033は表面の打面より剥離された剥片(長幅比2.28)で打面調整が残る。



第56図 試掘調査遺物・遺構内採集遺物1(2/3)



第 57 圖 試掘調查遺物・遺構內採集遺物 2 (2/3)

第IV章 中東遺跡第7地点の調査

第1節 概要

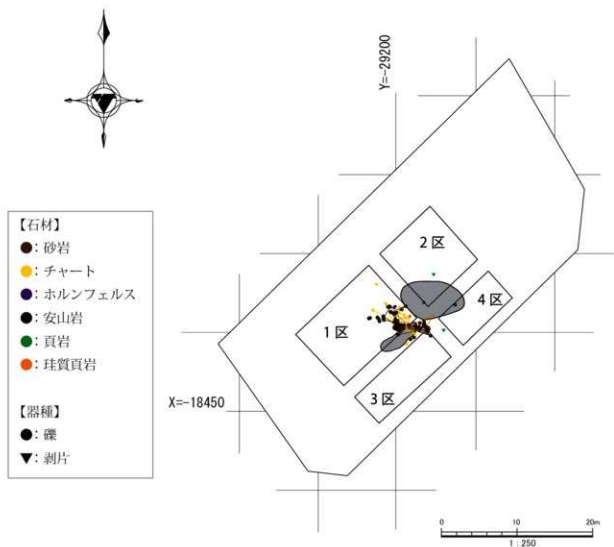
第7地点の調査では、縄文時代の遺構として集石1箇所が確認された。遺物は集石から礫192点、その他旧石器時代の遺物として石器7点が出土している。また、接合資料は32個体確認され、そのすべてが礫の接合である。

第2節 遺構と遺物

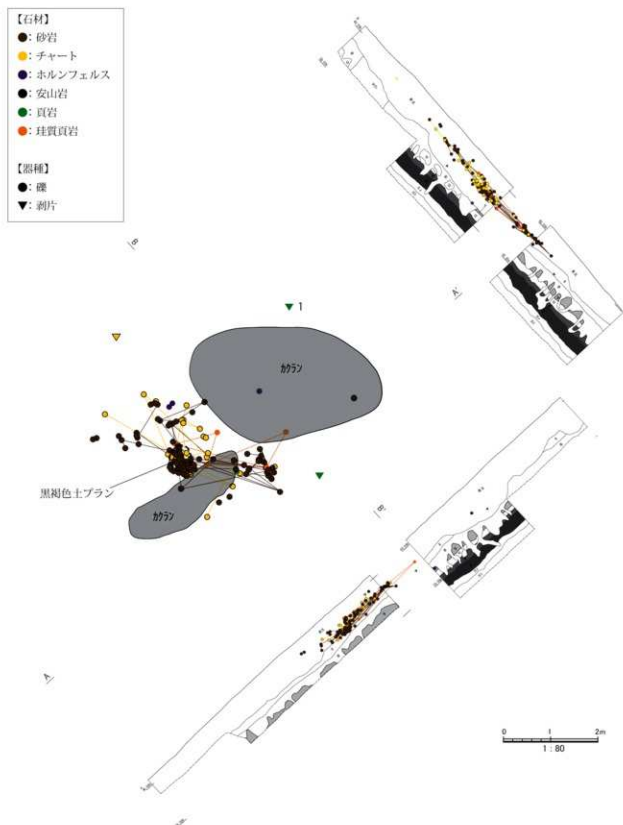
1. 集石1

概要

調査区の中央部に位置する。NS2.73 m × EW5.71 mの範囲に密集し分布を示す192点の礫で構成される。遺物の出土層位は、表土直下の第Ⅱ層で、垂直方向に0.34 mの幅で分布している。礫の状態は完形が4点、赤化が169点、煤付きが24点であり、重量は0.16 g～500 gとばらつきがある。石材は砂岩が点数比61%・重量比74%と圧倒的多数を占め、チャートが点数比27%・重量比20%他である。接合関係は、集石内で32個体が確認された。なお、礫が密集する下に直径0.56 mの黒褐色土のプランが確認されたが、明確な掘り込みはなく、礫の加重による若干の窪みと考えられる。

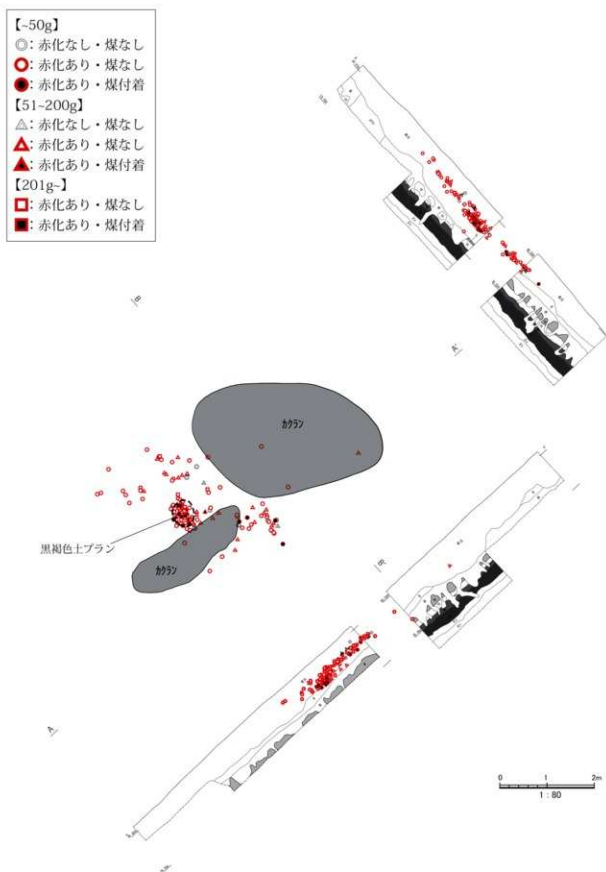


第58図 第7地点 集石1及び旧石器時代遺物分布図(1/250)



- 第II層 黒褐色土 径2～3mm大の赤色スコリアを少量、径2～5mm大の黒色粒子を少量、ローム 粒子を少量含む。
 第III層 明褐色土 ソフトローム層。
 第IV層 黄褐色土 ハードローム層。赤色スコリア・黒色スコリアを多量に含む。
 第V層 褐色土 第1黒色帯。赤色スコリア・黒色スコリアを少量含む。
 第VI層 褐色土 AT層。白色を帯びた褐色を呈する。珪質粒子を多量に含む。
 第VII層 暗褐色土 第2黒色帯上層。赤色スコリア・白色粒子を多量に含む。
 第IX層 暗褐色土 第2黒色帯下層。第VII層よりも黒色味・粘性ともに強く、大粒の赤色スコリアを多量に含む。
 第X a層 黄褐色土 X層の中でも特に白色を帯びる。
 第X b層 黄褐色土 やや大粒の赤色スコリアを多量に含む。

第59図 集石1及び旧石器時代遺物 石材別分布図(1/80)



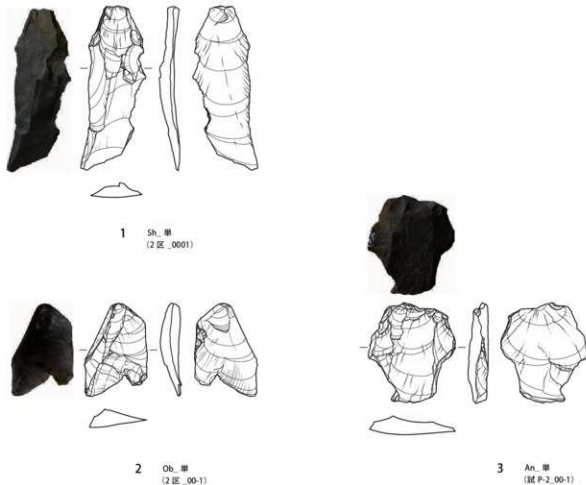
第60図 集石1 磔重量別分布図(1/80)

【出土遺物】

第7地点から出土した出土遺物の総計は199点で、縄文時代の礫192点及び旧石器時代の石器7点(剥片5点・二次加工のある剥片2点)である。石器のうち以下の3点を選択し記述する。

1は頁岩製の剥片で、薄手な石刃状剥片(長幅比2.59)を素材として縦位に用いている。素材打面を上部に設定し、上部の左右側縁に軸90°の異なる面的な剝離を加えて刃を作り出している。素材打面は平坦打面となる。

2・3は二次加工のある剥片である。**2**は黒曜石製で、不定形な剥片(長幅比1.49)を素材として縦位に用いている。素材打面を上部に設定し、右側縁から主要剝離面に緩やかな二次的剝離を加え、さらに軸90°の異なる面的な剝離を加えている。素材打面・左側面・表面下部に原石(ズリ)を残す。素材打面は平坦打面となる。**3**は安山岩製で、剥片(長幅比1.49)を素材として縦位に用いている。右側縁下部に主要剝離面側から一枚の面的な二次的剝離を加え緩い弧状の縁辺形状を作り出している(湾曲度0.13)。緩やかな二次的剝離により素材打面が欠落する。素材打面は平坦打面となる。



第61図 第7地点出土石器(2/3)

図版	出土位置	遺物No.	種別	石材	重量(g)	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	X座標	Y座標	標高
	2区		剥片	頁岩							
	2区			黒曜石							
	試P-2		剥片	安山岩							

第8表 第7地点掲載石器属性表

第V章 自然科学分析

第1節 火山灰分析・植物珪酸体分析

1. 中東遺跡第6地点(4次)の土層とテフラ

株式会社火山灰考古学研究所

1. はじめに

関東地方西部に位置する埼玉県三芳町域とその周辺には、富士、赤城、浅間、榛名など関東地方とその周辺に分布する火山のほか、中部地方や中国地方さらには九州地方など遠方に位置する火山から噴出したテフラ(火山砕屑物、いわゆる火山灰)が数多く降灰している。とくに後期更新世以降に降灰したそれらの多くについては、層相や年代さらに岩石記載的な特徴がテフラ・カタログ(町田・新井・1992・2003・2011)などに収録されており、考古遺跡などで調査分析を行いテフラを検出することで、地形や地層の形成年代さらには考古学的に遺物や遺構の年代などに関する研究を実施できるようになっている。

三芳町中東遺跡第6地点(4次)の発掘調査でも、詳細な層位や年代が不明な旧石器時代遺物やテフラ層などが検出されたことから、地質調査を実施して土層やテフラ層の記載を行うとともに、高純度で分析試料を採取し、実験室内でテフラ分析(火山ガラス比分析・火山ガラスの屈折率測定)を実施して、すでに年代が明らかにされている指標テフラの検出同定を実施することになった。調査分析の対象は、3D-39グリッド西壁である。

2. 調査分析地点の土層層序

第6地点(4次)の基本的な土層断面が認められた3D-39グリッド西壁では、下位よりやや灰色がかった黄褐色土(層厚16cm以上 10層)、暗灰褐色土(層厚15cm)、赤色細粒スコリア混じり暗灰褐色土(層厚9cm スコリアの最大径2mm以上9層)、灰褐色土(層厚10cm 8層)、赤色細粒スコリア混じりで黄色がかった灰褐色土(層厚17cm スコリアの最大径2mm 7層)が認められる(第62図)。これらのうち、最上位の7層の最上部約5cmには、光沢のある火山灰粒子が混在している。

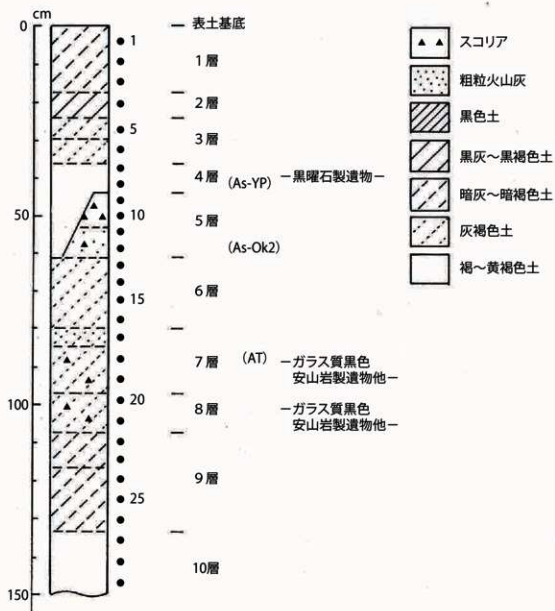
7層の上位には、さらに下位より灰褐色土(層厚19cm 6層)、赤色細粒スコリアや白色粗粒火山灰を含むやや灰色がかった褐色土(層厚8cm スコリアの最大径2mm)、赤色細粒スコリアを多く含む褐色土(層厚9cm以上5層)、褐色土(層厚8cm 4層)、やや灰色がかった褐色土(層厚6cm)、灰褐色土(層厚6cm以上3層)、黒灰褐色土(層厚7cm 2層)、暗灰褐色土(層厚17cm 1層)が認められる。発掘調査では、8層および7層からガラス質黒色安山岩製遺物他が、また4層から黒曜石製遺物が出土している。

3. 火山ガラス比分析

(1) 分析試料と分析方法

3D-39グリッド西壁において、層界にかからないように基本的に厚さ5cmごとに設定された試料のうち、1試料おきを中心とした11試料を対象に、火山ガラスの形態色調別含有率、また軽鉱物や重鉱物の含有率を求める火山ガラス比分析を実施して、ガラス質テフラの降灰層準を求めた。火山ガラス比分析の手順は次のとおりである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 恒温乾燥器により80℃で恒温乾燥。



第 62 図 中東遺跡第 6 地点 (4 次) 3D-39 グリッド西壁の土層柱状図

- 4) 分析篩により 1/4 ~ 1/8mm と 1/8 ~ 1/16mm の粒子を篩別。
 5) 偏光顕微鏡下で 1/4 ~ 1/8mm の 250 粒子を観察し、火山ガラスの形態色調別含有率、また軽鉱物や重鉱物の含有率を求める。

(2) 分析結果

火山ガラス比分析の結果をダイアグラムにして第 63 図に、その内訳を第 9 表に示す。3D-39 グリッド西壁においては、最下位の試料 22 をのぞく全試料から、無色透明パブル型ガラスが検出された。とくに、試料 17 および試料 16 にその明瞭な出現ピークが認められる。それぞれにおける無色透明パブル型ガラスの含有率は、27.2% および 26.8% である。

また、試料 12 には、さほど顕著ではないものの、塊状や破片状の分厚い中間型ガラスが比較的多く含まれている (2.4%)。さらに、試料 8 では中間型の火山ガラスがより多い傾向にある (4.8%)。これらの試料には、ほかに繊維束状軽石型やスポンジ状軽石型の火山ガラスも少量含まれている。

これらのほかには、分析対象試料中で最下位の試料 22 に、スポンジ状軽石型 (2.0%) や中間型 (1.2%) の火山ガラスが、上下の試料と比較してより多く含まれている。

4. 屈折率測定 (火山ガラス)

(1) 測定試料と測定方法

3D-39 グリッド西壁における火山ガラス比分析によって特徴的な火山ガラスが検出された試料 17、試料 12、試料 8 の 3 試料を対象に、含まれる火山ガラスの屈折率測定を実施した。測定は、温度変化型屈折率測定法 (増原 1993) による。測定対象とした火山ガラスは、テフラ検出分析後に分析篩による篩別で得られた 1/8 ~ 1/16mm 粒子の中の火山ガラスである。

(2) 測定結果

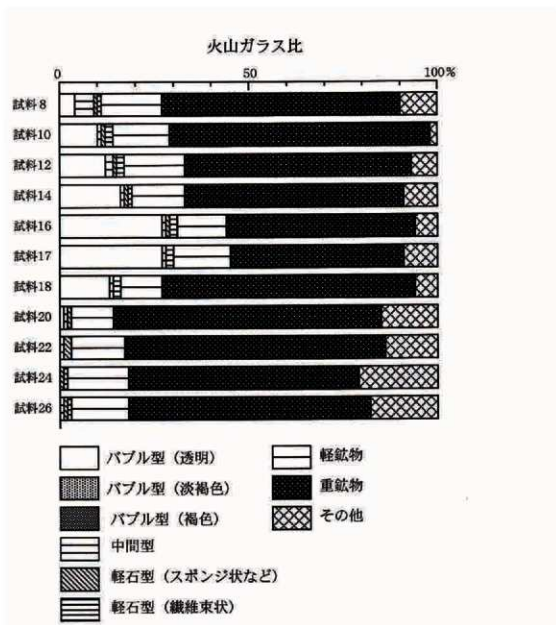
屈折率の測定結果を第 10 表に示す。この表には、関東地方の後期旧石器時代以降の代表的指標テフラの火山ガラスの屈折率特性も示した。

3D-39 グリッド西壁の試料 17 に含まれる火山ガラス (34 粒子) の屈折率 (n) は、1.499-1.501 である。試料 12 に含まれる火山ガラス (33 粒子) の屈折率 (n) は、1.499-1.503 である。さらに、試料 8 に含まれる火山ガラス (31 粒子) の屈折率 (n) は、1.499-1.503 である。

5. 考察

テフラ分析対象試料のうち、試料 17 (7 層上部) や試料 16 (6 層最下部) に多く含まれる無色透明のパブル型ガラスは、その形態や色調、そして屈折率特性から、約 2.8 ~ 3 万年前に南九州地方始良カルデラから噴出した始良 Tn 火山灰 (AT 町田・新井 1976・2011 など) に由来すると考えられる。7 層上部では、光沢をもつ火山灰粒子 (パブル型ガラス) が断面でも肉眼観察で認められたことから、ここでは、試料 17 付近 (7 層上部) に AT の降灰層があると考えておく。

火山ガラスの形態や色調、さらに屈折率特性をみると、試料 12 (5 層下部) にも AT 起源の火山ガラスが含まれていると考えられるが、この試料には、さらに中間型ガラスが上下の試料よりわずかながら多く含まれている。そして、屈折率が AT より高い火山ガラスも認められる。火山ガラスの形態や屈折率特性から、試料 12 (5 層下部) には、AT のほかに、約 1.6 万年前 *1 に浅間火山から噴出した浅間大窪沢第 2 軽石 (As-Ok2 中沢ほか 1984、町田・新井 1992・2003・2011、早田 1996 など) が混



第 63 図 3D-39 グリッド西壁の火山ガラス比ダイアグラム。

地点	試料	bw(cl)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	軽鉱物	重鉱物	その他	合計
30-39グリッド西壁	8	11	0	0	12	1	2	41	157	26	250
	10	26	0	0	2	1	4	38	173	6	250
	12	30	0	0	6	1	5	40	150	18	250
	14	41	0	0	2	1	3	34	147	22	250
	16	67	0	0	1	2	4	32	127	17	250
	17	68	0	0	1	0	5	38	115	23	250
	18	32	0	0	0	3	4	27	168	16	250
	20	1	0	0	1	1	0	28	180	39	250
	22	0	0	0	3	5	0	34	174	34	250
	24	0	0	0	0	1	2	40	152	55	250
	26	0	0	0	1	1	1	38	165	44	250

bw:バブル型, md:中間型, pm:軽石型, cl:無色透明, pb:淡褐色, br:褐色, sp:スポンジ状, fb:繊維束状, 数字は粒子数。

第 9 表 3D-39 グリッド西壁の火山ガラス比分析結果

在していると考えられる。

試料8(4層)にも、火山ガラスの形態や色調、さらに屈折率特性をみると、AT起源の火山ガラスが含まれていることがわかる。ただし、ここでは、試料12(5層下部)よりさらに中間型ガラスの含有率が高い。この試料8に含まれる火山ガラス全体の屈折率特性も、試料12(5層下部)と同じように、AT以外のテフラの混在を示唆している。試料12(5層下部)と同じように、おもに中間型ガラスで特徴づけられるテフラは、層位のほか、火山ガラスの形態やATより高めの屈折率特性から、約1.5～1.65万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石(As-YP 新井 1962、町田・新井 1992・2003・2011)と考えられる。

以上のように、3D-39グリッド西壁では、7層上部にAT、5層下部にAs-Ok2、そしていわゆるソフトローム層である3層中にAs-YPの降灰層準があると考えられる。このことから、8層から7層にかけて出土したガラス質黒色安山岩製他の多くはATより下位、また、4層中から出土した黒曜石製遺物は少なくともAs-Ok2より上位で、As-YPよりさらに上位の可能性も指摘される。

これらのテフラのほかにも、今回の分析では、As-Ok2とAs-YPの間(5層上部)に赤色の細粒スコリアが多く存在していることも明らかになった。また、試料22(9層最上部)付近に、スポンジ状軽石型や中間型の火山ガラスが比較的多く含まれていることがわかった。その起源として可能性があるテフラとしては、約3万年前*1の榛名箱田テフラ(Hr-HA 早田 1996)や、おそらくそれより下位にある八ヶ岳4テフラ(Yt-Om4 Kawachi et al. 1967 中谷 1970、町田・新井 1992・2003・2011)などが挙げられよう。これらのテフラは、関東地方西部において後期旧石器時代初頭の編年研究に重要なことから、さらに調査分析を実施して、層位や堆積年代について情報収集を行う必要がある。

6. まとめ

三芳町中東遺跡第6地点(4次)において、地質調査とテフラ分析(火山ガラス比分析・火山ガラスの屈折率測定)を実施した。その結果、下位より始良Tn火山灰(AT 約2.8～3万年前)、浅間大窪沢第2軽石(As-Ok2 約1.6万年前*1)、浅間板鼻黄色軽石(As-YP 約1.5～1.65万年前)などの後期旧石器時代指標テフラの降灰層準を検出することができた。また、As-Ok2とAs-YPの間に、現段階において詳細が不明なスコリアも検出した。発掘調査によりガラス質黒色安山岩製遺物他が出土した7～8層の層位はATより下位、また黒曜石製遺物が出土した4層の層位はAs-Ok2より上位で、さらにAs-YPより上位の可能性もある。

*1 放射性炭素(14C)年代。ATおよびAs-YPの14Cは、約2.4～2.5年前と約1.3～1.4万年前である(町田・新井 1992・2003など)。なお、関東地方北西部における後期旧石器時代の指標テフラの年代推定に関する諸問題については、関口ほか(2011)に詳しい。

文献

- 新井房夫(1962)「関東盆地北西部地域の第四紀編年」群馬大学紀要自然科学編10 p.1-79.
 新井房夫(1972)「斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロロジーの基礎的研究」第四紀研究11 p.254-269.
 新井房夫(1993)「温度一定型屈折率測定法」日本第四紀学会編『第四紀試料分析法2』東京大学出版会 p.136-149.

- 新井房夫(1979)「関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層」考古学ジャーナル no.53 p.41-52.
- 荒牧重雄(1968)「浅間火山の地質」地研専報 no.14 p.1-45.
- 埴原 徹(1993)「温度変化型屈折率測定法」日本第四紀学会編『第四紀試料分析法2』東京大学出版会 p.149-158.
- Kawachi, S., Nakaya, S. and Muraki, K. (1967) YPm-IV pumice bed in northern Yatsugatake volcanic chain, central Japan - studies on Yatsugatake tephra Part I - Bull. Geol. Surv. Japan, 29, p.21-33.
- 町田 洋・新井房夫(1976)「広域に分布する火山灰-始良 Tn 火山灰の発見とその意義-」科学 46 p.339-347.
- 町田 洋・新井房夫(1992)『火山灰アトラス』東京大学出版会 276p.
- 町田 洋・新井房夫(2003)『新編火山灰アトラス』東京大学出版会 336p.
- 町田 洋・新井房夫(2011)『新編火山灰アトラス(第2刷)』東京大学出版会 336p.
- 中谷 進(1970)「ハヶ岳東麓のテフラ-特に八那池軽石流を覆うテフラ層中の軽石-」雑 no.3 p.30-35.
- 中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦(1984)「浅間火山, 黒班~前掛期のテフラ層序」日本第四紀学会講演要旨 no.14 p.69-70.
- 関口博幸・早田 勉・下岡順直(2011)「群馬の旧石器編年のための基礎的研究-関東地方北西部における石器群の出土層位、テフラ層序、数値年代の整理と検討-」群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要 29 p.1-20.
- 早田 勉(1996)「関東地方~東北地方南部の示標テフラの諸特徴-とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて-」名古屋大学加速器質量分析計業績報告書 7 p.256-267.

地点・試料・テフラ	火山ガラス		備考
	屈折率(n)	測定点数	
中東遺跡第6地点(4次)調査区			
3D-39グリッド西壁・試料8	1.499-1.503	31	本報告
3D-39グリッド西壁・試料12	1.499-1.503	33	本報告
3D-39グリッド西壁・試料17	1.499-1.501	34	本報告
〈後期旧石器時代以降の指標テフラ〉			
浅間A(As-A, 1783年)	1.507-1.512		1)
浅間粕川(As-Kk, 1128年)	未報告		2)
浅間B(As-B, 1108年)	1.524-1.532		1)
榛名二ツ岳洪川(Hr-FA, 6世紀初頭)	1.500-1.502		1)
浅間C(As-C, 3世紀後半)	1.514-1.520		1)
鬼界アカホヤ(K-Ah, 約7,300年前)	1.506-1.513		1)
浅間板鼻黄色(As-YP, 約1.5~1.65万年前)	1.501-1.505		1)
浅間大窪沢2(As-Ok1, 約1.6万年前*)	1.502-1.504		1)
浅間板鼻褐色(群)(As-BP Group)	上部	1.515-1.520	1)
	中部	1.508-1.511	1)
	下部	1.505-1.515	1)
始良Tn(AT, 約2.8~3万年前)	1.498-1.501		1)
榛名箱田(Hr-HA, 約3万年前*)	未報告		2)
ハヶ岳4(Yt-Pm4)	未報告		1)

1):町田・新井(2011), 2):早田(1996), *:放射性炭素(^{14}C)年代.

本報告:温度変化型屈折率測定法(埴原, 1993), 1):温度一定型屈折率測定法(新井, 1972, 1993).

中東遺跡第6地点(4次)テフラ試料顕微鏡写真



0.2mm

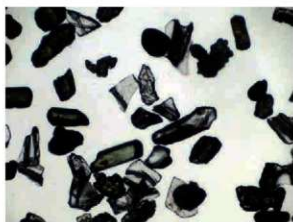
写真1 第6地点(4次)3D-39グリッド西壁・

試料8(透過光)

中央右:中間型ガラス(塊状)。

中央左:繊維束状軽石型ガラス。

中央上ほか:斜方輝石。



0.2mm

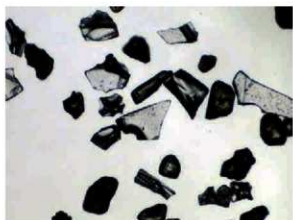
写真2 第6地点(4次)3D-39グリッド西壁・

試料12(透過光)

中央:中間型ガラス(塊状)。

中央左上ほか:バブル型ガラス(無色透明)

中央左下ほか:斜方輝石。



0.2mm

写真3 第6地点(4次)3D-39グリッド西壁・

試料17(透過光)

中央ほか:バブル型ガラス(無色透明)。

中央下:繊維状軽石型ガラス。

II. 中東遺跡第6地点(4次)における植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸(SiO₂)が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法で、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山 2000)。

2. 分析試料

分析試料は、第6地点(4次)3D-39グリッドから採取された4点である。試料採取層位を分析結果の柱状図(第64図)に示す。

3. 分析方法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法(藤原 1976)を用いて次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥(絶乾)。
- 2) 試料約1gに対し直径約40 μ mのガラスビーズを約0.02g添加(0.1mgの精度で秤量)。
- 3) 電気炉灰化法(550℃・6時間)による脱有機物処理。
- 4) 超音波水中照射(300W・42KHz・10分間)による分散。
- 5) 沈底法による20 μ m以下の微粒子除去。
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成。
- 7) 検鏡・計数。

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的に与えることができる(杉山 2000)。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率およびメダケ率(メダケ属とササ属の比率)を求めた。

4. 分析結果

(1) 分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第11表及び第64図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

キビ族型、ウシクサ族A(チガヤ属など)、Bタイプ

[イネ科-タケ亜科]

ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)、チマキザサ節型(ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など)、ミヤコザサ節型(ササ属ミヤコザサ節など)、未分類等

〔イネ科—その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体(おもに結合組織細胞由来)、未分類等

(2) 植物珪酸体の検出状況

下位の8層(試料6)では、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が比較的多く検出され、ウシクサ族A、イネ科Bタイプ、ネザサ節型なども認められた。イネ科Bタイプはヌマガヤ属に類似しており、氷期の湿地性堆積物などで検出される事例が多い。7層(試料5)では、チマキザサ節型が減少し、イネ科Bタイプは見られなくなっている。5層(試料2)から4層(試料1)にかけては、キビ族型が出現し、ミヤコザサ節型は減少している。メダケ率は、各層準とも5~7%と低い値である。

5. まとめにかえて—植物珪酸体分析から推定される植生と環境

下位の8層から7層にかけては、ササ属(チマキザサ節やミヤコザサ節)などの笹類をはじめ、ウシクサ族などが生育するイネ科植生であったと考えられ、8層ではイネ科Bタイプの給源植物も見られたと推定される。5層から4層にかけては、キビ族が見られるようになり、ササ属はやや減少したと推定される。

タケ亜科のうち、メダケ属は温暖、ササ属は寒冷な気候の指標とされており、メダケ率(両者の推定生産量の比率)の変遷は、地球規模の水期—間水期サイクルの変動と一致することが知られている(杉山・早田 1996、杉山 2001・2010)。8層から4層にかけてはメダケ率が5~7%と低いことから、当時は寒冷—冷涼な気候条件で推移したと推定される。

文献

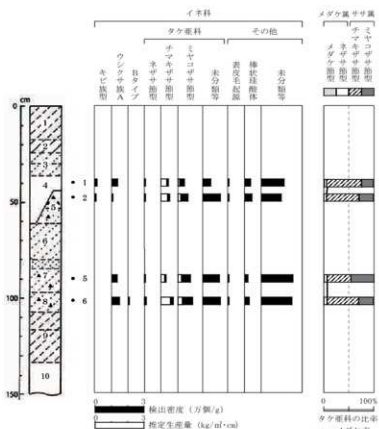
- 杉山真二・藤原宏志(1986)「機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定—古環境推定の基礎資料として—」考古学と自然科学 no.19 p.69-84.
- 杉山真二(2000)「植物珪酸体(プラント・オパール)」辻 誠一郎編『考古学と植物学』同成社 p.189-213.
- 杉山真二(2001)「テフラと植物珪酸体分析」月刊地球 23 p.645-650.
- 杉山真二(2010)「更新世の植生と環境」稲田孝司・佐藤宏之編『旧石器時代 講座日本の考古学第1巻』青木書店 p.156-177.
- 杉山真二・早田勉(1996)「植物珪酸体分析による遺跡周辺の古環境推定(第3報)」『一宮城県高森遺跡周辺における約50万年間の気候変動—』日本文化財科学会第13回大会研究発表要旨集 p.68-69.
- 藤原宏志(1976)「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法—」考古学と自然科学 no.9 p.15-29.

検出密度 (単位: ×100個/g)		地点・試料			
分類群	学名	中東道跡第6地点(4次)			
		1	2	5	6
イネ科	Gramineae				
キビ族型	Panicaceae type	14	7		
ウシクサ族 A	Andropogoneae A type	35	7	33	47
Bタイプ	B type				7
タケ亜科	Bambusoideae				
ネザサ節型	<i>Pleoblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	7	7	7	13
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	49	57	33	80
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	42	64	80	93
未分類等	Others	49	107	100	107
その他のイネ科	Others				
表皮毛起源	Husk hair origin	7	7	7	7
棒状珪酸体	Rod-shaped	35	43	20	27
未分類等	Others	139	121	193	187
植物珪酸体総数	Total	374	421	473	567

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m ² ・cm)		試料の仮比重を1.0と仮定して算出			
ネザサ節型	<i>Pleoblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	0.03	0.03	0.03	0.06
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	0.36	0.43	0.25	0.60
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	0.12	0.19	0.24	0.28

タケ亜科の比率 (%)					
ネザサ節型	<i>Pleoblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	6	5	6	7
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	70	65	48	64
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	24	29	46	30
メダケ率	Medake ratio	6	5	6	7

第11表 中東道跡第6地点(4次)3D-39グリッドにおける植物珪酸体分析結果



第64図 3D-39グリッドにおける植物珪酸体分析結果



植物珪酸体(プラント・オパール)の顕微鏡写真

第VI章 総括

中東遺跡第6地点(4次)・第7地点の調査により、これまで述べてきたような成果をあげることができた。ここでは、得られた情報を元に資料分析を行い、若干の考察をすることで本書の総括としたい。

【第6地点(4次)】

1. 石器集中の層位について

第6地点(4次)の調査では、旧石器時代の遺構として、複数の層位から石器集中14箇所・礫群1箇所が確認された。これら石器集中の特徴について、以下に述べる。

(1) 第Ⅲ層

調査区の中央部付近で石器集中1～3が確認された。石器集中1は石器集中6と重複するが、現場での出土状況や遺物の垂直分布などから、明確に分割されるものと判断した。石器集中2及び3はいずれも散漫な分布を示すが、周囲を精査しても密集部は確認できなかったことから、それぞれを小規模な石器集中として認識した。

(2) 第Ⅴ層

調査区の北東端部で石器集中4が確認された。石器集中10と近接するが、遺物の垂直分布などから分割されるものと判断した。北東に隣接する第3地点で確認された第Ⅴ層の続きと考えられ、本石器集中がその西端にあたるものと想定される。

(3) 第Ⅵ層

調査区の中央部東寄りで石器集中5が確認された。石器集中14と重複するが、一旦、遺物の出土が収束した後、下層でまた出土し始めたという現場での所見から、明確に分割されるものと判断した。ホルンフェルスの礫を台石として使用し、その周囲にナイフ形石器をはじめとした石器が出土している。

(4) 第Ⅶ層

調査区の中央部付近から南西方向にかけて石器集中6～9及び礫群1が確認された。調査区の西へ向かうほど上層の堆積が薄く、現場での層位の把握は困難を極めたが、遺物の垂直分布などから第Ⅶ層に属すると判断した。石器集中6では他と比較してナイフ形石器が多く出土している。また、現場で認識することはできなかったが、整理作業の段階で石器集中9に重複する形で礫群1を設定した。

(5) 第Ⅶ層～第Ⅸ層

調査区の北東部及び中央部北東で石器集中10～14が確認された。石器集中10は北東端部に位置し、おそらく調査区外まで広がるものと想定される。また、石器集中13と石器集中14は主体となる石材が異なるものの、遺物出土のピークがほぼ同じであることから、同時に存在したものと判断される。

2. 出土した石器について

第6地点(4次)の調査では、石器516点・礫70点が出土した。石器の器種構成は、石器集中に伴うものだけでも、ナイフ形石器・二次加工のある剥片・使用痕のある剥片・剥片(小型・縦長・調整含む)・砕片・石核・石刃・錐・楔形石器・敲石など、バリエーションに富む。また、石器の石材については、黒曜石・チャート・凝灰岩・ガラス質黒色安山岩・頁岩・珪質頁岩・ホルンフェルス・砂岩などこれも多種にわたっているが、石器集中のあり方や出土の垂直分布から、時期によって以下のような傾向が伺われる。

第Ⅶ層～第Ⅸ層では、石器集中13で凝灰岩を主体とした構成である以外は、チャートが圧倒的な点数比を占める。第Ⅶ層では、ガラス質黒色安山岩と頁岩がほぼ同率の点数比で多数を占め、チャートや

凝灰岩がこれに続く状況となる。第Ⅵ層・第Ⅴ層・第Ⅲ層については黒曜石が主体を占め、第Ⅴ層のホルンフェルス(Ho_2)を除いて、その他の石材について点数比でわずか数%ずつである。つまり、チャート(第Ⅶ層～第Ⅸ層)→ガラス質黒色安山岩・頁岩(第Ⅶ層)→黒曜石(第Ⅵ層→第Ⅴ層→第Ⅲ層)と利用される石材が変化している。

こうした時期による石材利用の変化は、中東遺跡の他調査地点や同様周辺遺跡でもほぼ同様の傾向を確認することができる。第6地点(4次)の南東に位置する中東遺跡第2地点・第3地点の調査では、第Ⅸ層(第2地点)で黒曜石が点数比98%、第Ⅶ層下部(以下第3地点)でチャートが点数比67%・頁岩が同30%、第Ⅴ層及び第Ⅲ層については、黒曜石がともに点数比97%となる。一方、第6地点(4次)とは埋没谷を挟んで対岸にあたる第1地点の調査では、第Ⅶ層で黒曜石が点数比80%(この黒曜石の一群は、器種の特徴や石材の肉眼観察の特徴などから、第Ⅸ層に遡る可能性も指摘されている^(*))、第Ⅵ層でチャートが点数比42%・黒曜石が同38%と拮抗する。さらに、中東遺跡と同じ埋没谷の下流に位置する藤久保東遺跡では、第Ⅸ層で黒曜石が点数比70%台、第Ⅶ層で頁岩が点数比40%・凝灰岩が同27%、第Ⅲ層で再び黒曜石が点数比98%と主体を占める。

以上のように、今回の調査地点の石材利用の傾向は他の事例と比較しても大きな相違はなかったが、このことはむしろ、石材獲得や石材利用など同じような行動パターンを持った人々が、他地点や他の遺跡といったいろいろな場所で石器作りの痕跡を残したであろうということが想像される。今後は地点間・遺跡間の接合関係なども確認することで、より広い視野で人々の移動や遺跡の位置づけを考えていきたい。

【第7地点】

第7地点の調査では、縄文時代の集石が1箇所確認された。土器片や石器など集石に伴う遺物は出土しなかったが、検出状況などから縄文時代の遺構と判断した。確認された集石は、一部で掘削の影響を受けて破壊され、その他の部分についても表土直下ということで少なからず影響を受けたと思われるが、比較的良好に残存していたといえる。礫を包含する明確な遺構は確認できなかったが、礫の重量別分布図(第60図)を見ると、おおそ黒褐色土の範囲に赤化し煤の付着した礫が集中していることから、この位置で火を焚いたであろうことが想定される(ただし、覆土中への焼土や炭化物の含有はなかった)。また、石材別分布図(第59図)や接合した礫の残存状態から、ほとんどの礫片が他へ持ち出されることなく、集石1の中で完結していることがわかる。

これまで三芳町では、古井戸山遺跡や俣埜遺跡など、比較的縄文時代の遺構が多い遺跡で集石が確認されていた。今回の調査で初めて集石が確認された中東遺跡は、旧石器時代を主とする遺跡と捉えられていたが、今後は旧石器時代第Ⅲ層から続く縄文時代の遺構についても、注視して調査にあたる必要が出てきたといえる。

(註1 石器文化研究会資料見学の際の指摘による。)

<参考文献>

- 柳井章宏 1996『中東遺跡発掘調査報告書』 三芳町教育委員会
 石器文化研究会 2006『第11回 石器文化研究交流会発表要旨』
 松本富雄・柳井章宏・大久保淳 2009『藤久保東遺跡Ⅱ』 三芳町教育委員会
 大久保淳 2011『中東遺跡第2地点・第3地点』 三芳町教育委員会

写真図版



中東遺跡のある日の夕焼け



第6地点 (4次) 調査前全景 (南東から)



重機表土剥ぎ



調査風景



測量杭打ち作業



第Ⅲ層 石器集中1 (北から)



石器集中1 遺物出土状況 (北から)



石器集中1 遺物出土状況 (近景)



石器集中1 ナイフ形石器



石器集中1 二次加工のある剥片



石器集中1 錐



第Ⅲ層 石器集中3（西から）



石器集中3 二次加工のある剥片



第Ⅵ層 石器集中5（北から）



石器集中5 土層堆積状況（北から）



石器集中5 遺物出土状況（南から）



石器集中5 台石



第Ⅶ層 石器集中6 (西から)



石器集中6 ナイフ形石器



石器集中6 剥片



石器集中6 二次加工のある剥片



石器集中6 二次加工のある剥片



第Ⅶ層 石器集中7 (南から)



石器集中7 石核



石器集中7 敲石及び剥片



石器集中7 剥片



石器集中7 剥片



第Ⅶ層 石器集中 8 (南から)



石器集中 8 土層堆積状況 (西から)



石器集中 8 石核



石器集中 8 剥片



第Ⅶ層 石器集中 9 (東から)



石器集中 9 土層堆積状況 (南から)



石器集中 9 二次加工のある剥片



石器集中 9 二次加工のある剥片



第Ⅶ層 礫群1 (石器集中9と重複)



礫群1 (近景)



第Ⅶ層～第Ⅸ層 石器集中10・石器集中11 (北西から)



石器集中10 剥片



石器集中10 土層堆積状況 (西から)



第Ⅶ層～第Ⅸ層石器集中 12 (北から)



石器集中 12 土層堆積状況 (西から)



石器集中 12 遺物出土状況 (近景)



石器集中 12 剥片



石器集中 12 敲石



第Ⅶ層～第Ⅸ層石器集中 14 調査風景



石器集中 14 土層堆積状況（南から）



第6地点（4次） 調査区全景（南西から）



第6地点（4次） 調査区全景（南東から）



整理事業風景



第7地点 調査前全景(南西から)



調査風景



測量杭打ち作業



3区 遺構精査状況



3区 礫出土状況



2区 旧石器時代剥片



集石1(近景)



集石1(近景)



縄文時代集石1 (東から)



第7地点 調査区全景 (北西から)



4区 土層堆積状況 (南から)



重機埋め戻し



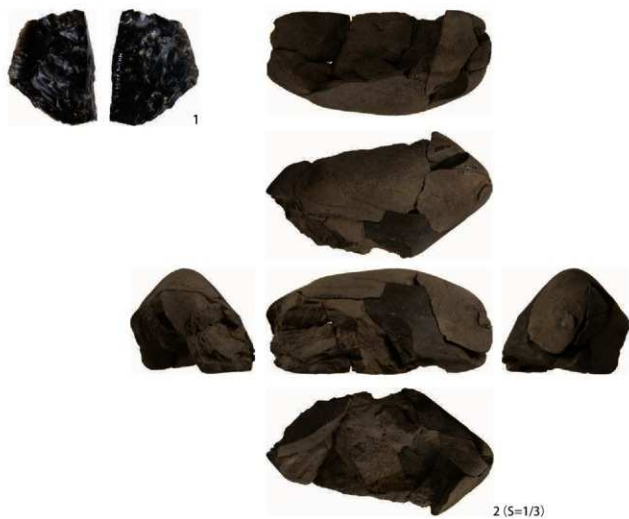
整理事業風景

<Ⅲ層出土石器>





<第V層出土石器>



<第VI層出土石器>





5



6



台石 (S=1/2)

<第Ⅶ層出土石器>



1



2



3



5



4



6



7





21 (S=3/4)



19 (S=3/4)



16 (S=3/4)



17 (S=3/4)



22 (S=3/4)

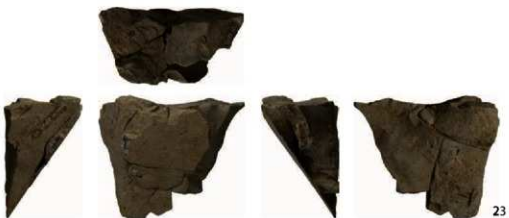


20 (S=2/3)



18 (S=3/4)

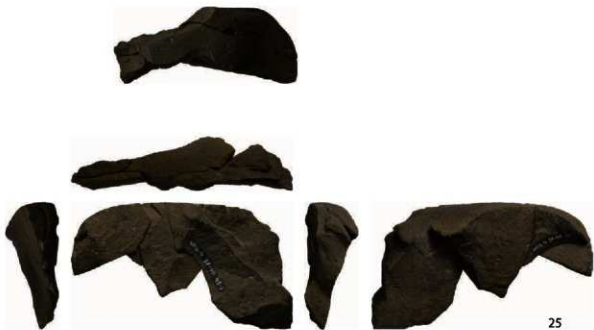




23



24



25



26



27 (S=3/4)



29



30





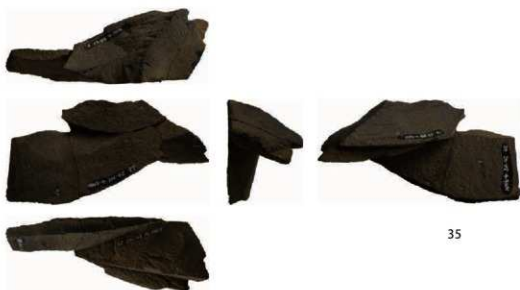
31



32



33 (S=3/4)



<新石器时代遗址出土石器>





4 (S=3/4)



5 (S=3/4)





6



7



8 石器集中 14 Ch. 15 S=1/2
 (接合資料 -S1V- IX) 2Y-34.0001+0002+
 0004+0006+0007+0008+0009+0010+0011+
 0013+0014+0015+0016+0017+0019+0020+
 0022+0026+0028+0030)



8 - A 部 S=1/2



8 - B 部 S=1/2

<第II層(縄文時代)出土石器>



1



2



3

<試掘調査出土遺物・遺跡内採集遺物>



1



2



3



5



6



8



7



9 (S=3/4)



4 (S=3/4)



10

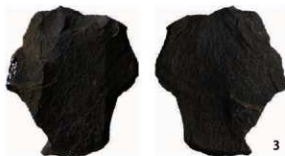
<第7地点出土石器>



1



2



3

報告書抄録

ふりがな	なかひがしいせきだいろくちてん (よじ)・だいななちてん はつくつちょうさほうこくしよ						
書名	中東遺跡第6地点(4次)・第7地点発掘調査報告書	巻次					
副書名							
巻名							
シリーズ名	三芳町埋蔵文化財報告						
シリーズ番号	41						
編著者名	越前谷 理						
編集機関	三芳町教育委員会						
所在地	〒354-8555 埼玉県入間郡三芳町大字藤久保1100番地1						
発行年月日	2016年(平成28年)3月22日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 東経	調査期間	調査 面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡 番号				
なかひがしいせきだいろくちてん(よじ) 中東遺跡第6地点(4次)	かみとめ 上富163-2の一部。 168-13	113247	32-020	35° 50' 09"	20140509	746	倉庫増築
				139° 30' 21"	20141031		
なかひがしいせきだいなちてん 中東遺跡第7地点	かみとめ 上富168-13-14			35° 50' 11"	20141003	285	
				139° 30' 24"	20141128		
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項	
中東遺跡第6地点(4次)	キャンプ跡	旧石器		第Ⅲ層石器集中3、第Ⅴ層石器集中1、第Ⅵ層石器集中1、第Ⅶ層石器集中4・ 礫群1、第Ⅶ層～第Ⅸ層石器集中5	ナイフ形石器・石刃 敲石・二次加工のある 剥片・使用痕のある 剥片・石核等	立川ローム 複数の層から多数の石器集中が確認された。	
中東遺跡第7地点	集落跡	縄文		縄文時代集石1	礫等	礫192点 からなる縄 文時代の集 石が確認さ れた。	

三芳町埋蔵文化財報告 41

中東遺跡第 6 地点 (4 次)・第 7 地点

発掘調査報告書

発行日 平成 28 年 3 月 22 日

編集機関 三芳町教育委員会

入間郡三芳町大字藤久保 1100-1

Tel.049-258-0019

発行 三芳町教育委員会

印刷 梅田印刷株式会社